三重県埋蔵文化財調査報告 273

上野城下町遺跡発掘調査報告

― 東ノ竪町筋(第１～４次) ―

2006・3

三重県埋蔵文化財センター

序

上野城のある伊賀地域は、周囲を山に囲まれ、近畿地方と東海地方を結ぶ東西の結節点として古来より栄えた地域です。小高い丘陵に上野城を頂く城下町の景色は、いまなお古い町並みを随所に残す、情緒豊かな町です。ここには、毎年全国各地から多くの人々が観光に訪れている名所でもあります。

この度の発掘調査は、伊賀市中心部の道路拡幅に伴って行われたものです。発掘調査は、開発に伴う緊急発掘であり、調査と共に多くの遺跡が消滅しています。我々が現代社会をより豊かに暮らすために、開発は必要不可欠なものでもあります。そのため、失われていく遺跡を記録保存し、後世に伝えていくことは我々の使命であると考えております。今後は、こうして蓄積された成果を、より多くの人々に有効に活用されるよう努力していきたいと考えております。

なお、最後になりましたが、調査にあたりましては、地元近隣の方々をはじめ、上野商工会議所、伊賀市教育委員会、県土整備部の方々には多大なるご理解とご協力を頂きましたことについて、厚く御礼を申し上げます。

平成18年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　吉　水　康　夫

例　言

1　本書は三重県伊賀市上野東町から上野恵美須町にかけて所在する上野城下町遺跡の東ノ竪町地区の発掘調査報告書である。

2　調査は平成12・13・15・17年度街路整備事業伊賀上野橋新都市線に伴い、緊急発掘調査を行ったものである。

3　調査費用は県土整備部が全額負担した。

4　調査体制は以下の通りである。

調査主体：三重県教育委員会

調査担当：三重県埋蔵文化財センター

第１次　調査第一課　技師　新名　強

臨時技術補助員　濱辺一機

第２次・第４次　調査研究Ｉグループ　技師　新名　強

第３次　調査研究Ｉグループ　主査　山口聡嗣

臨時技術補助員　酒井巳紀子

5　当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センターの支援研究グループおよび調査研究Ｉグループが行った。本書の執筆は新名が行い、遺構の写真撮影は各担当者が、遺物の写真撮影は西村美幸が行った。

6　本書を作成するにあたっては、榎村寛之氏（斎宮歴史博物館）の御教示を得た。

7　本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

凡　例

＜地図類＞

1　本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、上野都市計画図（旧上野市）、街路事業上野橋新都市線工事図・一般国道163号国補道路交通安全対策（一種）工事図（三重県県土整備部）である。

2　これらの地図類は、国土地理院発行地形図を除き、国土調査法の日本測地系による座標第Ⅵ系（旧国土座標）で表現されているものであるため、平成14年度４月から施工されている世界測地系・測地成果2000には対応していない。

3　挿図の方位は、国土座標第Ⅵ系を基準とする座標北で示している。なお、磁北は６°50′西偏している。(平成12年、国土地理院)。

＜遺構類＞

4　土層図は、層の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。また、遺構面や層位の大区分となる層については、他の土層線よりも太い線で表現した。

5　土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』(第９版1989年)を用いた。

6　当報告書での遺構番号は通番となっており、確認したものから順に付番している。

7　遺構図のうち、網掛けで示した部分は、焼土の範囲である。

8　本書で使用した遺構表示略号は以下のとおりである。

ＳＤ：溝　ＳＦ：焼土　ＳＫ：土坑　Ｐｉｔ：柱穴・小穴

9　遺構は、調査時に付加した遺構番号を基本的に踏襲しているが、今回の報告にあたって変更したものもある。その変更は遺構一覧表に示した。

＜遺物類＞

10　当報告での遺物実測図類は実物の１/４を基本としている。それ以外の縮尺のものについては、その都度指示している。

11　遺物実測図は、当報告書を通じて通番としている。

12　遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号 …… 挿図掲載番号である。

実測番号 …… 実測段階の登録番号である。

様・質 ……「弥生土器」「土師器」「須恵器」といった区分をここに示した。

器種など …… 遺物の器種を示す。

遺構・層名 …… 遺物の出土した遺構や層名を記した。

法量（㎝）…… 遺物の法量を示す。(口）は口縁部径、(底）は底部径、(高台）は高台部径、(脚柱）は脚部上端径、(脚裾）は脚台裾部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での接地点ではない。

調整・技法の特徴 …… 主な特徴を外面（外；）・内面（内；）で示した。「Ａ→Ｂ」はＡの後にＢが施されたことを示す。

胎土 …… 小石などの混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調 …… その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。

残存度 …… その部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分、12/12は全体が残っていることになる。

特記事項 …… 遺物の特徴となる事項を記した。

＜写真図版＞

13　挿図と写真図版の遺物番号は、それぞれの遺跡毎の実測図番号と対応している。

14　遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

本　文　目　次

Ⅰ　前言 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 3
Ⅲ　遺構 …… 5
Ⅳ　遺物 ……19
Ⅴ　結語 ……36
Ⅵ　付編　上野城跡立会調査 ……38

挿　図　目　次

第１図　調査区位置図 …… 2
第２図　遺跡位置図図 …… 3
第３図　Ｂ地区遺構平面図・土層断面図 …… 6
第４図　Ｃ地区遺構平面図・土層断面図 …… 7
第５図　Ｄ地区遺構平面図・土層断面図 …… 8
第６図　Ｈ地区遺構平面図・土層断面図 …… 9
第７図　Ｅ地区遺構平面図・土層断面図 ……10
第８図　Ｅ１～４地区遺構平面図 ……11
第９図　Ｆ地区遺構平面図・土層断面図 ……12
第10図　Ｇ・Ａ地区遺構平面図 ……13
第11図　Ｇ・Ａ地区土層断面図 ……14
第12図　Ａ２地区遺構平面図・
ＳＤ３石列立面図図 ……15
第13図　ＳＤ１平面図・立面図 ……15
第14図　Ａ２地区遺構平面図 ……15
第15図　ＳＤ２平面図・土層断面図 ……16
第16～21図　遺物実測図 ……24～29
【付編　上野城跡立会調査】
第22図　トレンチ平面図・土層断面図 ……38
第23図　調査区位置図 ……38

表　目　次

第１表　遺構一覧表 ……18
第２～７表　遺物観察表 ……30～35
第８表　調査区・城下町図対応一覧表 ……37

図　版　目　次

図版１～19　遺構写真 ……39～57
図版８～12　遺物写真 ……58～62

Ⅰ　前言

1　調査の契機

上野城下町遺跡東ノ竪町筋地区は、伊賀市中心部のメインストリート、いわゆる「銀座通り」に面した部分である。この通りは、市街地を通る主要幹線であり、観光客も多く訪れる所である。交通量が多い割に道幅が狭く、特に歩道が一方にしかなかったことから、道幅を拡幅して歩道を両側に整備する事となった。今回の発掘調査は、街路事業伊賀上野橋新都市線に伴い実施されたもので、調査範囲は上野東町から上野恵美須町にかけての区間である。

現地は、上野城下町の東大手通り（東ノ竪町筋）に面する部分で、城下町遺構が存在する可能性が極めて高いことから、遺跡保存の必要性が生じた。県土整備部および伊賀建設部との協議の結果、現状保存は困難であるとの結論に達し、改変を行う部分については記録保存を行うこととなった。調査については、側溝設置など軽微な改変については、その都度立会調査を行い、本線部分については、発掘調査を実施した。本線現道部分については、主要幹線であり交通量が多く、地下については改変を行わない事から、発掘調査は実施せず、現道西側の道路拡幅部分のみ調査を行うこととなった。拡幅部分は、およそ幅５ｍであったが、安全確保や歩道確保のため調査可能な部分は、幅３～４ｍ程であった。

調査は平成12年から平成17年にかけて実施され、調査面積は上下層を含めて、累計995㎡であった。各調査次の調査面積および調査期間は以下の通りである。

・第１次調査（平成12年度）　調査面積：300㎡
　調査期間：平成12年11月20日～平成13年１月30日
・第２次調査（平成13年度）　調査面積：550㎡
　調査期間：平成13年５月16日～同年10月15日
・第３次調査（平成15年度）　調査面積：100㎡
　調査期間：平成15年６月12日～同年６月23日
・第４次調査（平成17年度）　調査面積：45㎡
　調査期間：平成17年５月９日～同年５月12日

2　調査の目的

今回の調査地は、上野城下町の東大手通りに面する主要部分である。城下町遺跡は、ほぼ全域が市街地化しており、発掘調査の実施については、困難な要素が大きい。しかし、城下町遺跡の解明は、地域の歴史にとって重要なテーマであった。上野市教育委員会および上野市遺跡調査会においても、これまで武家屋敷や藩校跡などの調査を行い、大きな成果を挙げている。今回の調査では、調査区の幅は狭いものの、東大手通りのおよそ570ｍ区間を調査している。その間には、武家屋敷のみならず町人町屋や農人町屋部分も含まれており、各町の性格の違いや土地の利用方法など、城下町遺跡の実体解明を目指し、その成果を広く一般に公開することを目的としている。

3　調査の方法

(1) 地区設定・掘削方法について

大地区名は、通りの区切り毎にＡ～Ｈの８地区設定した。調査地が幅が３ｍ程度と狭く、また商店街であることから、調査は小規模な範囲で行い、調査順に数字を付している。なお、すでに住居建設などにより撹乱を受けている部分や、ガス・水道管などがまとまって埋設されていることが明らかな部分については調査を行っていない。

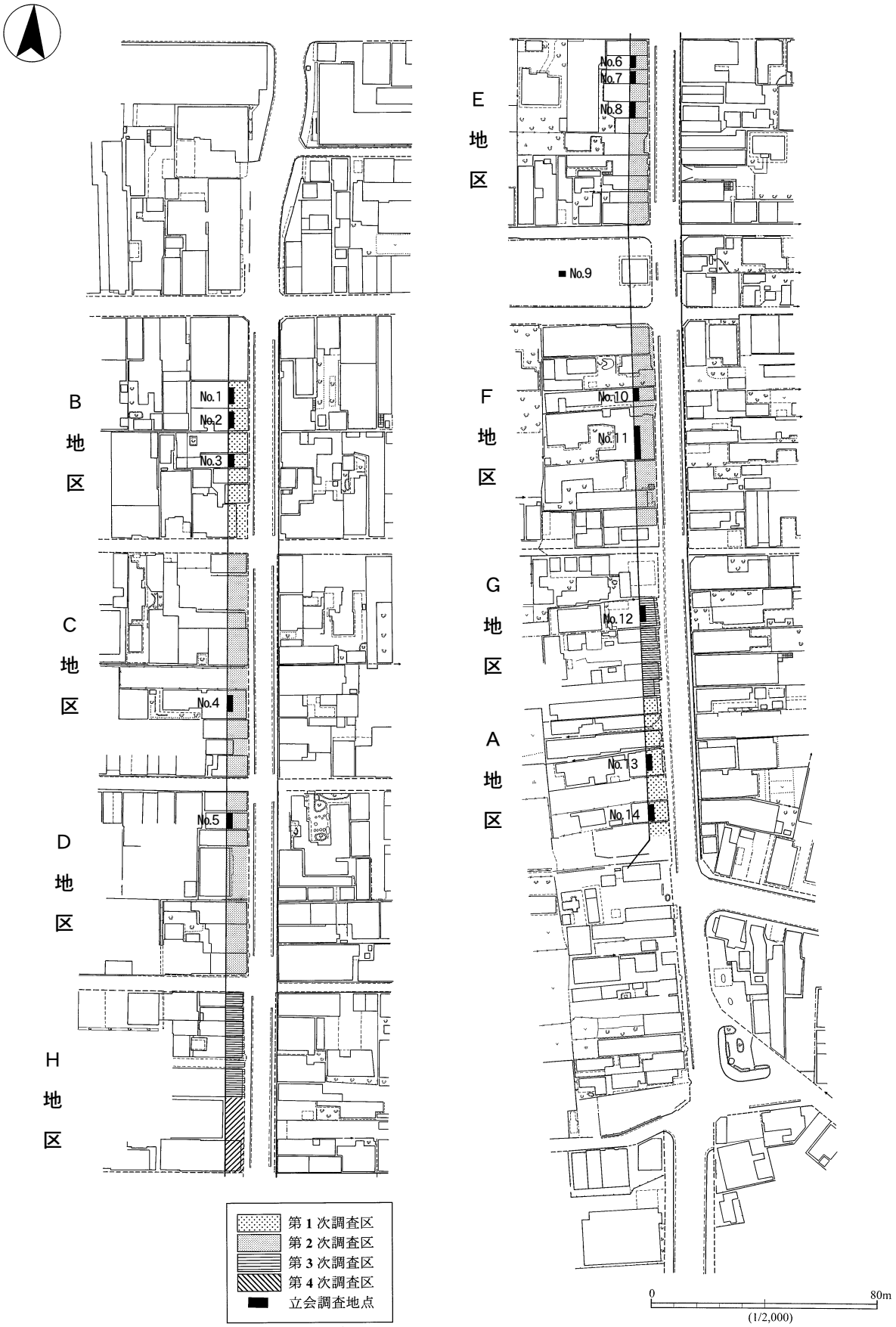
掘削については、表土および上下層間の包含層は重機にて行い、遺構面の検出は人力にて行っている。

(2) 遺構図面について

遺構平面図・土層断面図は1/20の縮尺で手描き実測を行い、個別遺構図については、遺構に応じて1/10・1/20の縮尺で実測を行っている。

(3) 記録写真について

遺構写真については、すべて35㎜カメラを使用して撮影を行った。遺物については室内にて６×９カメラを主体に、一部35㎜カメラを使用して撮影を行った。



第１図　調査区位置図（１：2,000）

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

上野城および上野城下町は、上野盆地の中央部に位置し、東南方向から伸びる洪積台地、いわゆる上野台地上に所在している。台地の北東先端部には丘陵部があり、上野城は標高160～180mの地点に位置する。上野城は、北を柘植川および服部川に、南を久米川、西を木津川に囲まれた要害の地である。

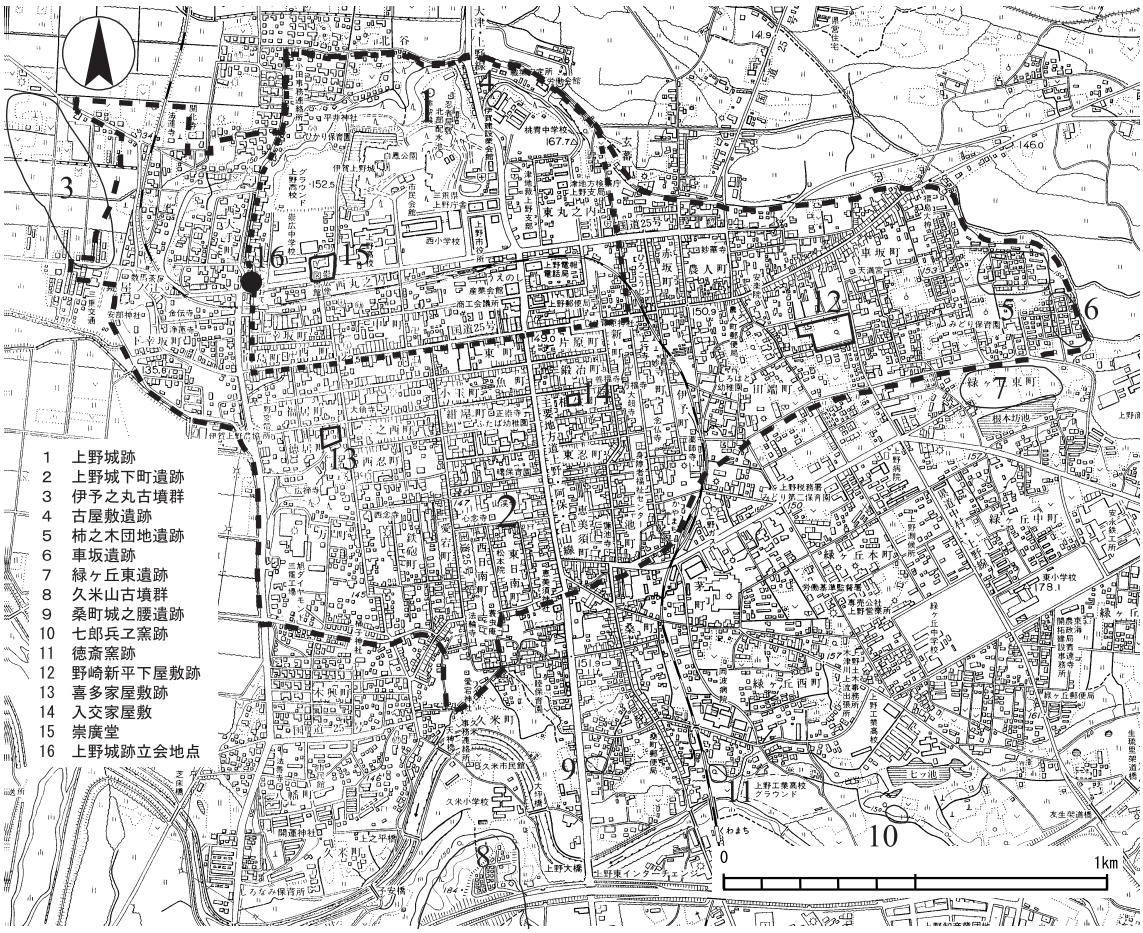
今回調査を行った部分は城の南側部分で、標高150m程の平坦な台地が広がり、南に向かって緩やかに傾斜している。台地は上野恵美須町の南で一旦低くなるものの、再び高くなり、上野桑町の南で再び低くなり、久米川へと至る。城下町図より判断して、城下町の南限は上野恵美須町と考えられる。

2　歴史的環境

上野台地上の遺跡については、ほとんどの範囲が上野城や城下町にしめられていることにより、中世以前の状況は明らかではない。

弥生時代の遺跡は、上野台地縁辺の古屋敷遺跡(３)や柿之木団地遺跡(４)、桑町城ノ腰(５)遺跡などで、サヌカイトや弥生土器等が採集されている。

古墳時代になると、上野城の二之丸（伊予丸）部分に伊予之丸古墳群(６)が築かれる。すでに大部分が削平を受けているが、昭和初期には60～70㎝の盛土が確認されている。また、埴輪列が７ヶ所で検出され、複数の古墳が存在していた事が窺える。昭和35年に行われた発掘調査では、四禽鏡や鉄刀、円筒埴輪などが出土し、５世紀後半の古墳と考えられている[1]。また、久米川を挟んだ南側の丘陵には、久米山古墳群(８)が所在する。これまでに５度の発掘調査が行われ、５世紀前半から７世紀初頭にかけて古墳35基が調査されている[2]。５世紀前半の古墳からは方画規矩鏡や鉄製釧・琴柱状石製品などが出土している。また６世紀後半の古墳からは須恵器などとともにミニチュア炊



第２図　遺跡位置図（１：20,000）

飯具や銅製簪が出土し、渡来系氏族との関係が窺える。

古代の状況ははっきりしないが、桑町城ノ腰遺跡(10)では和同開珎が採集されている。中世になると、上野城のある丘陵地に平楽寺(７)が建立される。正元２(1260)年の「伝法灌頂付法次第」（金沢文庫文書）には「伊賀国住平楽寺」の名が見え、鎌倉時代中期にはすでに成立している事が窺える。下部神社（奈良市都祁吐山町）に所蔵される大般若波羅蜜多経には「伊賀国平楽寺」や「伊州平楽寺」と記され、元徳２(1330)年の記載もある。また、「伊賀国阿拝郡長田庄平楽寺」との奥書も見られる事から、上野台地が長田庄に属していたか、長田庄の散在荘園であった可能性が指摘されている[3]。『三国地志』によると、平楽寺は多くの寺坊を構え、天正伊賀の乱の際に焼失したとされ、『勢州軍記』にも天正伊賀の乱に際して地侍が平楽寺で軍議が行っている事が記されていることから、平楽寺は中世を一貫して存続していたと考えられる。また、『三国地志』によると、平楽寺と同時期に薬師寺も存在していたとされ、上野城のある丘陵付近には多くの寺坊が建立されていたと考えられる。

上野城西之丸の部分には、仁木義視城(８)が所在したとされる。『兼右卿記』の「永禄11(1568)年３月16日条」には、仁木右京太夫長政が新城を構えるにあたって地鎮を行ったことが記されている。現地には22m四方の平地と２本の堀の痕跡が残る。

上野城の築城は、天正13(1585)年の筒井定次の伊賀入部に始まる。定次は、丘陵の東側の高台に三層の天守閣を築いたとされる。城の北側に表門を、南側に裏門を配置しており、城下町は主として丘陵北西部に広がる低地部に整備されたが、慶長11(1606)年の大火で広範囲の部分が焼失している。

慶長13(1608)年に筒井定次が改易された後、藤堂高虎が伊勢・伊賀に入部する。高虎は、上野城の大改修を行うとともに、城の南側に城下町の建設を始めている。外堀の南側に一之町筋・二之町筋・三之町筋の３本主要な東西通りを配置し、南北方向には東大手門から続く東之竪町筋、西大手門に続く西之竪町筋、両者の中間を通る中之竪町筋の主要通りが配置されている。城下町の南側は、外堀のすぐ外側に町人町屋がつくられ、その南に武家屋敷、農人町屋と続く。城の東側は堀の脇に武家屋敷があり、武家屋敷の南には寺町が存在する。その東側は、武家屋敷と農人・町人町屋が混在している。城の西側は、外堀脇の武家屋敷が、一段低くなった部分に農人・町人町屋がつくられている。

城下町では、これまで上野市教育委員会・上野市遺跡調査会によって武家屋敷の調査が行われている。野崎新平下屋敷跡(９)の一部が発掘調査され、17世紀後半から18世紀前半の磁器碗や土師器焙烙などが出土している[4]。また、喜多家屋敷跡(10)では、江戸時代後期の陶器碗や磁器碗などが出土している[5]。入交家屋敷(11)は、住居が県指定建造物となっており、土蔵の保存修理にともなって発掘調査が行われている。土蔵礎石を確認したほか、下層からは池状遺構が検出されている。江戸時代後期の陶磁器類の他、一分金や陶製五重塔なども出土している[6]。

上野城内では、平成７年より国史跡上野城の保存整備に伴い、伊賀市教育委員会(旧：上野市教育委員会)によって城代屋敷部分(12)の発掘調査が行われ、「御城内絵図」に対応する台所や長屋群の礎石や水溜などが確認されている。出土遺物としては、桐紋のある軒丸瓦や藤堂采女家の家紋が入った鬼瓦、焼塩壺、土製人形などが出土している[7]。この他、藩校である国史跡旧崇廣堂(13)でも保存整備に伴い発掘調査が実施された[8]他、西小学校(14)や崇廣中学校(15)の改築に伴って発掘調査が実施され、内堀や武家屋敷の一部が確認されている[9]。

この他、上野台地の縁辺には、七兵衛門窯跡(16)や得斎窯跡(17)などの復興伊賀焼の窯跡が残る。また、久米山東麓には藤堂藩久米火薬庫(18)があり、高さ2.5m程の土塁が残っている。

【註】
(1)『伊予之丸古墳発掘調査概報』上野市教育委員会、1962
舘邦典「３－33　伊予之丸古墳群」『上野市史』伊賀市、2005
(2) 福田典明「３－34　久米山古墳群」『上野市史』伊賀市、2005
(3)『三重県の地名』平凡社、1983
(4) 西澤裕幸『上野城下町遺跡発掘調査報告－野崎新平下屋敷跡－』上野市教育委員会･上野市遺跡調査会、1999
(5) 其道和也「上野城下町遺跡（喜多忠兵衛屋敷跡）発掘調査報告」『上野市文化財年報』６、上野市教育委員会、2000
(6) 福田典明「上野城下町遺跡（入交家・土倉）出土の遺物について」『上野市文化財年報』10、上野市教育委員会、2004
(7) 松田久司「５－068　上野城跡」『上野市史』伊賀市、2005
(8) 豊岡勇『国史跡崇廣堂発掘調査報告』上野市教育委員会・上野市遺跡調査会、1994
(9) 前掲（7）

Ⅲ　遺構

1　地形及び基本層序

上野城下町遺跡は、上野城が所在する独立丘陵上に位置している。この丘陵は、上野城天守閣付近を最高所とし、城下町一帯は、標高およそ149mである。今回調査を行った部分は城の南側で、南に向かって緩やかに傾斜しており、調査区北端のＢ区と南端のＡ区では、およそ１mの高低差があった。

今回の調査地は、市街地の中心部分にあたる。そのため、建物の建て替えに伴い掘削が激しく、攪乱を受けている部分が多い。基本層序は、表土下に近現代の整地層［Ⅰ層］があり、その下で硬化面を持つ近世末～近代の整地層［Ⅱ層］、黄灰色や黒色を呈する整地層［Ⅲ層］、暗褐色を呈する整地層［Ⅳ層］、黄灰色を呈する整地層［Ⅴ層］、黄褐色粘土の地山と考えられる［Ⅵ層］が確認されている。遺構は第Ⅱ層上面(上層遺構)および第Ⅵ層の上面(下層遺構)で確認している。第Ⅱ面から第Ⅴ面の間は小規模な整地や掘削が激しく行われており、遺構の確認は困難であった。

2　Ｂ地区

Ｂ地区は、今回の調査地の中では、最も北側に位置している。伊賀市東町から魚町にかけての部分である。Ｂ区は近現代の掘削が激しく、遺構面はほとんど遺っていなかったが、Ｂ３区では、溝や土坑、ピットが確認されている。

土坑ＳＫ９　長径1.7m・短径1.4mの浅い土坑で、磁器碗(１)や陶器碗(２)、陶器擂鉢(３・４)、銭(５)が出土している。19世紀中頃の遺構と考えられる。

土坑ＳＫ10　長径0.9m・短径0.8mの浅い土坑で、陶器皿(６・７)や磁器碗(９～12)、陶器鍋(13・14)、磁器小瓶(15)、陶器壺(16)、陶器水滴(17)、陶器急須(18)、陶器水差(19・20)、陶器鉢(21)、陶器甕(22)が出土している。19世紀中頃と考えられる。

3　Ｃ地区

Ｃ地区は魚町から紺屋町にあたる部分である。Ｃ１・Ｃ２地区は大部分が撹乱を受けるものの、一部で上層の遺構が確認されている。

焼土ＳＦ３　直径0.2mのピットを中心に、長径1.3m・短径0.6m以上の範囲で硬化している。遺物は土師器皿(51)が出土したのみで鉱滓は出土していないが、小規模な鍛冶や鋳造が行われていた可能性が考えられる。

土坑ＳＫ11　Ｃ１地区北東隅で確認した土坑で、直径0.4m・深さ0.5m。包含層掘削中に確認したが、平面プランは確認できなかった。埋土に拳大の石や焼土を含んでいた。遺物は、土師器鍋(36・37)や陶器碗(38・39)、磁器碗(40～42)、陶器鉢(43・44)、瓦(45)の他、鉄滓が540.67ｇ出土している。鋳造関連遺構と考えられる。19世紀前半の遺構と考えられる。

土坑ＳＫ12　Ｃ２地区上層面で確認した遺構で、直径0.2mの円形を呈する。土師器皿(46～48)、陶器水差(49)・鉢(50)の他、鉄滓が77.30ｇ出土している。18世紀中頃以降の遺構と考えられる。

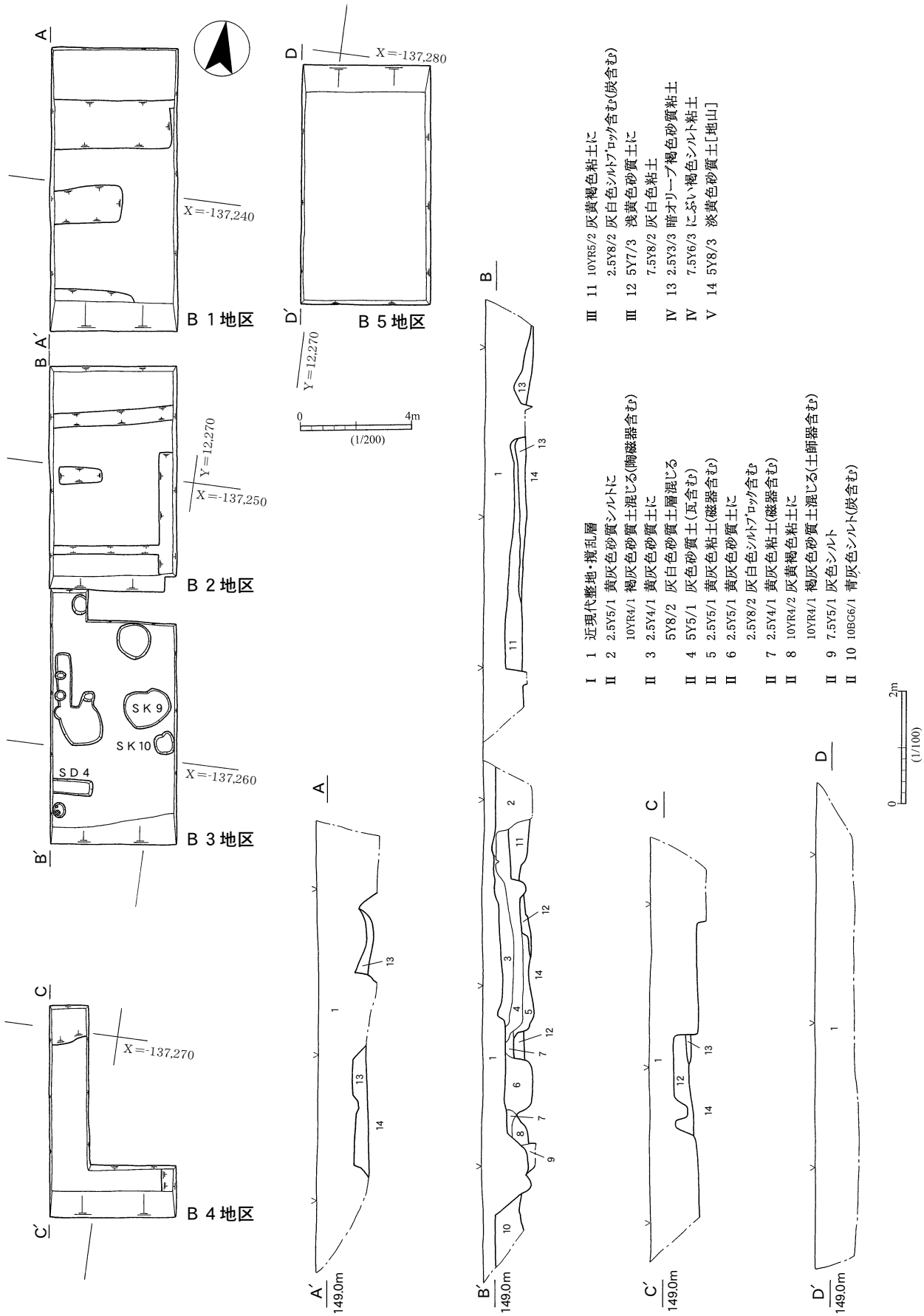
土坑ＳＫ13　Ｃ４地区の下層面で確認した遺構で、長径1.6m・短径1.2mの楕円形を呈する。陶器擂鉢(52・53)が出土している。17世紀後半以降の遺構と考えられる。

Ｐｉｔ４　Ｃ４地区西端で確認した遺構で、西半部は調査区外に展開する。直径0.2m程度と思われ、陶器碗(54)が出土している。

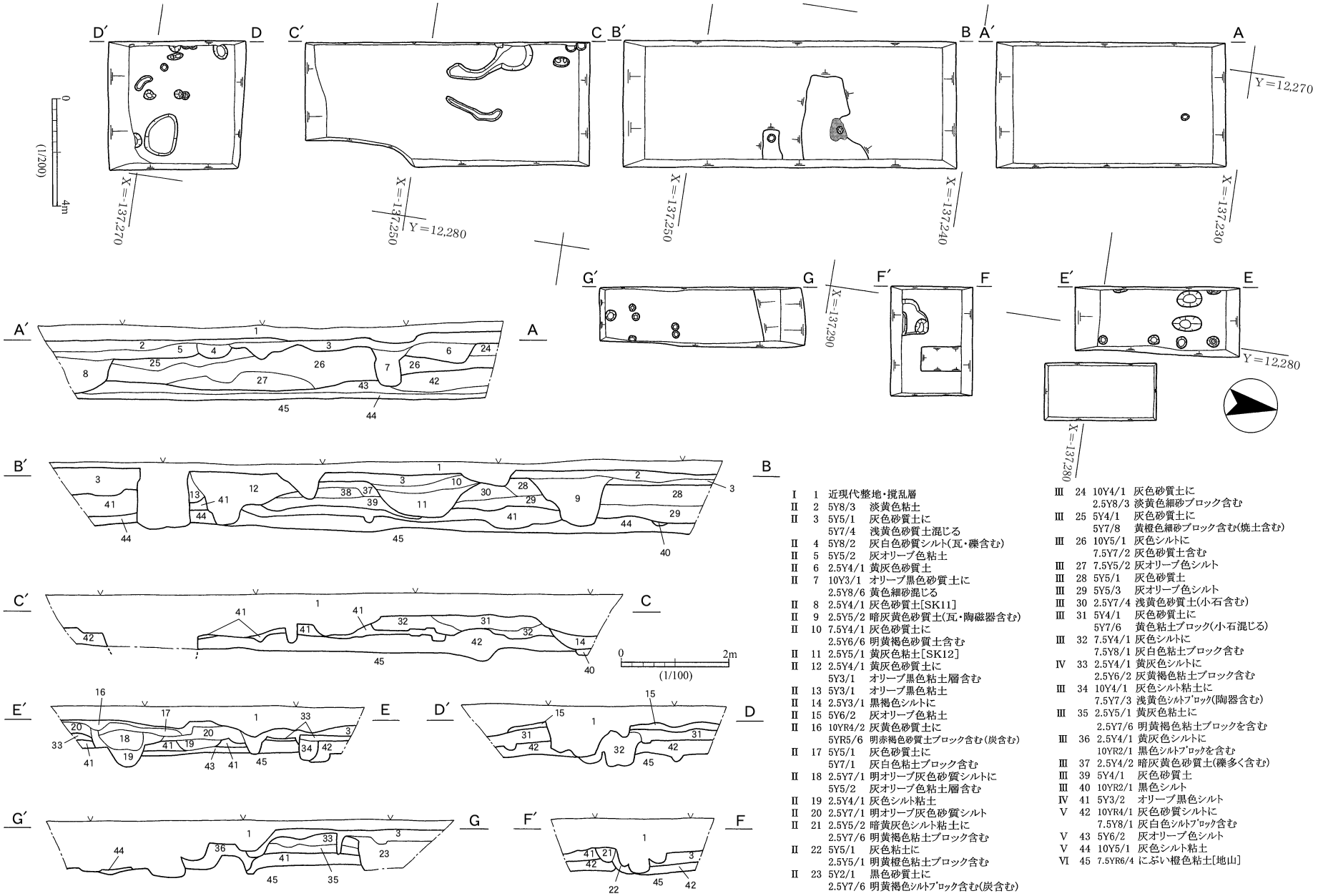
Ｐｉｔ５　Ｃ４地区西端で確認した遺構で、西半部は調査区外に展開する。長径0.15mの隅丸方形を呈すると考えられ、陶器擂鉢(55)が出土しており、16世紀後半以降の遺構と考えられる。

土坑ＳＫ15　Ｃ５地区で確認した土坑で、長径1.0m・短径0.5mの楕円形を呈する。底部には砂が５㎝程度敷き詰められ、埋土には焼土が混じっていた。

土坑ＳＫ29　ＳＫ15の西側に隣接する土坑で、長径0.9m・短径0.6mの楕円形を呈する。底部には砂が５㎝程度敷き詰められており、ＳＫ15とともに鋳造関連施設の可能性が考えられる。

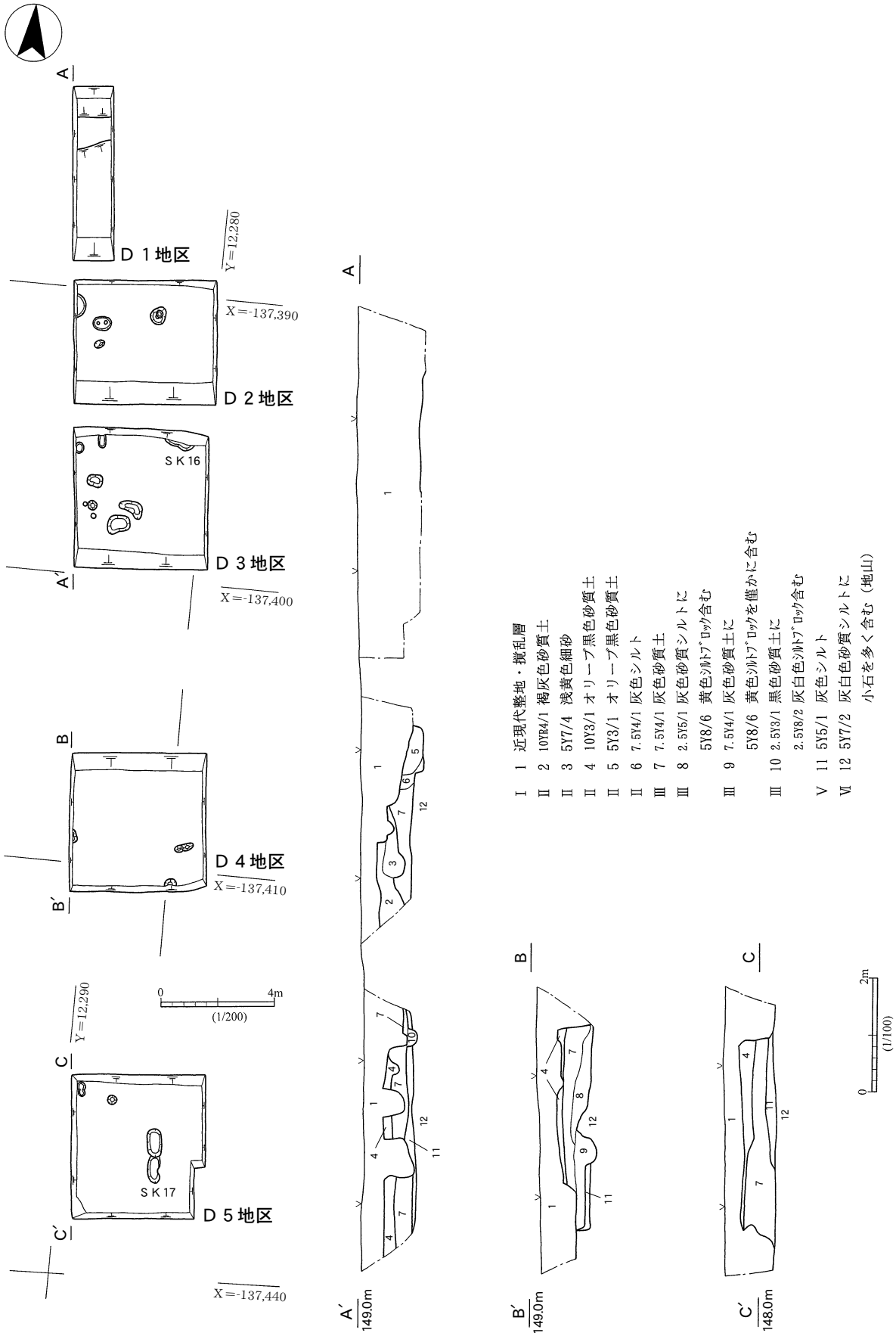


第３図　Ｂ地区遺構平面図（１：200）・土層断面図（１：100）

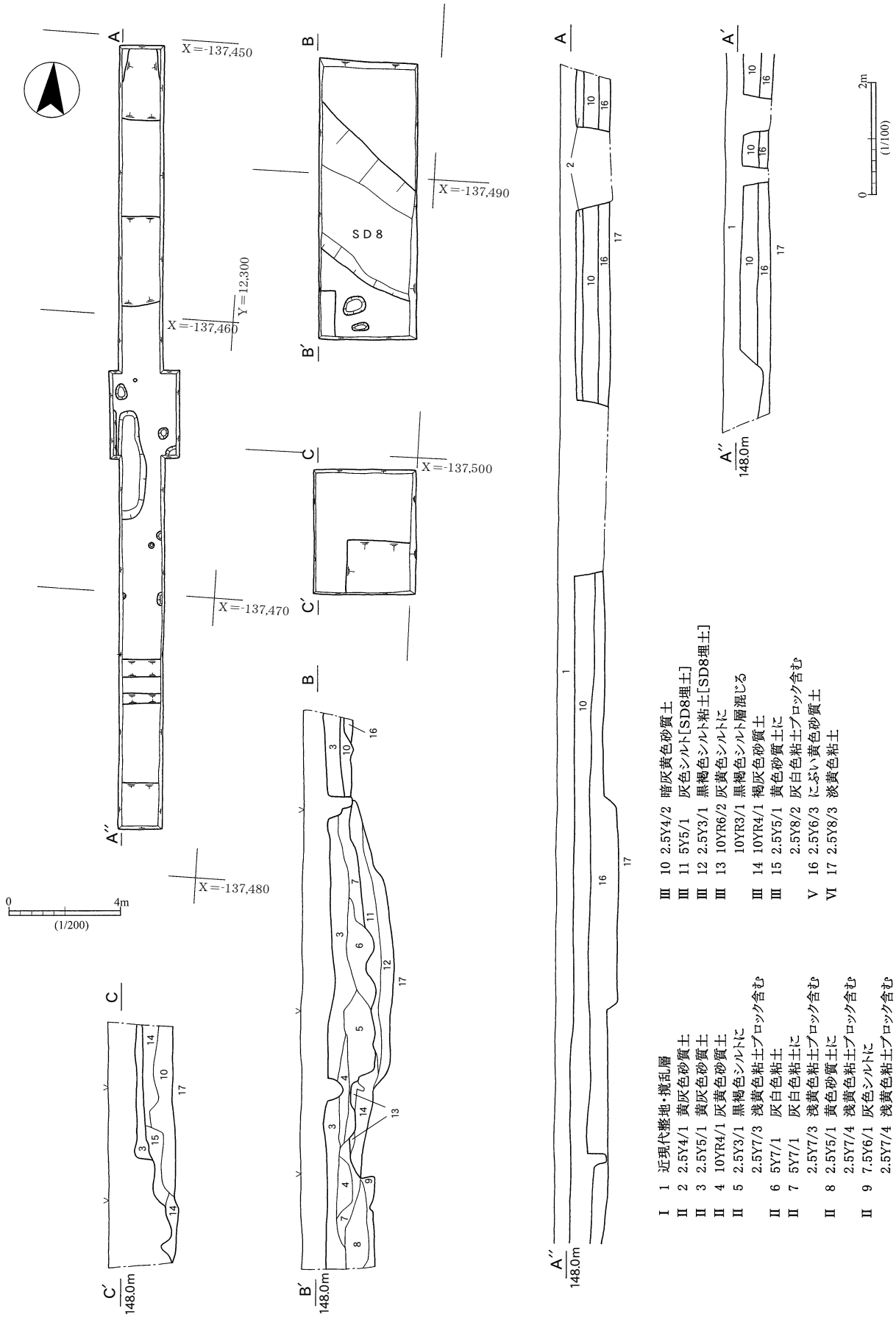


第４図　Ｃ地区遺構平面図（１：200）・土層断面図（１：100）

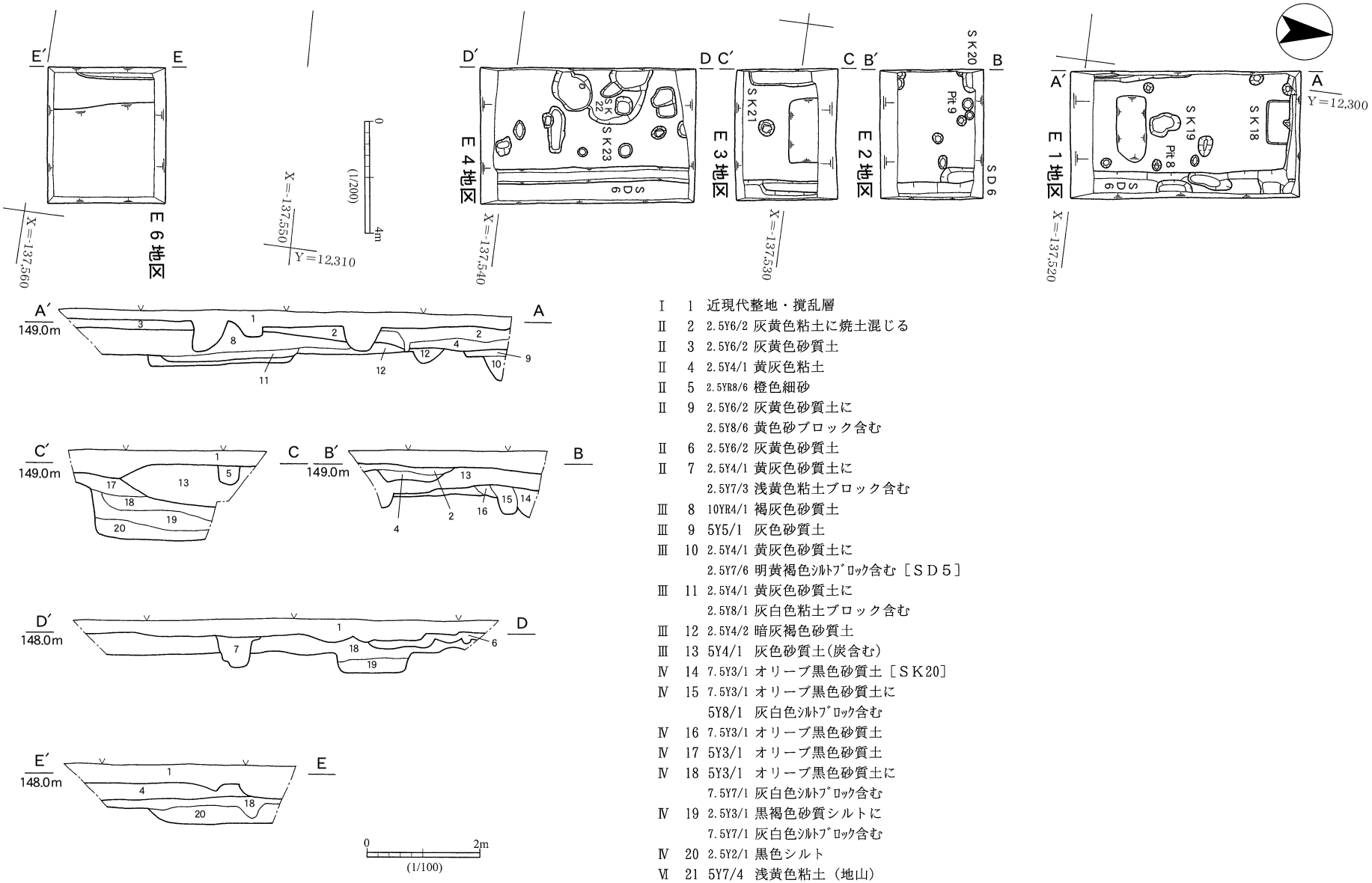
Ⅰ　1　近現代整地・撹乱層
Ⅱ　2　5Y8/3　淡黄色粘土
Ⅱ　3　5Y5/1　灰色砂質土に
　　5Y7/4　浅黄色砂質土混じる
Ⅱ　4　5Y8/2　灰白色砂質シルト(瓦・礫含む)
Ⅱ　5　5Y5/2　灰オリーブ色粘土
Ⅱ　6　2.5Y4/1 黄灰色砂質土
Ⅱ　7　10Y3/1 オリーブ黒色砂質土に
　　2.5Y8/6 黄色細砂混じる
Ⅱ　8　2.5Y4/1 灰色砂質土[SK11]
Ⅱ　9　2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土(瓦・陶磁器含む)
Ⅱ　10　7.5Y4/1 灰色砂質土に
　　2.5Y6/6 明黄褐色砂質土含む
Ⅱ　11　2.5Y5/1 黄灰色粘土[SK12]
Ⅱ　12　2.5Y4/1 黄灰色砂質土に
　　5Y3/1　オリーブ黒色粘土層含む
Ⅱ　13　5Y3/1　オリーブ黒色粘土
Ⅱ　14　2.5Y3/1 黒褐色シルトに
Ⅱ　15　5Y6/2　灰オリーブ色粘土
Ⅱ　16　10YR4/2 灰黄色砂質土に
　　5YR5/6 明赤褐色砂質土ブロック含む(炭含む)
Ⅱ　17　5Y5/1　灰色砂質土に
　　5Y7/1　灰白色粘土ブロック含む
Ⅱ　18　2.5Y7/1 明オリーブ灰色砂質シルトに
　　5Y5/2　灰オリーブ色粘土層含む
Ⅱ　19　2.5Y4/1 灰色シルト粘土
Ⅱ　20　2.5Y7/1 明オリーブ灰色砂質シルト
Ⅱ　21　2.5Y5/2 暗黄灰色シルト粘土に
　　2.5Y7/6 明黄褐色粘土ブロック含む
Ⅱ　22　5Y5/1　灰色粘土に
　　2.5Y5/1 明黄橙色粘土ブロック含む
Ⅱ　23　5Y2/1　黒色砂質土に
　　2.5Y7/6 明黄褐色シルトブロック含む(炭含む)
Ⅲ　24　10Y4/1 灰色砂質土に
　　2.5Y8/3 淡黄色細砂ブロック含む
Ⅲ　25　5Y4/1　灰色砂質土に
　　5Y7/8　黄橙色細砂ブロック含む(焼土含む)
Ⅲ　26　10Y5/1 灰色シルトに
　　7.5Y7/2 灰色砂質土含む
Ⅲ　27　7.5Y5/2 灰オリーブ色シルト
Ⅲ　28　5Y5/1　灰色砂質土
Ⅲ　29　5Y5/3　灰オリーブ色シルト
Ⅲ　30　2.5Y7/4 浅黄色砂質土(小石含む)
Ⅲ　31　5Y4/1　灰色砂質土に
　　5Y7/6　黄色粘土ブロック(小石混じる)
Ⅲ　32　7.5Y4/1 灰色シルトに
　　7.5Y8/1 灰白色粘土ブロック含む
Ⅳ　33　2.5Y4/1 黄灰色シルトに
　　2.5Y6/2 灰黄褐色粘土ブロック含む
Ⅲ　34　10Y4/1 灰色シルト粘土に
　　7.5Y7/3 浅黄色シルトブロック(陶器含む)
Ⅲ　35　2.5Y5/1 黄灰色粘土に
　　2.5Y7/6 明黄褐色粘土ブロックを含む
Ⅲ　36　2.5Y4/1 黄灰色シルトに
　　10YR2/1 黒色シルトブロックを含む
Ⅲ　37　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土(礫多く含む)
Ⅲ　39　5Y4/1　灰色砂質土
Ⅲ　40　10YR2/1 黒色シルト
Ⅳ　41　5Y3/2　オリーブ黒色シルト
Ⅴ　42　10YR4/1 灰色砂質シルトに
　　7.5Y8/1 灰白色シルトブロック含む
Ⅴ　43　5Y6/2　灰オリーブ色シルト
Ⅴ　44　10Y5/1 灰色シルト粘土
Ⅵ　45　7.5YR6/4 にぶい橙色粘土[地山]



第５図　Ｄ地区遺構平面図（１：200）・土層断面図（１：100）

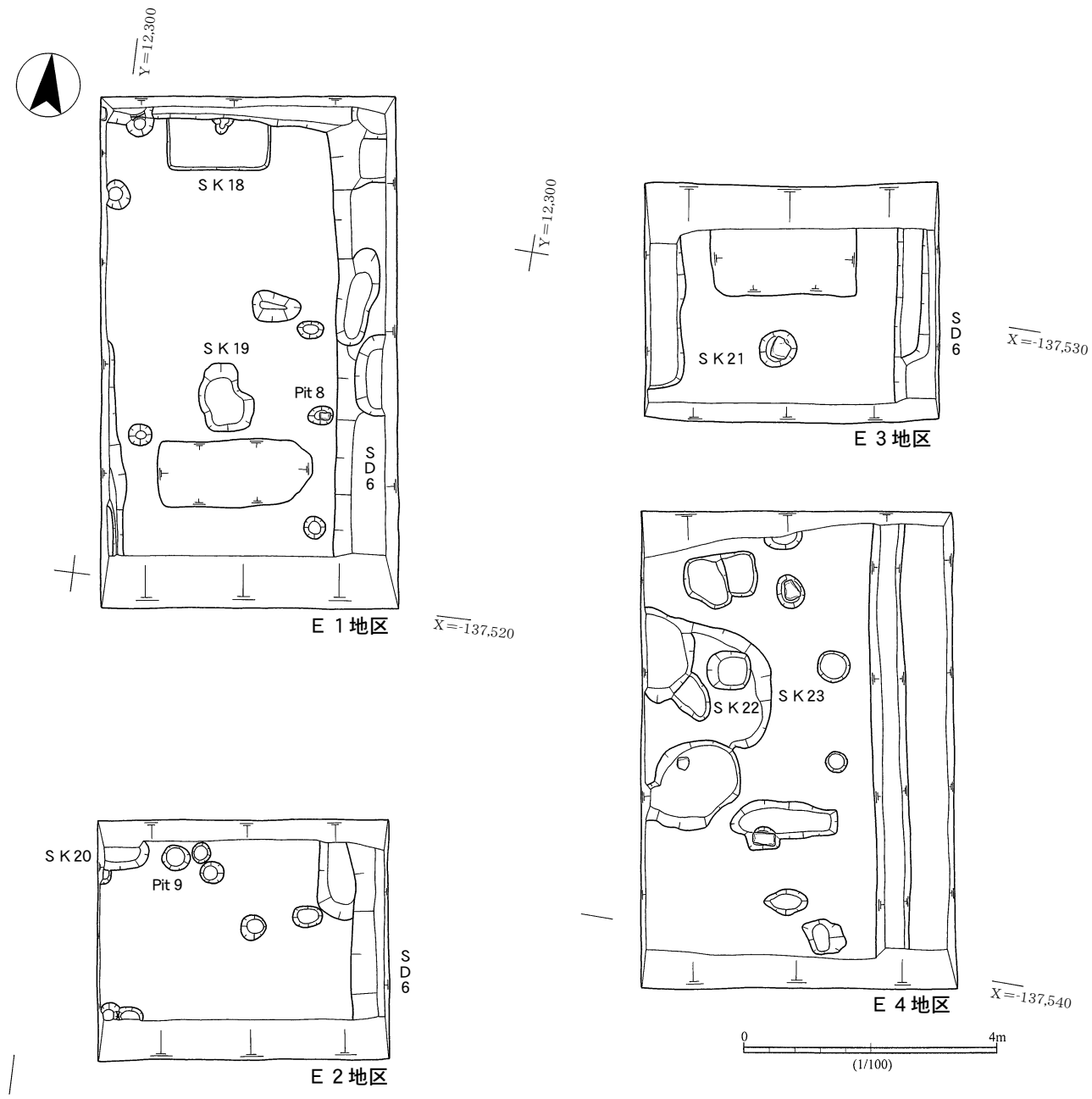


第６図　Ｈ地区遺構平面図（１：200）・土層断面図（１：100）



Ⅰ　1　近現代整地・撹乱層
Ⅱ　2　2.5Y6/2 灰黄色粘土に焼土混じる
Ⅱ　3　2.5Y6/2 灰黄色砂質土
Ⅱ　4　2.5Y4/1 黄灰色粘土
Ⅱ　5　2.5YR8/6 橙色細砂
Ⅱ　9　2.5Y6/2 灰黄色砂質土に
　　2.5Y8/6 黄色砂ブロック含む
Ⅱ　6　2.5Y6/2 灰黄色砂質土
Ⅱ　7　2.5Y4/1 黄灰色砂質土に
　　2.5Y7/3 浅黄色粘土ブロック含む
Ⅲ　8　10YR4/1 褐灰色砂質土
Ⅲ　9　5Y5/1　灰色砂質土
Ⅲ　10　2.5Y4/1 黄灰色砂質土に
　　2.5Y7/6 明黄褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ含む［ＳＤ５］
Ⅲ　11　2.5Y4/1 黄灰色砂質土に
　　2.5Y8/1 灰白色粘土ブロック含む
Ⅲ　12　2.5Y4/2 暗灰褐色砂質土
Ⅲ　13　5Y4/1　灰色砂質土(炭含む)
Ⅳ　14　7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質土［ＳＫ20］
Ⅳ　15　7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質土に
　　5Y8/1　灰白色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ含む
Ⅳ　16　7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質土
Ⅳ　17　5Y3/1　オリーブ黒色砂質土
Ⅳ　18　5Y3/1　オリーブ黒色砂質土に
　　7.5Y7/1 灰白色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ含む
Ⅳ　19　2.5Y3/1 黒褐色砂質シルトに
　　7.5Y7/1 灰白色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ含む
Ⅳ　20　2.5Y2/1 黒色シルト
Ⅵ　21　5Y7/4　浅黄色粘土（地山）

第７図　Ｅ地区遺構平面図（１：200）・土層断面図（１：100）



第８図　Ｅ１～Ｅ４地区遺構平面図（１：100）

４　Ｄ地区

紺屋町にあたる部分。近代の攪乱が激しく、遺構は小規模な土坑がいくつか見られるのみである。

土坑ＳＫ16　Ｄ３地区北端で確認された土坑で、北半部は調査区外に展開する。長径１ｍ。陶器皿(81)が出土している。

５　Ｈ地区

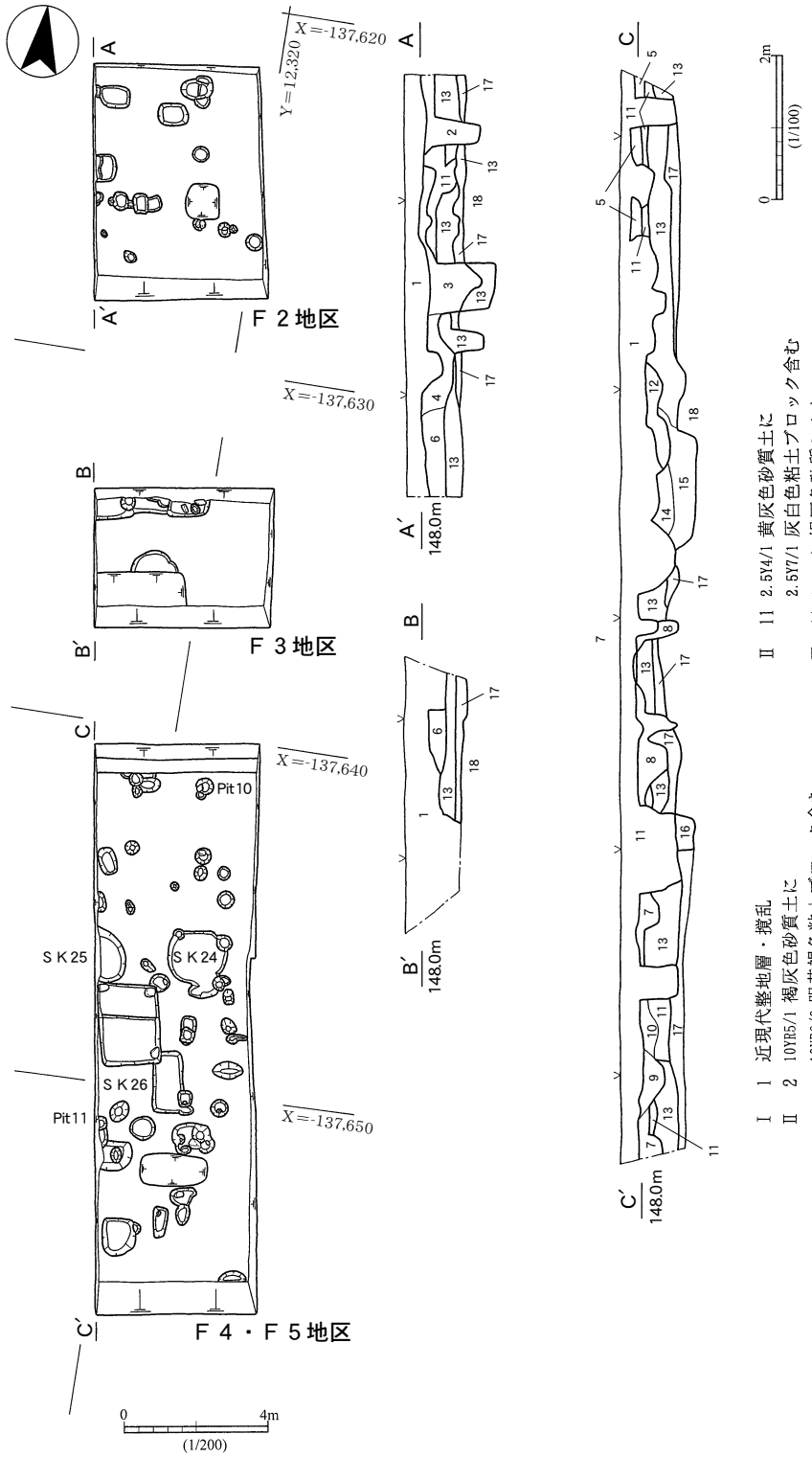
西忍町にあたる部分で、城下町絵図によれば武家屋敷が所在した部分である。Ｈ１地区は、配管部分のみ立会調査を行ったが、攪乱部分が多かった。

溝ＳＤ８　Ｈ３地区で確認された溝で、幅４ｍ・深さ１ｍ。出土遺物は無く時期は決定できない。埋土から考えると、Ｖ層に対応する遺構と考えられるが、遺構の方向が、城下町の地割りと全く異なることから、それ以前に遡る可能性も考えられる。

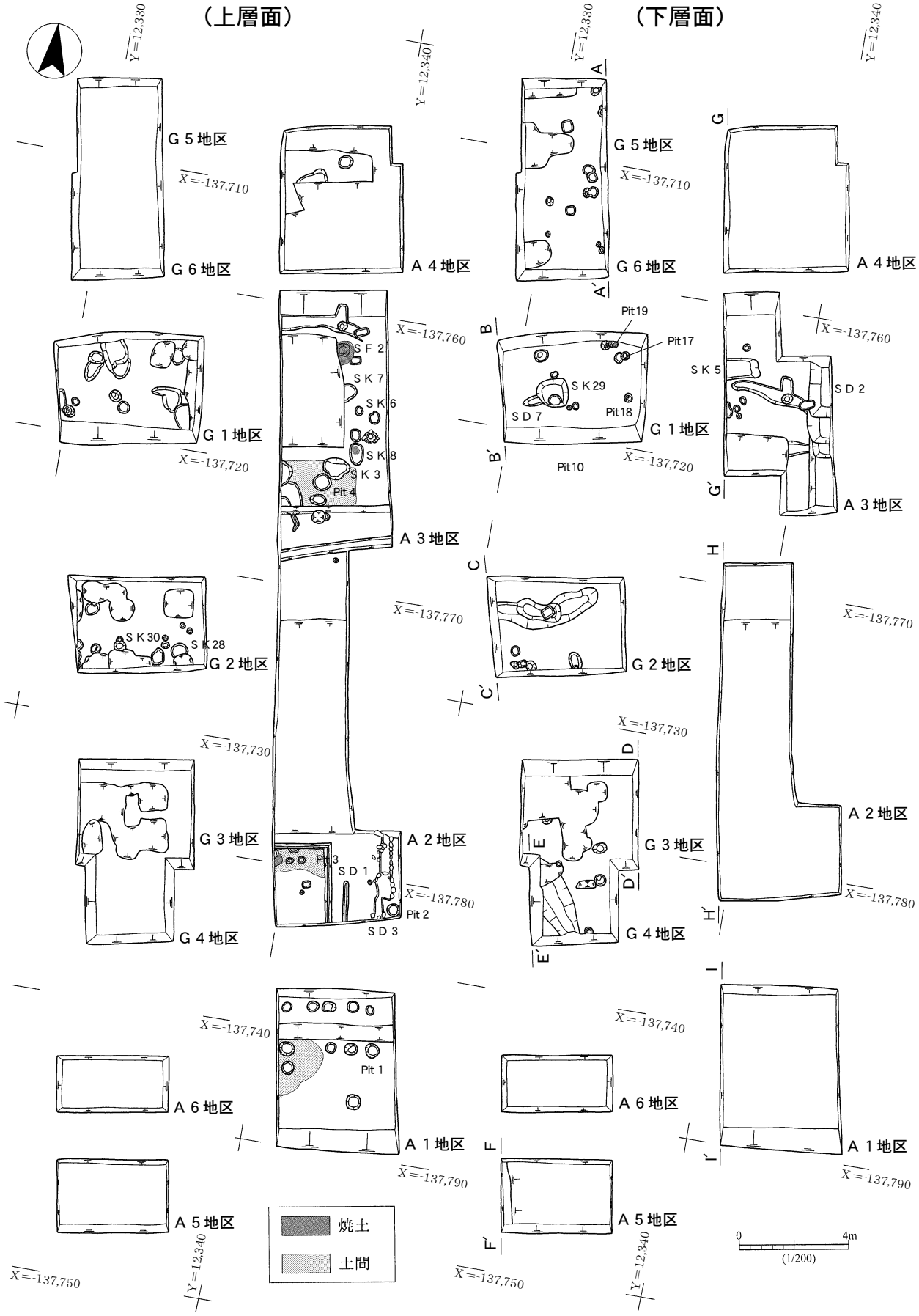
６　Ｅ地区

Ｈ地区と同じく西忍町に当たる部分で、かつては武家屋敷が所在した部分である。

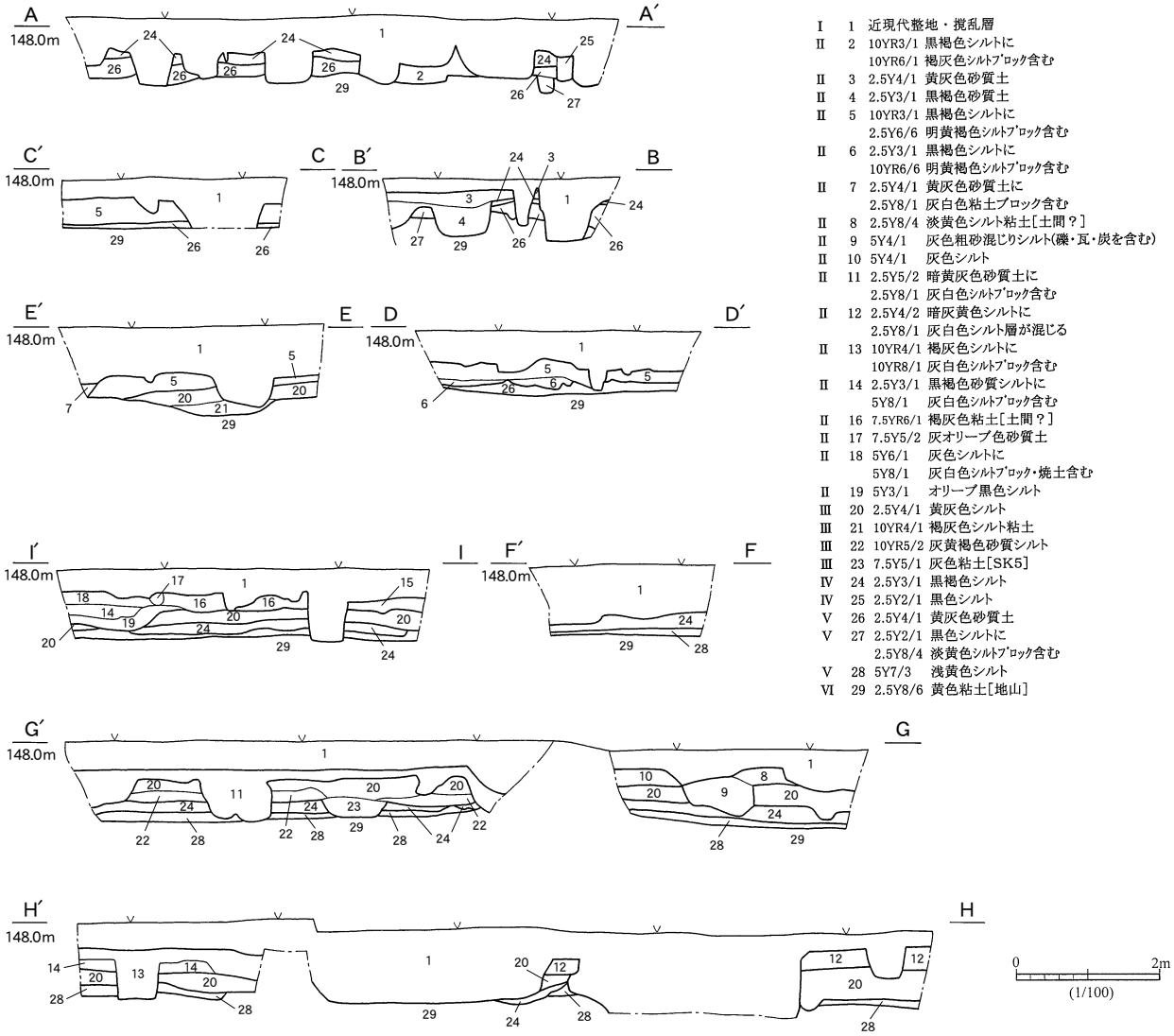
溝ＳＤ５　Ｅ１地区北端で確認された東西方向に伸びる溝で、遺構は調査区外に展開する。土師器皿



第９図　Ｆ地区遺構平面図（１：200）・土層断面図（１：100）



第10図　G・A地区遺構平面図（1：200）



Ⅰ 1 近現代整地・撹乱層
Ⅱ 2 10YR3/1 黒褐色シルトに
10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む
Ⅱ 3 2.5Y4/1 黄灰色砂質土
Ⅱ 4 2.5Y3/1 黒褐色砂質土
Ⅱ 5 10YR3/1 黒褐色シルトに
2.5Y6/6 明黄褐色シルトブロック含む
Ⅱ 6 2.5Y3/1 黒褐色シルトに
10YR6/6 明黄褐色シルトブロック含む
Ⅱ 7 2.5Y4/1 黄灰色砂質土に
2.5Y8/1 灰白色粘土ブロック含む
Ⅱ 8 2.5Y8/4 淡黄色シルト粘土[土間？]
Ⅱ 9 5Y4/1 灰色粗砂混じりシルト(礫・瓦・炭を含む)
Ⅱ 10 5Y4/1 灰色シルト
Ⅱ 11 2.5Y5/2 暗黄灰色砂質土に
2.5Y8/1 灰白色シルトブロック含む
Ⅱ 12 2.5Y4/2 暗灰黄色シルトに
2.5Y8/1 灰白色シルト層が混じる
Ⅱ 13 10YR4/1 褐灰色シルトに
10YR8/1 灰白色シルトブロック含む
Ⅱ 14 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルトに
5Y8/1 灰白色シルトブロック含む
Ⅱ 16 7.5YR6/1 褐灰色粘土[土間？]
Ⅱ 17 7.5Y5/2 灰オリーブ色砂質土
Ⅱ 18 5Y6/1 灰色シルトに
5Y8/1 灰白色シルトブロック・焼土含む
Ⅱ 19 5Y3/1 オリーブ黒色シルト
Ⅲ 20 2.5Y4/1 黄灰色シルト
Ⅲ 21 10YR4/1 褐灰色シルト粘土
Ⅲ 22 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
Ⅲ 23 7.5Y5/1 灰色粘土[SK5]
Ⅳ 24 2.5Y3/1 黒褐色シルト
Ⅳ 25 2.5Y2/1 黒色シルト
Ⅴ 26 2.5Y4/1 黄灰色砂質土
Ⅴ 27 2.5Y2/1 黒色シルトに
2.5Y8/4 淡黄色シルトブロック含む
Ⅴ 28 5Y7/3 浅黄色シルト
Ⅵ 29 2.5Y8/6 黄色粘土[地山]

第11図　G・A地区土層断面図（1：100）

(94・95)が出土している。

溝ＳＤ６　Ｅ１～Ｅ４地区の東端で確認された南北方向の溝である。底部には掘削時の痕跡か、凹凸が見られる。土師器皿(96～98)、磁器皿(99～101)が出土している。ＳＤ５と共に、屋敷を区画する溝と考えられる。18世紀以降の遺構と考えられる。

土坑ＳＫ18　Ｅ１地区北端に位置し、ＳＤ５に切られる。長径1.6m・深さ0.2mの長方形を呈する土坑と考えられる。竈(102)が出土している。

土坑ＳＫ19　Ｅ１地区中央に位置し、長径1.1m・短径0.9mの不定形を呈する土坑である。陶器甕(103)が出土している。

土坑ＳＫ22　Ｅ４地区中央に位置し、ＳＫ23の底部で確認した方形の土坑である。長辺0.7m・短辺0.6mで、深さは0.3m。磁器碗(104)・陶器皿(105)が出土している。19世紀前半の遺構と考えられる。

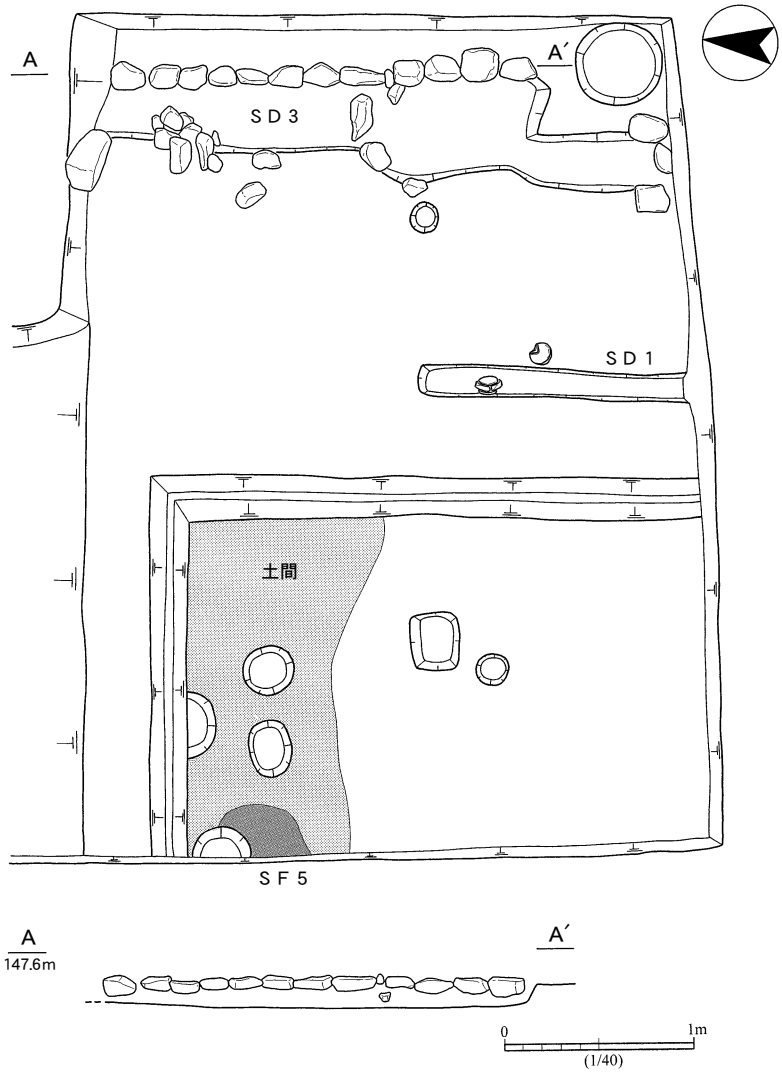
7　Ｆ地区

上野恵美須町に当たる部分で、かつては「茅町」と呼ばれ、農人町であった部分である。Ｆ１地区はすでに近代の撹乱を受けており、遺構は全く確認できなかったが、Ｆ２～５区においては土坑やピットが確認されている。

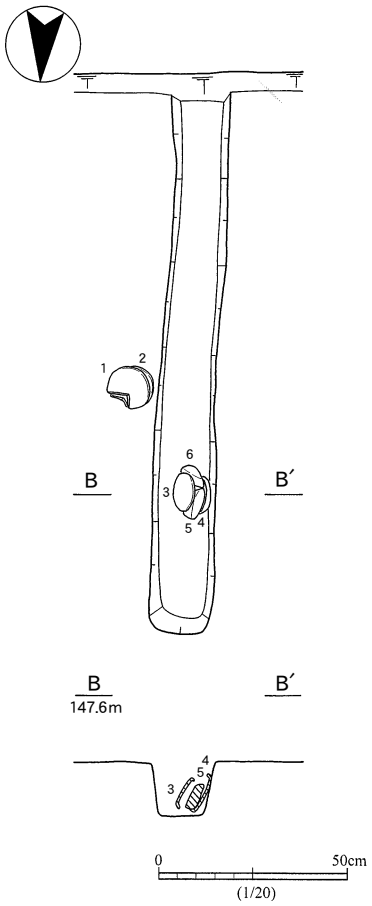
土坑ＳＫ23　Ｆ４・５区の中央に位置する不定形の土坑で、深さ0.2m。遺物は磁器碗(113)が出土している。19世紀前半のもの。

土坑ＳＫ24　Ｆ４・５区の中央に位置する方形の土坑で、長辺1.6m・短辺0.8m、深さ0.2m。

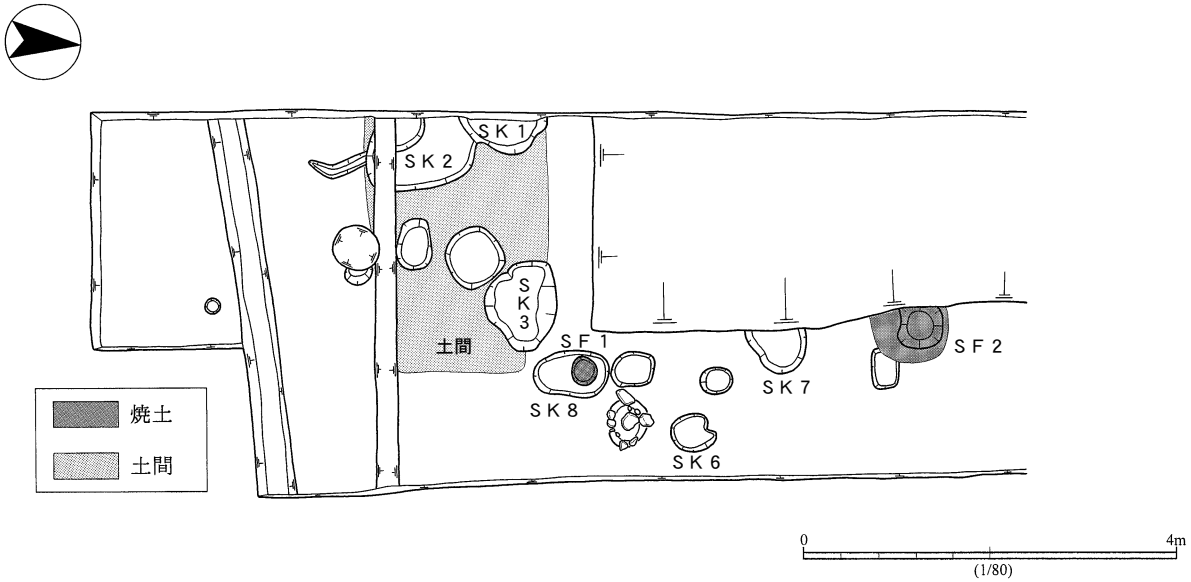
土坑ＳＫ25　Ｆ４・５区の西端で確認された楕円形の遺構で、調査区外に展開する。深さは0.2m。磁器



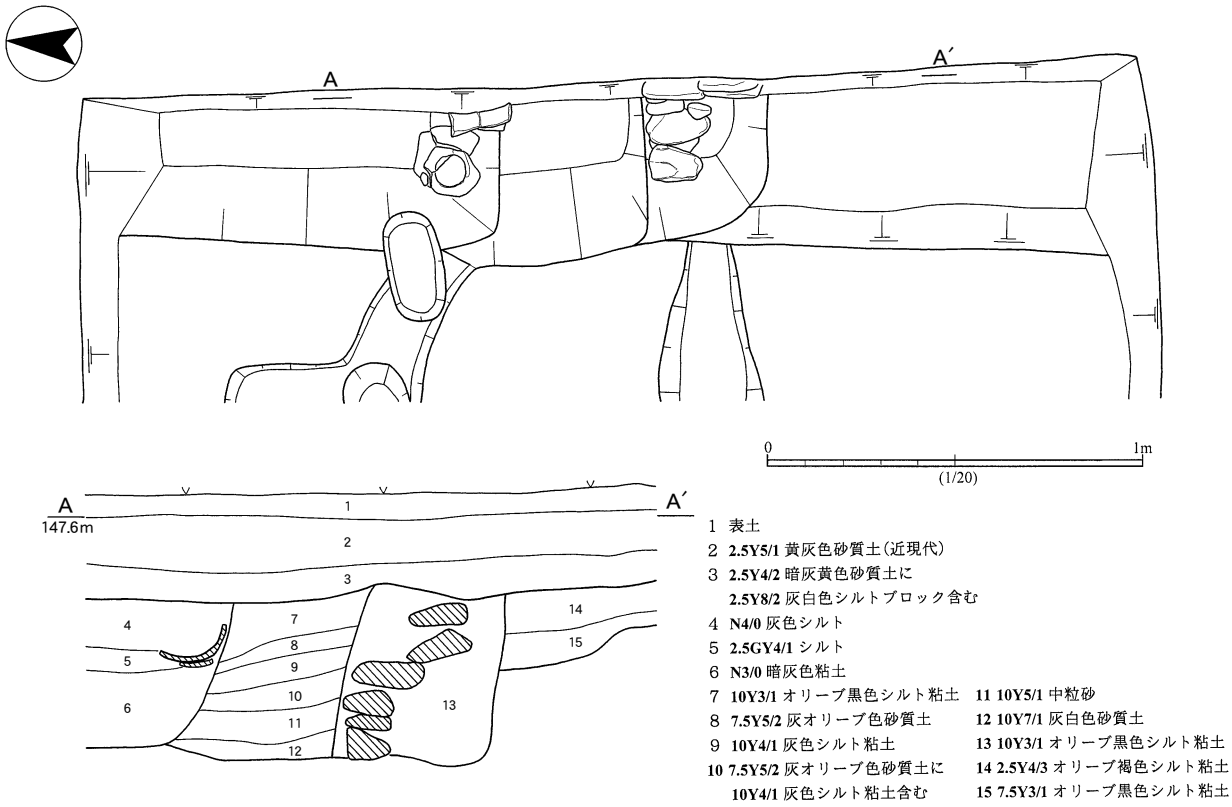
第12図　Ａ２地区遺構平面図・ＳＤ３石列立面図（１：40）



第13図　ＳＤ１平面図・断面図（１：20）



第14図　Ａ３地区遺構平面図（１：80）



第15図　ＳＤ２平面図・土層断面図（１：20）

皿(111)や鞴羽口(112)、陶器擂鉢が出土している。19世紀前半の遺構と考えられる。

８　Ｇ・Ａ地区

Ｆ地区と同じく上野恵美須町に当たる部分である。Ｇ地区は第４次調査で調査した部分で、第１次で調査したＡ地区の北側部分である。この地区は、１～４次調査の中で最も南側に位置し、地形は緩やかに南へ傾斜している。両地区とも、上層面と下層面で遺構が確認された。

Ｇ地区で上層遺構が確認出来たのは、Ｇ１・Ｇ２地区のみである。溝やピットを確認したのみで、建物になるようなものは確認できなかった。下層でも、溝や土坑、柱穴を多数確認した。柱穴には、根石を持つものも見られるが、土器を伴う物はなく、また建物になるようなものも確認できなかった。Ｇ４区の南端で確認した溝は、城下町の町割りと方向を異にしており、城下町以前の遺構である可能性も考えられる。

Ａ地区では、上層面で土間と考えられる粘土貼り部分と浅いピットが多数確認されている。土間跡については、Ａ１区からＡ３区にかけての４ヶ所で、粘土が叩き締められた部分が確認されているが、いずれも近代の撹乱が激しく、土間の範囲は確定出来なかった。また、土間は建物内にあったものと考えられるが、調査区が限られており撹乱も激しい事から、建物を構成していた礎石や柱穴は確認できていない。Ａ４・Ａ５区には撹乱が激しく、遺構は確認できなかった。

焼土ＳＦ２　Ａ３区の上層面で確認した遺構で直径0.8mの範囲で黄色粘土が貼られ、中央部は直径0.5m・深さ0.1mの範囲で窪み、中には焼土が溜まっていた。

焼土ＳＦ１　土坑ＳＫ８内の上面で確認された遺構で、直径0.3m・深さ0.04m。埋土には焼土が溜まっていたが、周囲が焼けているような状態ではなかった。焼土内からは土師器皿(165)と椀形鉄滓が出土しており、鋳造関連遺構と考えられる。ＳＫ８の埋土

にも炭が多く混じる事から一連の遺構と考えられる。また、隣接する土坑にも石組みが見られ、ＳＦ２に関連する可能性も考えられる。

溝ＳＤ１　Ａ２区の上層で確認された遺構で、幅0.4ｍ・深さ0.1ｍで、調査区南側へと続く。溝の中から、土師器皿(154・155)が合わせ口で納められており、間には石(156)や瓦(157)が挟まれていた。土師器皿には墨書痕が認められたが、判読はできなかった。溝脇にも土師器皿(152・153)が２枚重ねて伏せられており、祭祀関連遺構と考えられる。Ａ地区の南側には、江戸後期から最近まで恵比寿神社が所在しており、神社に関連する可能性も考えられる。

溝ＳＤ２　Ａ３区の上層で確認された遺構で、調査区北側と東側に展開する。深さは0.8ｍで、南端には石組みが見られる。埋め戻された後に、再度掘り直されている。城下町の町屋を区画する溝か排水溝であったと考えられる。掘り直された溝から、土師器皿(158)・陶器碗(159)・陶器加工円盤(160)・陶器甕が出土している。

溝ＳＤ３　Ａ２区の上層で確認した溝で、幅0.2ｍ・深さ0.2ｍ。溝は南側で幅が狭まり、更に調査区外に伸びる。溝の片側には石列が見られる。町屋に伴う遺構と考えられる。

土坑ＳＫ５　Ａ３区下層面で確認した遺構で、長辺1.1ｍ以上・短辺0.7ｍ、深さは0.2ｍで、調査区西側に展開する。土師器皿(161)や陶器碗(162～164)・擂鉢などが出土している。

土坑ＳＫ８　Ａ３区の上層で確認された遺構で、長径0.8ｍ・短径0.5ｍの楕円形を呈し、深さは0.1ｍ。埋土には炭が多く混じる。

Ｐｉｔ４　Ａ３区の上層で確認された遺構で、長径0.7ｍ・短径0.6ｍの楕円形を呈するピットで、深さは0.2ｍ。土師器皿の他、鉄滓塊が92.17ｇ出土しており、鋳造関連遺構と考えられる。

遺構		地区	層位	計測値(m) 長さ 長径	幅 短径	深さ	遺物	備考	旧番号
溝	SD1	A2	Ⅱ	－	0.4	0.1	土師器皿、石、瓦	祭祀遺構	SD1
	SD2	A3	Ⅱ	－	－	0.8	土師器皿、陶器碗・鉢、磁器、加工円盤	石組	SD2
	SD3	A2	Ⅱ	－	0.2	0.2		石組	SD3
	SD4	B3	Ⅴ	－	0.5	0.3	土師器皿、陶器鉢		SD1
	SD5	E1	Ⅳ	―	－	0.4	土師器皿		SD1
	SD6	E1	Ⅳ	―	－	0.5	土師器皿、陶器擂鉢、磁器皿		SD2
	SD7	G1	Ⅳ－Ⅴ	－	0.4	0.1	土師器皿・鍋、陶器碗		SD1
	SD8	H2	Ⅴ	－	3.7	0.8			SD51
土坑	SK1	A3	Ⅱ	－	－	0.2	陶器碗・擂鉢、瓦		SK1
	SK2	A3	Ⅱ	－	－	0.1	陶器碗・擂鉢、壁土		SK2
	SK3	A3	Ⅱ	1.0	0.8	0.1	土師器皿、陶器		SK3
	SK4	A3	Ⅱ	－	－	0.1	陶器擂鉢、瓦		SK4
	SK5	A3	Ⅴ	－	0.7	0.2	土師器皿、陶器碗・擂鉢、磁器碗		SK5
	SK6	A3	Ⅱ	0.5	0.4	0.1	瓦		SK6
	SK7	A3	Ⅱ	－	0.6	0.1	土師器		SK7
	SK8	A3	Ⅱ	0.8	0.5	0.1	陶器、磁器		SK8
	SK9	B3	Ⅴ	1.7	1.4	0.2	陶器鉢・擂鉢、磁器碗、銭		SK1
	SK10	B3	Ⅴ	0.9	0.8	0.3	陶器碗・皿・甕・壺・瓶・急須・水滴、磁器瓶		SK2
	SK11	C1	Ⅱ	0.6	－	0.6	陶器碗・擂鉢・火鉢、磁器碗、瓦		SK1
	SK12	C2	Ⅱ	0.2	0.2	0.1	土師器皿、陶器擂鉢・甕、磁器、鉄滓		SK2
	SK13	C4	Ⅳ	1.6	1.2	0.1	陶器擂鉢		SK3
	SK14	C4	Ⅳ	0.5	－	0.1	土師器皿、磁器		SK4
	SK15	C5	Ⅱ－Ⅳ	1.1	0.5	0.4	土師器皿	焼土含む 底部砂敷	SK1
	SK16	D3	Ⅳ	1.0	－	0.1	磁器皿		SK2
	SK17	D5	Ⅳ	1.0	0.2	0.3	瓦		SK3
	SK18	E1	Ⅳ	1.6	－	0.2	土師器竈		SK4
	SK19	E1	Ⅳ	1.1	0.9	0.1	陶器甕		SK5
	SK20	E2	Ⅴ	－	－	0.5	土師器、陶器擂鉢		SK6
	SK21	E3	Ⅳ	－	－	0.8	土師器皿、瓦		SK7
	SK22	E4	Ⅴ	0.7	0.6	0.3	陶器皿、磁器碗		SK8
	SK23	F4	Ⅴ	1.8	1.6	0.2	磁器碗	炭	SK1
	SK24	F4	Ⅳ－Ⅴ	1.6	0.8	0.2			SK3
	SK25	F4	Ⅴ	－	－	0.2	陶器擂鉢、磁器皿、鞴羽口		SK2
	SK26	F5	Ⅳ－Ⅴ	1.6	0.8	0.2	土師器皿、陶器		SK3
	SK27	G1	Ⅳ－Ⅴ	1.2	1.0	0.1	土師器鍋、陶器碗・鉢、壁土(焼け)		SK2
	SK28	G2	Ⅱ	0.6	0.5	0.1	陶器瓶		SK6
	SK29	C5	Ⅱ－Ⅳ	0.9	0.6	0.4		底部砂敷	―
	SK30	G2	Ⅱ	0.6	0.5	0.1	土師器皿		SK5
焼土	SF1	A3	Ⅱ	0.3	0.3	0.1	土師器皿		SF1
	SF2	A3	Ⅱ	－	0.4	0.1		周囲粘土貼り	SF2
	SF3	C2	Ⅱ	1.6	－	0.1	土師器皿		SF1
	SF4	E3	―	―	―	―		抹消	SF1
	SF5	A2	Ⅱ	0.5	－	0.1			SF1
ピット	Pit1	A1	Ⅱ	0.5	0.5	0.4	陶器		Pit1
	Pit2	A2	Ⅱ	0.5	0.4	0.2	陶器、鉄滓		Pit2
	Pit3	A2	Ⅱ	0.3	0.3	0.2			Pit3
	Pit4	A3	Ⅴ	0.7	0.6	0.2	土師器皿、瓦、鉄滓	鋳造関連遺構	Pit4
	Pit5	C4	Ⅳ	0.6	0.2	0.1	陶器擂鉢		Pit2
	Pit6	C4	Ⅳ	0.3	－	0.2			Pit3
	Pit7	C4	Ⅳ	0.4	－	0.1	土師器皿		Pit4
	Pit8	E1	Ⅳ	0.4	0.3	0.3	陶器擂鉢、瓦	根石あり	Pit4
	Pit9	E2	Ⅳ－Ⅴ	0.5	0.4	0.3	磁器		Pit5
	Pit10	F4	Ⅳ－Ⅴ	0.4	0.4	0.1	石臼		Pit1
	Pit11	F5	Ⅴ	0.4	－	0.3	陶器擂鉢		Pit2
	Pit12	C4	Ⅳ	0.3	0.3	0.2	土師器皿		Pit1
	Pit13	C4	Ⅳ	0.3	－	0.2	土師器皿		Pit2
	Pit14	C5	Ⅳ	0.3	－	0.1	陶器碗		Pit1
	Pit15	C5	Ⅳ	－	－	0.1	土師器皿、陶器擂鉢		Pit2
	Pit16	C5	Ⅱ	0.6	－	0.3	土師器皿		Pit3
	Pit17	G1	Ⅳ－Ⅴ	0.3	0.3	0.1	加工円盤	根石あり	Pit1
	Pit18	G1	Ⅳ－Ⅴ	0.3	0.3	0.2	砥石		Pit2
	Pit19	G1	Ⅳ－Ⅴ	－	－	0.1	土師器皿	根石あり	Pit3

第１表　遺構一覧表

Ⅳ　遺物

1　Ｂ地区

ＳＫ９出土遺物(１～５)　１は磁器碗で、波状の文様が描かれる。高台底面には釉がかかっておらず、切り込み状の孔が開けられ、砂が付着する。２は厚手の大型碗で、外面体部下半には釉はかからない。３・４は信楽産の陶器擂鉢で砂粒を多く含む。後者は片口を持ち、底面には擂り目が格子状に施される。畑中英二氏の信楽焼編年[1](以下、信楽編年)の３期中段階にあたり、17世紀後半のものと思われる。５は銭貨。摩滅が激しく、文字は判読できない。

ＳＫ10出土遺物(６～22)　６～８は陶器皿。６は灯明皿で暗赤褐色の釉がかかり、内面にはかえりには、１ヶ所に切り込みが入る。７は端反皿で、内面底部および高台底面には砂目が付着する。８は口縁が内彎する皿で、体部下半まで灰白色の釉がかかる。内面には植物と思われる文様が描かれる。９・12は磁器丸碗で、ともに高台底面には釉はかからない。９の体部外面には２つで１組の文様が３方向に描かれる。大橋康二氏の肥前磁器編年[2]第Ⅳ期にあたり、18世紀後半のものと考えられる。12の体部外面には植物と思われる文様が描かれ、底面には「大□年製」と書かれる。10・11は磁器広東茶碗で、ともに高台がやや高く、高台底面は施釉されない。体部外面に植物の文様が描かれる。肥前陶磁編年のⅤ期、藤澤良祐氏の近世瀬戸村産の陶磁器編年[3](以下、近世瀬戸村編年)の第10～11小期頃にあたり、19世紀中頃のものと考えられる。13は陶器鍋。褐色の釉が内面から外面体部中位までかかる。口縁部には２ヶ所に把手が付き、底部には１㎝程度の脚が貼り付けられている。外面には煤が付着する。14は陶器鉢で、外面体部下半には釉がかからない。底部は平底で、口縁部は外反した後に内側に折り返され、断面三角形を呈する。外面には煤が付着する。15は磁器の小壺で、植物文様が描かれる。16は陶器花瓶で、鉄釉が脚部内面を除き全体にかかる。頸部に把手が１対付き、脚は高い。信楽産であろうか。17は陶器水滴で、筆入れを模している。筆や硯、墨、瓢箪が表現されており、中央には孔が開けられ、水は瓢箪の先端に開けられた孔から注がれる。全体にオリーブ灰色の釉がかかり、筆や硯などの部分は暗褐色の彩色が施される。精巧な出来である。18は陶器急須。器壁は薄く、釉は内面口縁部から外面体部下半までかかる。口縁部は花弁状に広がっている。19は陶器鉢で、体部は垂直に立ち上がる。口縁部は肥厚し、上面に広い面を持つ。20は陶器の大甕。口縁部は肥厚し、上面に面を持つ。21は陶器鉢。釉は外面体部下半までかかり、内面には粗い砂目が付着する。平底で、口縁部は肥厚し、外側に折り返される。体部外面には鉄釉が帯状にかけられる。22は口縁部大甕。釉は体部外面下半までかかる。口縁部は上端に広い面を持ち、体部上半に櫛描の直線文が施される。内面にはトチン痕が残る。

ＳＤ４出土遺物(23・24)　23は土師器皿。外面底部には指オサエ痕が残る。24は浅い陶器鉢で、器壁は厚い。内面から外面口縁部にかけて釉がかかる。

包含層・表土出土遺物(25～35)　25・26は土師器皿で、ともに口径が８㎝弱と小さい。前者には外面にかすかに指オサエ痕が残る。28は陶器丸碗で、外面体部下半以下には釉がかからない。27は磁器皿で、内面には口縁部に四方襷文が、底面には植物の文様が描かれる。蓋の可能性も考えられる。29は磁器丸碗で、内面は口縁部に四方襷文、底部に植物文様が描かれる。外部は植物文様か宝文様が描かれる。27・29ともに外面底部に落款のような二重囲みの文字が見られる。これらの時期は、肥前磁器編年のⅣ期にあたり、18世紀後半のものと考えられる。30は軒丸瓦の瓦当。31は表土から出土したキセル。すべて金属製で、体部には直線文と螺旋文の装飾が施される。32～34は銭貨。32は寛永通宝。33・34は北宋銭で、前者は明道元宝(1032年初鋳)、後者は熙寧元宝(1068年初鋳)。35は石臼。

2　Ｃ地区

ＳＫ11出土遺物(36～45)　36・37は土師器の焙烙。

器壁は薄く、口縁端部はつまみ上げられる。前者は外面に煤が付着する。後者は外面頸部に指オサエ痕が見られる。38・39は陶器端反碗で、ともに全面に灰白色の釉が、口縁部には緑色の釉がかかる。近世瀬戸村編年第９～10小期頃のものであろう。40～42は磁器碗。40は内部口縁部に四方襷文、底部に蒟蒻印判が、外面体部には落款状のものが見られる。41は高台部のみ欠損する。内面には「寿」の文字が描かれ、砂粒が多数付着する。肥前磁器編年のⅣ期以降のものと考えられる。43・44は瀬戸美濃産の陶器火鉢で、「呂宋瓶掛」と呼ばれるものである。底部を除く外面全体に緑釉がかかる。43は体部で球形を呈し、体部上半には３種類の押印文が三重に巡る。把手には、獅子の顔を立体的に表現したものが貼り付く。44は43の台脚部で、外面に雷文が巡り、内面には砂目が付着する。台座は焼き歪みによるひび割れが認められ、雷文も水平が保たれていない部分があるなど、やや緊張感に欠ける仕上がりである。底部には直径５㎜程度の孔が２ヶ所に穿たれ、外面には墨書が見られる。墨書は４文字と思われるが判読できない。「瓶掛」という名称は、中で炭を焚き、鉄瓶を湧かしたことに由来するが、43・44とも、内面には火を焚いた形跡が無く、未使用品か観賞用として用いられた物であろうか。近世瀬戸村編年の第９小期にあたり、19世紀初頭のものと考えられる。45は軒丸瓦。

ＳＫ12出土遺物(46～50)　46～48は土師器皿で、いずれも直径が８～９㎝のもの。47は底部がやや盛り上がり、胎土に砂粒を含む。48は底部が尖り、外面体部下半に指オサエ痕が見られる。49は陶器鉢で、口縁部は上面に広い面を持つ。内面口縁部から外面体部下半まで白い砂粒状の釉がかかる。調整は全体的に粗い仕上がりである。50は信楽産の陶器擂鉢で、高い高台を持ち、外面には鉄釉が二度掛けされる。信楽編年の４期以降のものである。

ＳＦ３出土遺物(51)　土師器皿で、体部外面には指オサエ痕が残る。

ＳＫ13出土遺物(52・53)　いずれも信楽産の陶器擂鉢。52は口縁部がやや外反する。端部外面に面を持ち、２条の凹線を持つ。53の口縁は真っ直ぐ伸び、端部は丸く収まる。52は信楽編年の３期古段階、53は３期中段階のものと考えられる。

Ｐｉｔ出土遺物(54・55)　54はＰｉｔ14から出土した天目茶碗で、口縁端部が薄く僅かに外反する。近世瀬戸村編年の第４小期にあたり、17世紀後半のものと考えられる。55はＰｉｔ５から出土した信楽産の陶器擂鉢で、口縁端部外側に屈曲させて上面に面を持たせ、外面口縁端部直下に沈線を持つ。擂り目は使用のため下半が摩滅している。信楽編年の２期新段階に属するものと思われる。

包含層ほか出土遺物(56～80)　56は陶器皿で底部には糸切り痕が見られる。57～58は土師器皿。57は直径７㎝程度の小さい皿で、外面体部下半には指オサエ痕が見られる。59は土師器焙烙。口縁端部は上方に摘み上げられる。60・61は陶器蓋。60は直径８㎝程度の小さなもので、径２㎜程度の孔が開き、摘みは欠損する。61は直径18㎝を超える大型の蓋で、摘みは逆Ｕ字形のものが貼り付く。上面には鉄釉がかかる。62は陶器の小碗。内面から外面口縁部にかけて淡黄色の釉がかかる。63は浅い高台を持つ陶器皿で、底面には砂目が見られる。64は陶器皿で、内面から外面口縁部にかけて灰白色の釉が施される。内面にはかすかにハケ痕が残る。外面口縁端部に油煙が付着する。65・66は陶器天目碗。65は丸碗で、近世瀬戸村編年の第４小期のものと考えられる。66は第３小期のもの。67は片口を持つ陶器擂鉢で、内面底部には格子状に擂り目が施される。信楽編年の３期新段階にあたり、18世紀前半のものと考えられる。68は陶器皿で、外面体部下半には釉がかからない。内面はリング状に釉が掻き取られる。69は磁器皿で、高台底部には釉はかからない。内面口縁部には四方襷文が、外面には蔦状の植物をあしらった区画文が描かれる。蓋の可能性も考えられる。70～74は磁器碗。70は小碗で、外面には植物文様が描かれ、その上に朱書きで「小佛屋」「平」と書かれる。屋号と思われる。71は広東茶碗で、外面には竹などの植物文様が、内面底部には「寿」の文字が見られる。72・74は丸碗。ともに内面口縁部に四方襷文が、外面には植物文様が描かれる。74の内面底部には蒟蒻印判が、外面底部には文字と思われる文様が描かれる。73は蕎麦猪口で、外面には植物文様が規格的に描かれ、内面には砂粒が付着する。これらの磁器は、

概ね肥前磁器編年のⅤ期にあたり、19世紀前半のものと考えられる。75は石臼の形を模した泥面子で、上面には擂目の模様が施され、底面には指オサエ痕が残る。76は円筒埴輪。77～80は銭貨。77のみ文久通宝(1862年初鋳)で、裏面には11の波紋が見られる。他は全て寛永通宝。

3　D地区

ＳＫ16出土遺物(81)　瀬戸美濃産の陶器端反皿。浅い高台が付き、内面底部には紗綾形文と思われる幾何学文様が印刻される。

包含層出土遺物(82～93)　82～84は土師器皿で赤褐色か橙色の釉がかかる。82・84は内面に強いハケ痕で、前者には２条の直線が、後者には口縁部を一周する直線がそれぞれ描かれている。83には内面口縁部に突起が３箇所付く。上に何かを載せて使用したのであろうか。85は磁器蓋で、上面に円形の摘みが付き、内面には浅いかえりが見られる。上面のみ釉がかかる。86～88は磁器碗。86は丸碗で、高台底部および高台内部には釉はかからない。外面には菊文様が描かれる。87は端反碗で、高台はやや外側に開く。外面および内面底部に植物文様が描かれる。88は丸碗で高台底面には釉がかからない。外面には折枝梅文様が、内面底部には「寿」であろうか文字が見られる。これらの磁器碗は、肥前磁器編年のⅣ期以降のものと考えられる。89は陶器の小瓶で、浅い高台が付く。内面から外面体部下半まで鉄釉がかかる。90は寛永通宝。直径が小さく孔が大きいため重量が2.73ｇと軽い。91は陶器の大皿で、口縁部は外側に一旦外に折れ、端部は上方に丸く収まる。内面底部には建物や植物を含む風景が描かれ、３箇所にトチン痕が残る。92は陶器擂鉢で、口縁端部は上方に摘み上げられ、断面三角形を呈する。内面底部には格子状に擂り目が施される。信楽編年の３期中～新段階のものと考えられる。93は石臼。

4　E地区

ＳＤ５出土遺物(94・95)　ともに土師器皿。94は中央が若干盛り上がり、口縁部はやや外反する。95は口縁部が肥厚し、外面体部過半には指オサエ痕が残る。

ＳＤ６出土遺物(96～101)　96～98は土師器皿。96は器壁が厚く、外面体部下半には指オサエ痕が残る。内外面には黒斑が見られる。97は灯明皿で、口縁端部には油煙が付着する。98は96と同色で器壁も厚い。外面体部下半に指オサエ痕が見られる。99～101は磁器皿。99の高台はやや外に開く。口縁端部は内外面ともに幾何学文様帯が、外面体部下半および内面底部に植物文様が描かれる。100は内面底部を８分割し、そのうち４区画に桜や菊などの花文様や流水や亀甲文様が描かれる。101は内面底部を10区画に分割し、そのうち５区画に桜と亀甲文様が描かれる。これらの磁器は、肥前磁器編年のⅤ期に属するものと考えられる。

ＳＫ18出土遺物(102)　102は移動式の竈で、口縁端部は肥厚し、上面に広い面を持つ。外面の口縁部と底部には沈線が巡る。外面には円形の小さい透かし孔が２つ、ドーム形の大きな透かし孔が１つ見られる。内外面ともに煤が激しく付着し、内面には炭化物もみられる。

ＳＫ19出土遺物(103)　陶器甕で、口縁端部は緩やかに内彎する。

ＳＫ22出土遺物(104・105)　104は磁器椀。105は陶器大皿。内面にはリング状に区画された中に波線が巡り、砂目が５箇所に見られる。

包含層出土遺物(106～110)　106～108は土師器の灯明皿で、口縁端部に油煙が付着する。いずれも外面に指オサエ痕が残る。109は南伊勢系の焙烙で、口縁端部が折り返され、断面三角形を呈する。外面には煤が付着する。110は磁器丸碗で、器壁は厚く重量感がある。高台底面には釉がかからない。外面には植物文様、内面底部には蒟蒻印判が見られる。

5　F地区

ＳＫ25出土遺物(111・112)　111は磁器皿で、内面口縁部には雷文帯が、内面底部には植物文様、外面には魚の文様が描かれる。肥前磁器編年のⅤ期のもの。112は鞴羽口で、直径は8.2㎝。

ＳＫ23出土遺物(113)　磁器端反皿で、内面の体部に格子文様が、底部には扇文様が描かれる。内面底部にはトチンが残り、高台内部はリング状に釉が掻き取られる。肥前磁器編年のⅤ期に属する。

Ｐｉｔ出土遺物(114・115)　114はＰｉｔ11から出

土した陶器擂鉢で、内面底部には格子状の擂り目が施される。115はＰｉｔ10から出土した石臼。

6　Ｇ地区

ＳＤ７出土遺物(116～118)　116は土師器皿。117は土師器鍋の口縁部で、端部は上方に摘み上げられ、外面には面を持つ。外面には煤が付着する。118は陶器天目茶碗で、口縁端部は外反する。近世瀬戸村編年の第６小期に属する。

ＳＫ27出土遺物(119～121)　119は黄灰色を呈する土師器焙烙で、口縁端部は上方に摘み上げられる。120は陶器丸碗で、灰オリーブ色を呈する。近世瀬戸村編年の第４～第６小期に属するものと考えられる。121は陶器鉢で、体部は垂直に立ち上がり、口縁端部は内側に折り返され、上面に広い面を持つ。

ＳＫ28出土遺物(112)　磁器の小瓶で、外面には植物の文様が描かれる。底部には糸切り痕が残る。

Ｐｉｔ出土遺物(123～125)　123はＰｉｔ17から出土した加工円盤。天目碗の高台を加工したもの。124はＰｉｔ18は砥石で、両面とも使用されている。125はＰｉｔ19から出土した土師器皿で、器壁はやや厚い。

包含層ほか出土遺物(126～151)　126～133は土師器皿。126～129は直径７～８㎝程度の小さいもので、体部には指オサエ痕が残る。131～133は直径10㎝程度のもので、131は外面に煤が付着する。133は器壁が厚く、外面には指オサエ痕が残る。内外面とも煤が付着する。134は土師器焙烙で、口縁端部は上方に摘み上げられる。外面には煤が付着する。135・136は陶器天目碗で、136は口縁端部の屈曲が弱く、表面に細かい凹凸が多く見られる。これらの天目碗は、近世瀬戸村編年の第５～第６小期のものと考えられる。137～139は陶器鉢。137は口縁部が波状になる鉢で、外面には竹をあしらった文様が立体的に表現され、竹の節が表現されている。亀のような立体表現があるが、大半が欠損している。138は口縁端部が内側に折り返され、上面に広い面を持つ。139は直径10㎝程度の小さい鉢で、体部は一旦外に開いた後に垂直に立ち上がる。口縁端部は内側に折り返され、上面に面を持つ。釉は内面から外面体部中位までかかる。外面体部下半には煤が付着している。140・141は信楽産の陶器擂鉢。140は口縁端部は僅かに外反し、内面には使用痕が見られる。ともに信楽編年３期古段階にあたり、17世紀中頃のものと考えられる。142は常滑産の陶器甕。頸部が垂直に立ち上がり、口縁端部は外反して上面に面を持つ。底面には浅い貼付高台が付く。143は口径が60㎝を超える大甕で、口縁部は緩やかに内彎している。信楽編年の３期中～新段階のものと考えられる。144は小型の移動式竈であろうか、ドーム形を呈するものと考えられる。体部上半に円形の透かし孔が、正面には焚き口と考えられる長方形の孔が開いている。145は陶器皿で、内面から外面体部下半まで釉がかかるが、内面底部はリング状に釉が掻き取られる。146は陶器の八角皿で、外面には文字が書かれる。147は磁器丸碗で、内面口縁部には連続輪文の文様帯が、内面底部および外面には植物文様が描かれる。148は磁器端反碗。口縁端部の外反は弱く、高台は外に開く。内面口縁部に連続する升目の区画文が、外面には草花および亀甲文様が描かれる。これらの磁器碗は肥前磁器編年のⅣ期以降のものと考えられる。149は三巴の軒丸瓦。150・151は銭貨で、ともに寛永通宝。

7　Ａ地区

ＳＤ１出土遺物(152～157)　152・153は土師器皿で、ＳＤ１の横で伏せて重ねられていたもの。152は153の下に置かれていたもので、中央底部の器壁は肥厚する。154・155も土師器皿で、口を合わせるようにして溝の壁に立て掛けられていた。154が上となっていた。155の外面には墨書の痕跡が見られるが、極めて薄く判読できない。これらの土師器皿の間には、156の石や157の瓦片が挟まれていた。156は三角形を呈する拳大の自然石で、157は軒平瓦片。これらの遺物は祭祀に関わるものと考えられる。

ＳＤ２出土遺物(158～160)　158は土師器皿で、中央底部は肥厚し、盛り上がる。外面体部下半には指オサエ痕が残る。159は陶器天目碗で、口縁部は僅かに外反する。近世瀬戸村編年の第３小期のもの。160は加工円盤。

ＳＫ５出土遺物(161～164)　161は土師器皿で、体部下半には指オサエ痕が残る。162・163は磁器碗。162は小型の端反碗で、胎土は明赤褐色を呈する。

外面には植物文様が描かれる。163は丸碗であろうか、口縁部は欠損している。肥前磁器編年のⅢ期以降と考えられる。164は陶器天目碗。

ＳＦ１出土遺物(165)　165は土師器皿で、体部外面には指オサエ痕が残る。

包含層ほか出土遺物(166～171)　166・167は土師皿。166は直径7.5㎝とやや小さく、内外面に指オサエ痕が残る。167は外部底面が工具ナデによって調整されている。168は陶器蓋で、底面には糸切り痕が残る。上面には逆U字状の摘みが付くが、欠損している。169は陶器擂鉢で、口縁部は緩やかな凹線が巡る縁帯を持ち、端部は上方に摘み上げられ断面三角形を呈する。内面口縁部には凸帯を持ち、擂り目の幅は広い。内面底部には、周囲を一巡した後、不定方向の擂り目が施される。信楽編年の３期新段階以降のものと考えられる。170は鞴羽口で、Ａ３区の焼土群に関するものであろう。171は石臼。

８　立会調査

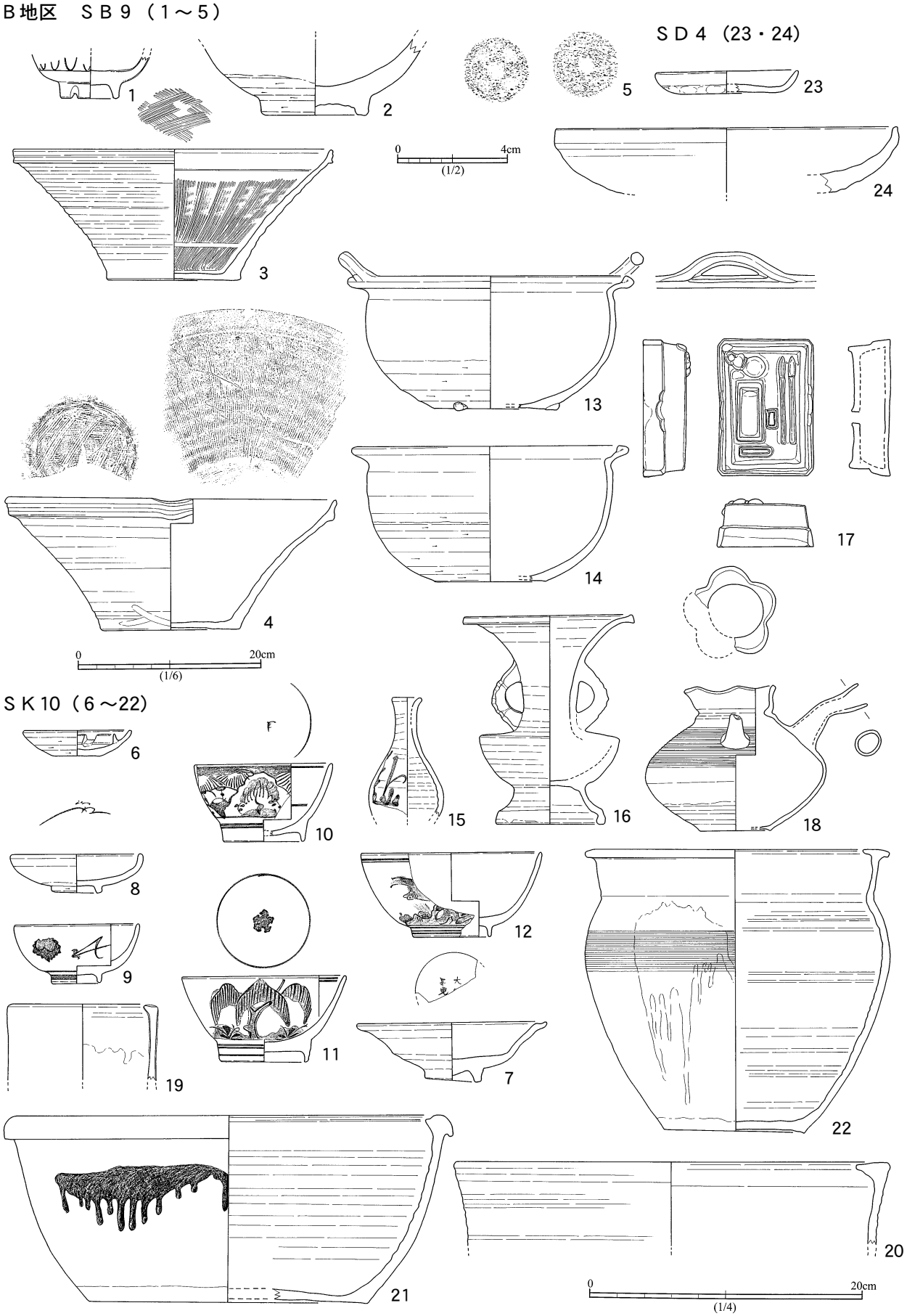
172は№.１地点から出土した磁器碗で、外面体部には植物文様が描かれ、内面底部には「寿」であろうか文字が見える。また、外部底面には朱書きで「花木や」と書かれている。173は№.２地点から出土した陶器皿で、浅いケズリ出しの高台が付く。高台内部には釉はかからない。174・175は№.３地点から出土したもの。174は銭貨で、種別は不明。175は銅製の釘で、長さは20㎝。頭は円形で、茎部は方形から八角形を呈する。176～180は№.４地点から出土したもの。176～178は土師器皿。177は中央底部が肥厚し、体部外面には指オサエ痕が残る。178は直径13㎝を超える大型の土師器皿。179は磁器丸碗で、高台底面には砂が付着する。外面には宝文様であろうか、内面底部には植物文様が描かれる。180は銭貨で寛永通宝。181・182は№.５地点から出土したもの。181は土師器皿で、外面体部下半には指オサエ痕が残る。182は陶器擂鉢で、片口を持つ。信楽編年の３期古～中段階のもの。183は№.６地点から出土した磁器皿。草状の文様や花の文様が規格的に描かれる。外面にも草状文様が描かれる。184～187は№.７地点から出土したもの。184は陶器蓋で、上面には小さな摘みが付く。釉は上面にしかかからない。185は蜜柑の形を模した水滴。上下別々に作成され、内面には指オサエ痕が残る。体部中位で接合した後に施釉している。上面には直径５㎜程の孔が開けられる。葉やヘタの部分は立体的に表現され、緑色の釉がかかる。油胞も表現されており、精巧なつくりである。186は小型の磁器端反碗。外面および内面底部には旗や宝文様が描かれる。肥前磁器編年のⅤ期のものと考えられる。187は土錘。188・189は№.８地点より出土した陶器蓋。189は直径が11㎝と大きく、上面に摘みが付く。184も同種の製品で、大中小の３規格があったことが窺える。190は№.９地点より出土した陶器皿で、上面には砂粒が付着している。口縁端部に油煙のようなものがかすかに付着している。№.９地点では、この他170.54ｇの椀形鉄滓も出土している。191は№.10地点から出土した天目碗。192・193は№.11地点から出土したもの。192は土師器皿。193は陶器の小杯で、胎土は赤褐色を呈する。底面は平底で、糸切り痕が残る。194は№.12地点から出土した小型の陶器鉢。底部にはトチン痕が残る。195～207は№.13地点から出土したもので、197～201・205・207は土間直下から出土している。197は土師器皿で体部外面に指オサエ痕が残る。198は陶器甕で、口縁端部はやや肥厚する。内面頸部直下に指オサエ痕が見られる。199～201は陶器天目碗で、201のみ丸碗となる。近世瀬戸村編年の第４～第５小期に属するものと考えられる。202～206は陶器擂鉢。202は外面口縁部に凹線が巡る縁帯を持つ。205は器高の割に口径が狭く、口縁端部は若干肥厚する。205は信楽編年の２期新段階新相、他のものは３期古～中段階に属するものと考えられる。207は磁器碗で、高台はやや内傾する。体部外面には「寿」の文字が多数書かれ、内面底部には植物文様、外面底部には「太明」の文字が見える。肥前磁器編年Ⅳ期以降のものと考えられる。

【註】

(1) 畑中英二『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版、2003
(2) 大橋康二『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社、1989
(3)「第九節　近世瀬戸村の窯業生産」『瀬戸市史』陶磁史篇六、瀬戸市史編纂委員会、1998

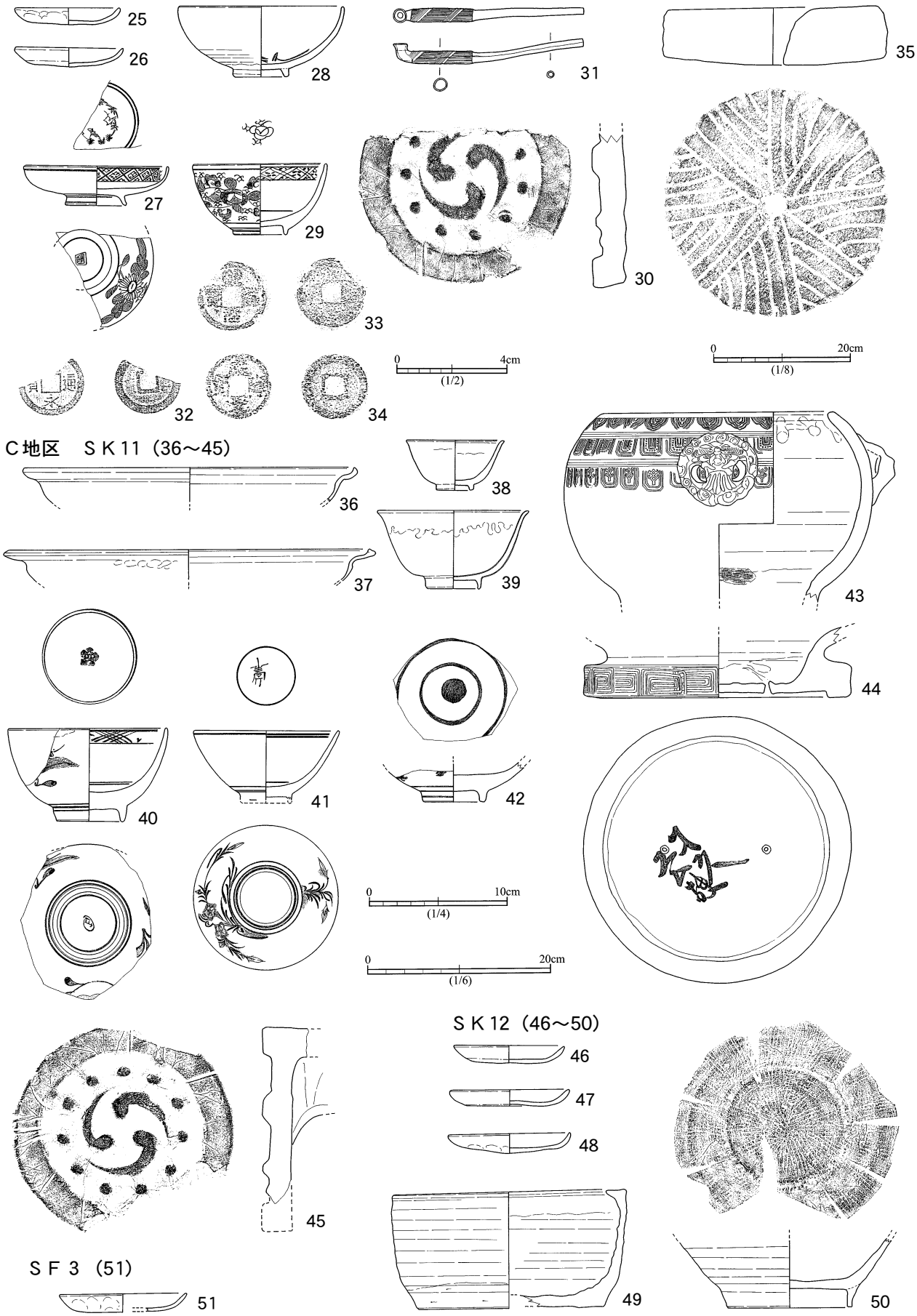
【参考文献】

・大橋康二『古伊万里の文様』理工学社、1994

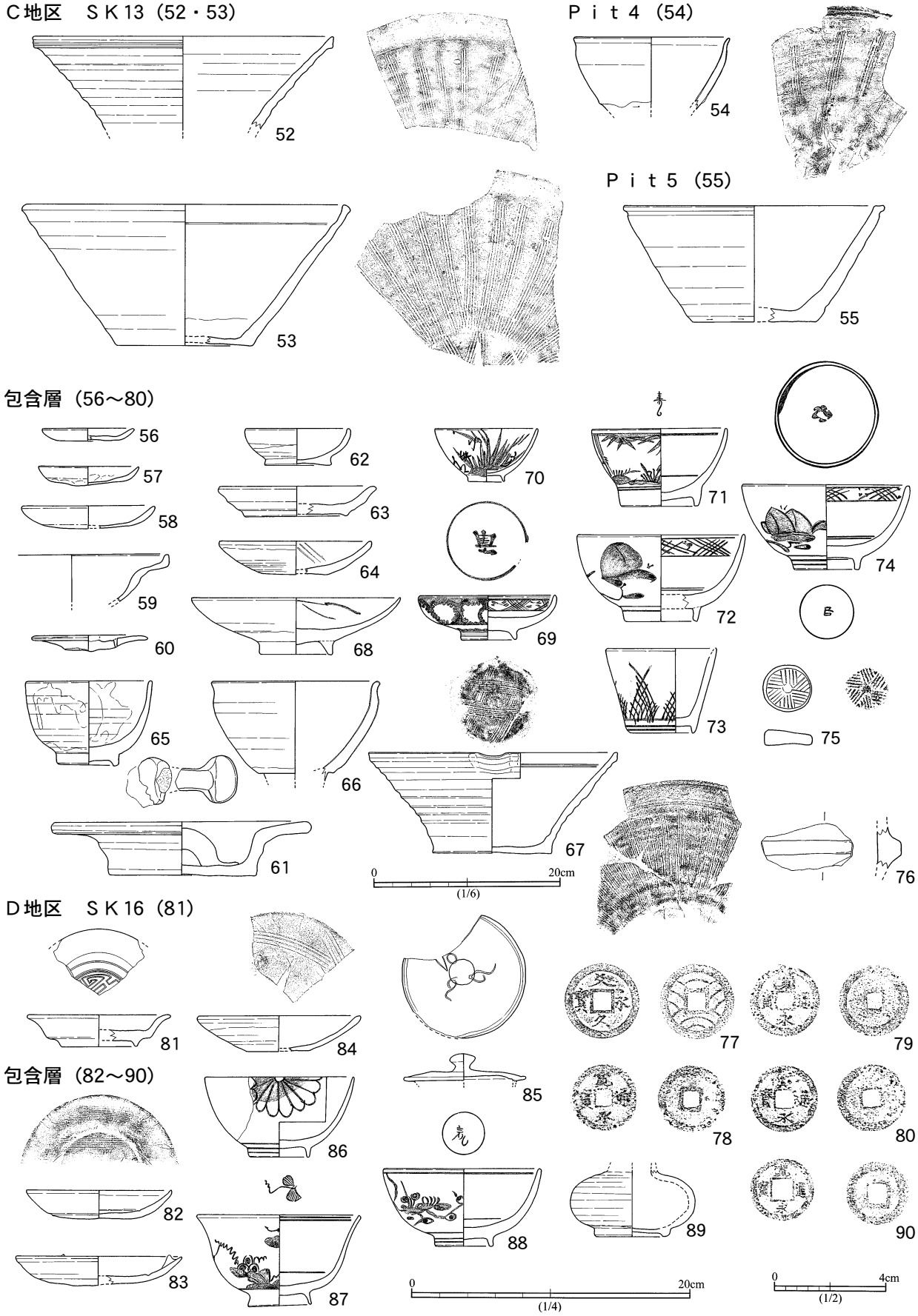


第16図　遺物実測図（5：1/2、3・4：1/6、その他：1/4）

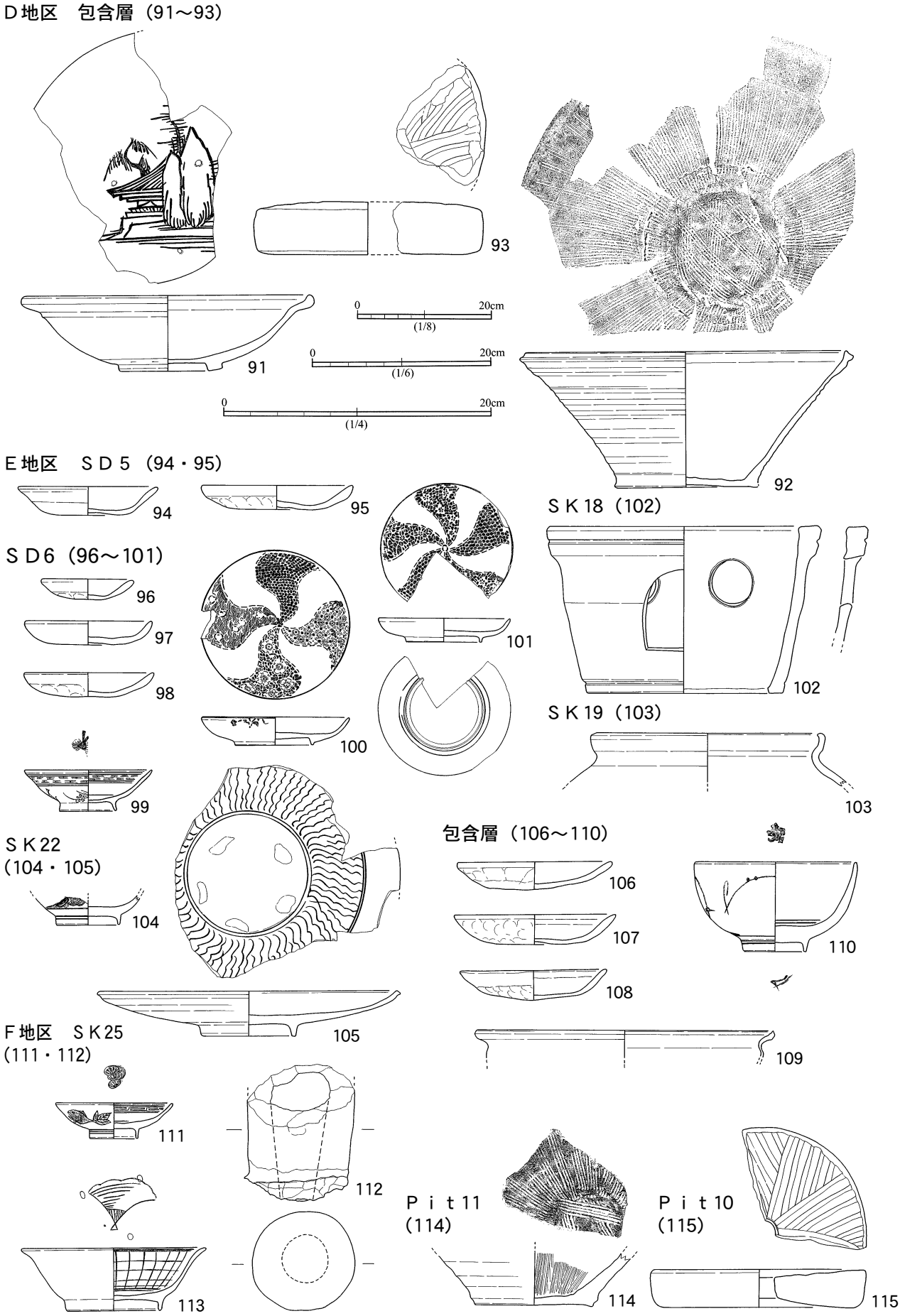
B地区　包含層ほか（25～35）



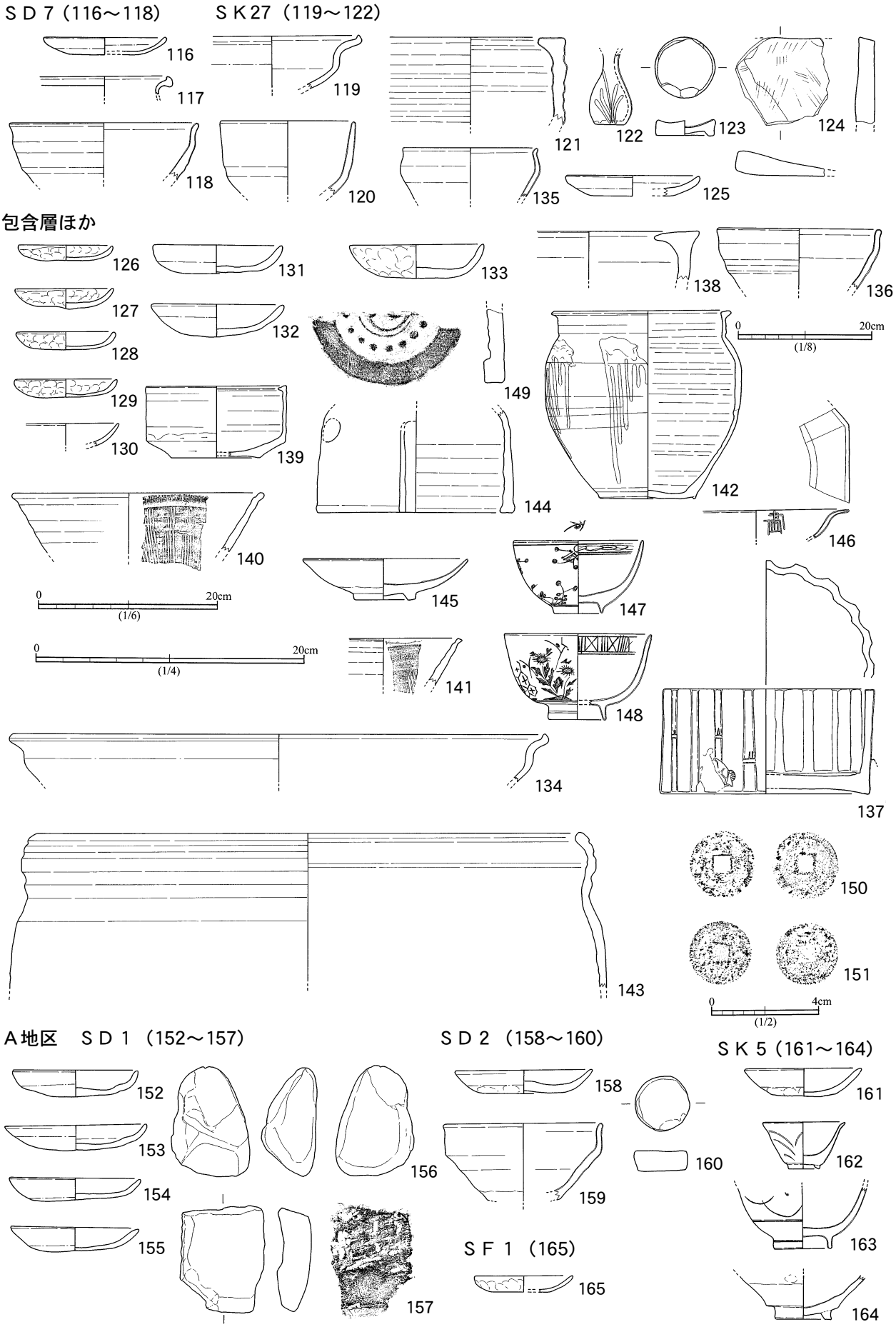
第17図　遺物実測図（33～34：１/２、50：１/６、35：１/８、その他：１/４）



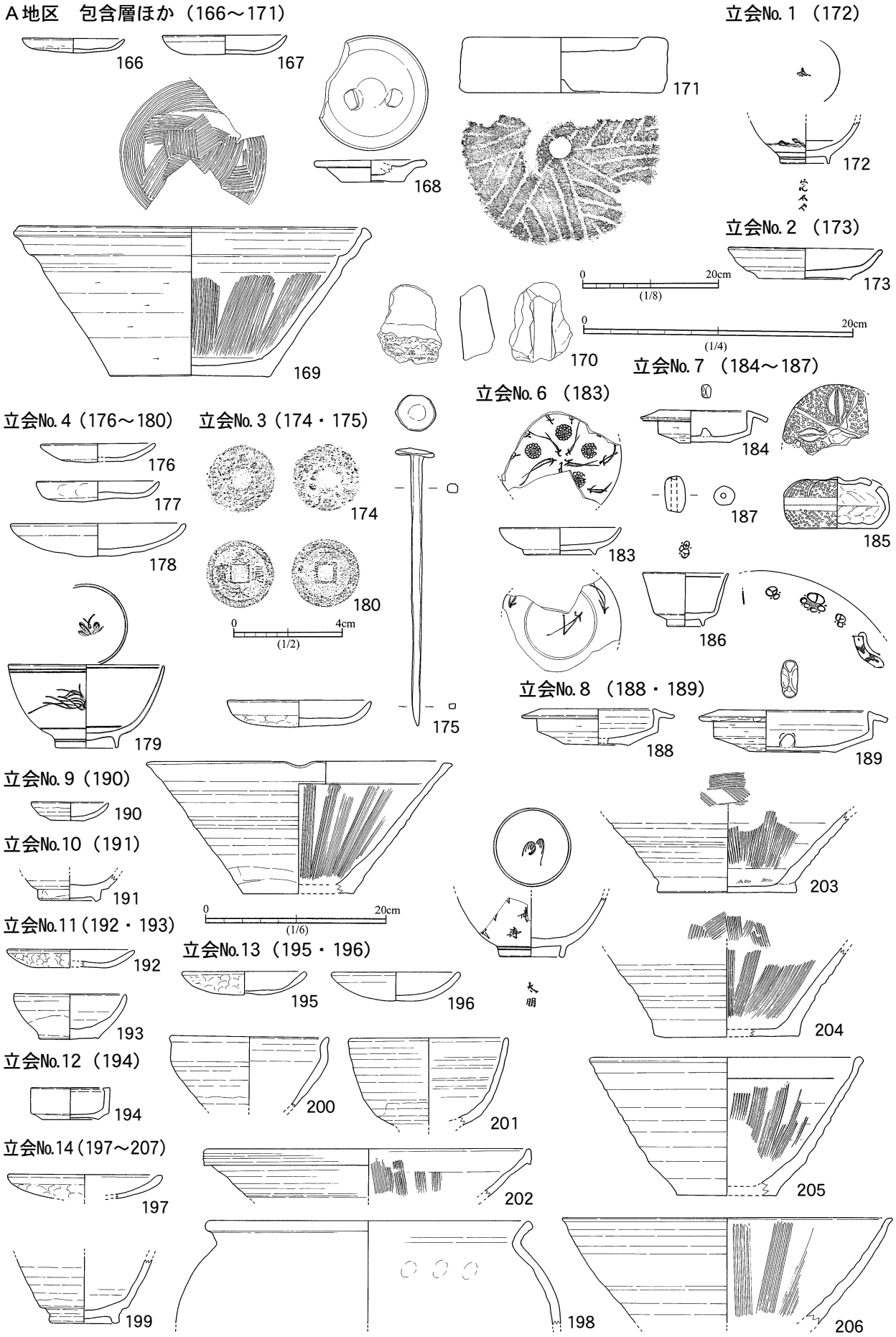
第18図　遺物実測図（77～80・90：１/２、52・53・55・67：１/６、その他：１/４）



第19図　遺物実測図（92・102・114：1/6、93・115：1/8、その他：1/4）



第20図　遺物実測図（150・151：１/２、140・143：１/６、142：１/８、その他：１/４）



第21図　遺物実測図（174・180：１/２、169・182・198・202～206：１/６、171：１/８、その他：１/４）

番号	次数	登録番号	種別器形	グリッド遺構・層位	計測値(cm)			調整および技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径直径	器高厚さ	底径台径						
1	1・2次	14-1	陶器碗	B3 SK9	−	−	4.2	ロクロナデ→施釉、台部切り込み？	密	良	明緑灰	(台)12/12	
2	1・2次	12-4	陶器鉢	B3 SK9	−	−	7.8	ロクロナデ・ロクロケズリ→施釉	やや密	良	灰白	(台)8/12	
3	1・2次	12-1	陶器擂鉢	B3 SK9	34.8	14.3	14.7	ロクロナデ、擂り目	やや粗	良	灰赤	(口)2/12 (底)6/12	信楽産
4	1・2次	5-1	陶器擂鉢	B3 SK9	36.0	14.5	15.1	ナデ、ケズリ	密	良	灰白	(口)7/12 (底)8/12	信楽産
5	1・2次	1-4	銭貨	B3 SK9	2.4	0.1	−	−	−	良	−	12/12	重量:2.74g
6	1・2次	7-5	陶器皿	B3 SK10	7.9	1.9	3.5	ロクロナデ、ロクロケズリ	密	良	暗赤褐	(口)11/12(底)12/12	
7	1・2次	7-2	陶器皿	B3 SK10	13.9	4.3	4.2	ロクロナデ→施釉	密	良	灰白	(口)2/12（台)12/12	内面に重ね焼痕
8	1・2次	7-4	陶器皿	B3 SK10	9.5	3.8	3.7	ロクロケズリ→施釉	密	良	灰白	(台)12/12	
9	1・2次	7-3	磁器碗	B3 SK10	9.2	4.2	3.6	ロクロナデ→施釉	密	良	白	(口)9/12 (台)12/12	
10	1・2次	8-4	磁器碗	B3 SK10	10.1	5.6	5.9	ロクロナデ→施釉	密	良	白	(口)3/12 (台)5/12	
11	1・2次	8-2	磁器碗	B3 SK10	12.0	6.2	6.5	ロクロナデ→施釉	密	良	白	(口)8/12 (台)12/12	
12	1・2次	8-1	磁器碗	B3 SK10	13.2	6.1	5.7	ロクロナデ→施釉	密	良	白	(口)2/12 (台)5/12	底面「大□年製」？
13	1・2次	13-1	陶器鍋	B3 SK10	20.8	11.4	8.0	ロクロナデ・ロクロケズリ→施釉	密	良	褐	(口)5/12	把手・足あり 外面煤付着
14	1・2次	3-2	陶器鉢	B3 SK10	20.0	9.8	8.0	ロクロナデ・ロクロケズリ→施釉	密	良	にぶい赤褐	(口)2/12（底)1/12	外面煤付着
15	1・2次	7-6	磁器瓶	B3 SK10	2.2	−	−	ロクロナデ→施釉	密	良	白	(口)12/12	
16	1・2次	7-1	陶器瓶	B3 SK10	12.5	15.1	8.0	ロクロナデ→施釉、貼付把手	密	良	にぶい黄褐	(口)7/12 (台)12/12	信楽産？
17	1・2次	14-3	陶器水滴	B3 SK10	−	−	−	施釉、オサエ	密	良	にぶい黄褐	12/12	
18	1・2次	6-1	陶器急須	B3 SK10	6.8	10.5	5.1	ロクロナデ、ロクロケズリ	密	良	にぶい黄褐	9/12	
19	1・2次	8-3	陶器鉢	B3 SK10	11.0	−	−	ロクロナデ→施釉	密	良	にぶい黄褐	(口)5/12	
20	1・2次	3-1	陶器甕	B3 SK10	47.4	−	−	ロクロナデ→施釉	密	良	にぶい黄褐	(口)1/12	
21	1・2次	42-1	陶器鉢	B3 SK10	32.5	13.5	20.2	ロクロナデ→施釉、ケズリ→ナデ	密	良	にぶい黄褐	(口)8/12 (底)12/12	
22	1・2次	2-1	陶器甕	B3 SK10	33.0	30.6	15.2	ロクロナデ→施釉、ケズリ、櫛描	密	良	にぶい黄褐	(口)5/12 (底)11/12	内面にトチン痕
23	1・2次	12-3	土師器皿	B3 SD4	10.5	1.6	−	ナデ、オサエ	やや密	良	にぶい黄褐	3/12	
24	1・2次	12-2	陶器鉢	B3 SD4	25.0	−	−	ロクロナデ→施釉	やや密	良	にぶい黄褐	(口)1/12	
25	1・2次	6-5	土師器皿	B2 表土	7.7	1.2	−	ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄褐	8/12	
26	1・2次	15-2	土師器皿	B2 表土	7.9	1.4	−	ナデ	やや密	良	にぶい黄褐	12/12	
27	1・2次	14-2	磁器皿	B3 表土	10.5	2.9	4.4	ロクロナデ→施釉	密	良	にぶい黄褐	(口)3/12 (台)8/12	
28	1・2次	16-3	陶器碗	B4 カクラン	12.1	5.1	4.0	ロクロナデ→施釉	密	良	にぶい黄褐	(口)1/12 (底)12/12	
29	1・2次	8-5	磁器碗	B3 表土	9.8	5.1	4.0	ロクロナデ→施釉	密	良	にぶい黄褐	(口)3/12 (台)5/12	
30	1・2次	13-2	軒丸瓦	B3 包含層	15.1	−	−	ナデ、オサエ、ケズリ	やや粗	良	にぶい黄褐	9/12	連珠文、三つ巴
31	1・2次	1-7	キセル	B3 表土	13.7	0.8～0.5	−	−	−	良	−	12/12	重量:16.20g
32	1・2次	1-6	銭貨	B3 カクラン	2.4	0.1	−	−	−	良	−	7/12	寛永通宝 重量:1.96g
33	1・2次	1-3	銭貨	B3 包含層	2.5	0.1	−	−	−	良	−	11/12	重量:2.05g
34	1・2次	1-5	銭貨	B3 包含層	2.4	0.1	−	−	−	良	−	12/12	重量:3.78g(砂粒付着)

第２表　遺物観察表

番号	次数	番号	形	遺構・層位	口径直径	器高厚さ	底径台径	調整および技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
35	1・2次	21-1	石臼	B2表土	32.8	9.6	－	－	－	良	－	12/12	
36	1・2次	31-2	土師器鍋	C1 SK11	36.4	－	－	ナデ	やや密	良	にぶい橙	(口)2/12	焙烙 煤付着
37	1・2次	31-3	土師器鍋	C1 SK11	40.2	－	－	ナデ、オサエ	やや密	良	にぶい褐	(口)1/12	焙烙
38	1・2次	32-4	陶器碗	C1 SK11	7.1	3.6	2.6	ロクロナデ→施釉、削出高台	密	良	灰白	(口)3/12	
39	1・2次	32-3	陶器碗	C1 SK11	11.0	5.6	4.0	ロクロナデ→施釉、削出高台	密	良	灰白	(口)2/12	
40	1・2次	18-1	磁器碗	C1 SK11	11.6	6.7	5.0	ロクロナデ→施釉	密	良	灰白	(口)2/12 (台)12/12	
41	1・2次	18-2	磁器碗	C1 SK11	10.6	5.2	3.8	ロクロナデ→施釉	密	良	灰白	(口)11/12 (台)1/12	
42	1・2次	17-4	磁器碗	C1 SK11	－	－	4.5	ロクロナデ→施釉	密	良	灰白	(台)12/12	
43	1・2次	19-1	陶器鉢	C1 SK11	17.0	－	－	ロクロナデ→施釉、スタンプ、横線2条	やや密	良	深緑	(口)4/12	内面布目痕 瀬戸美濃産呂宋瓶掛
44	1・2次	19-2	陶器鉢	C1 SK11	－	－	19.5	ロクロケズリ、ロクロナデ→施釉、穿孔、スタンプ	やや密	良	深緑	(台)12/12	43と同一個体。 底面墨書あり
45	1・2次	18-3	軒丸瓦	C1 SK11	15.2	－	－	ナデ、オサエ	やや粗	良	灰	8/12	連珠文、三巴文
46	1・2次	15-4	土師器皿	C2 SK12	7.9	1.2	－	ナデ	密	良	浅黄橙	12/12	
47	1・2次	15-1	土師器皿	C2 SK12	8.7	1.0	－	ナデ	やや密	良	にぶい黄橙	12/12	
48	1・2次	15-5	土師器皿	C2 SK12横	9.0	1.4	－	ナデ、オサエ	密	良	にぶい橙	11/12	
49	1・2次	17-1	陶器鉢	C2 SK12	16.6～17	7.8～8.7	13.5	ロクロナデ・ロクロケズリ・オサエ→施釉	やや粗	良	浅黄橙	(口)11/12(底)12/12	
50	1・2次	28-1	陶器擂鉢	C2 SK12	－	－	13.7	ナデ→施釉、擂り目、貼付高台	密	良	赤灰	(台)11/12	信楽産
51	1・2次	40-3	土師器皿	C2 SF3	9.2	1.3	－	ナデ、オサエ	密	良	にぶい橙	4/12	
52	1・2次	38-1	陶器擂鉢	C4 SK13	32.0	－	－	外面:ナデ→施釉、内面:擂り目→施釉	粗	良	暗赤褐	(口)2/12	信楽産
53	1・2次	37-1	陶器擂鉢	C4 SK13	25.0	14.9	14.4	ナデ、内面:擂り目	粗	良	暗赤褐	(口)1/12 (底)4/12	信楽産
54	1・2次	35-1	陶器碗	C5 Pit14	11.1	－	－	ロクロナデ→施釉	密	良	黒褐	(口)2/12	天目
55	1・2次	28-2	陶器擂鉢	C4 Pit15	27.8	12.5	13.0	ナデ、ケズリ、内面:擂り目	密	良	にぶい赤褐	(口)1/12 (底)3/12	信楽産
56	1・2次	15-6	陶器皿	C2 包含層	6.6	1.0	－	ナデ、底部糸切り痕、内面:施釉	密	良	明赤褐	6/12	
57	1・2次	15-3	土師器皿	C2 包含層	7.1	1.3	－	ナデ、オサエ	密	良	浅黄橙	8/12	
58	1・2次	15-9	土師器皿	C2 包含層	9.6	1.6	－	ナデ	密	良	浅黄橙	5/12	灯明皿 煤付着
59	1・2次	16-4	土師器鍋	C2 包含層	－	－	－	ハケ？→ナデ？	密	良	にぶい橙	(口)1/12	焙烙
60	1・2次	30-3	陶器蓋	C3 包含層	8.3	1.1	3.7	ロクロナデ→施釉、ケズリ、沈線、孔	密	良	浅黄	7/12	
61	1・2次	41-2	陶器蓋	C2 包含層	18.5	3.8	10.5	ロクロナデ→施釉	密	良	暗褐	(口)4/12 (底)6/12	
62	1・2次	30-4	陶器碗	C2 包含層	7.5	2.6	4.7	ロクロケズリ→施釉	密	良	淡黄	5/12	
63	1・2次	17-2	陶器皿	C1 包含層	11.2	2.1	7.3	ロクロナデ・ロクロケズリ→施釉	やや密	良	灰白	(口)4/12 (底)6/12	
64	1・2次	40-2	陶器皿	C2 包含層	10.9	2.3	4.0	ロクロナデ→施釉、ロクロケズリ	密	良	灰白	(口)6/12 (底)4/12	油煙付着
65	1・2次	30-2	陶器碗	C3 包含層	9.0	6.0	4.2	ロクロナデ→施釉、ロクロケズリ、削出高台	密	良	にぶい赤褐	9/12	
66	1・2次	15-10	陶器碗	C2 包含層	12.0	－	－	ロクロナデ→施釉	密	良	暗褐	(口)2/12	
67	1・2次	41-1	陶器擂鉢	C5 包含層	26.5	10.7	12.5	外面:ナデ→施釉、内面:擂り目→施釉	密	良	赤灰	(口)3/12 (底)12/12	信楽産
68	1・2次	16-2	陶器皿	C2 包含層	14.9	4.0	5.1	ロクロナデ→施釉	密	良	淡青灰	(口)3/12	
69	1・2次	17-5	磁器皿	C1 包含層	9.9	3.1	4.0	ロクロナデ→施釉	密	良	明緑灰	(口)6/12 (台)9/12	

第３表　遺物観察表

番号	次数	番号	形	遺構・層位	口径直径	器高厚さ	底径台径	調整および技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
70	1・2次	15-7	磁器碗	C2包含層	7.4	3.8	4.6	ロクロナデ→施釉	密	良	淡青灰	(口)4/12 (台)6/12	朱書「小仏屋」「平」
71	1・2次	29-3	磁器碗	C2包含層	9.7	5.5	5.5	ロクロナデ→施釉	密	良	明緑灰	(口)3/12 (台)12/12	
72	1・2次	16-1	磁器碗	C1包含層	12.0	6.1	5.2	ロクロナデ→施釉	密	良	灰白	(口)3/12	
73	1・2次	17-3	磁器碗	C1包含層	7.9	6.0	5.0	ロクロナデ→施釉	密	良	明オリーブ灰	(口)1/12 (台)12/12	蕎麦猪口
74	1・2次	29-1	磁器碗	C2包含層	12.0	6.0	4.7	ロクロナデ→施釉	密	良	明緑灰	(口)5/12 (台)12/12	
75	1・2次	29-4	土製品	C3包含層	－	－	－	オサエ	密	良	にぶい橙	12/12	泥面子(石臼形)
76	1・2次	15-8	円筒埴輪	C1包含層	－	－	－	ナデ	粗	良	浅黄	小片	
77	1・2次	22-2	銭貨	C1包含層	3.7	0.1	－	－	－	－	－	12/12	文久永宝、背面に波文 重量:3.57g
78	1・2次	22-5	銭貨	C2包含層	2.4	0.1	－	－	－	－	－	12/12	寛永通宝 重量:4.54g(砂粒付着)
79	1・2次	22-3	銭貨	C2包含層	2.5	0.1	－	－	－	－	－	12/14	寛永通宝 重量:3.77g(錆膨れ有)
80	1・2次	22-1	銭貨	C2包含層	2.5	0.1	－	－	－	－	－	12/15	寛永通宝 重量:3.48g
81	1・2次	27-1	磁器皿	D3 SK16	10.2	2.2	5.4	ロクロナデ→施釉、削出高台	密	良	灰白	(口)2/12 (底)3/12	瀬戸美濃産
82	1・2次	37-2	陶器皿	D2包含層	10.4	2.0	－	ケズリ・ロクロナデ→施釉、(内)櫛描文	密	良	橙	11/12	
83	1・2次	38-4	陶器皿	D2包含層	11.8	2.0	－	ロクロナデ、ケズリ→ナデ	密	良	明赤褐	8/12	内面口縁部に突起が3ヶ所に見られる。
84	1・2次	30-5	陶器皿	D2包含層	11.6	2.5	4.4	ロクロナデ→施釉、ロクロケズリ、(内)櫛描文	密	良	灰白	3/12	油煙付着
85	1・2次	39-2	陶器蓋	D3包含層	8.7	1.9	8.8	ロクロナデ→施釉	密	良	灰オリーブ	7/12	
86	1・2次	38-3	磁器碗	D3包含層	10.6	5.7	4.3	ロクロナデ→施釉、削出高台	密	良	灰白	(口)3/12 (台)9/12	
87	1・2次	38-2	磁器碗	D3包含層	11.7	6.4	4.5	ロクロナデ→施釉	密	良	明緑灰	(口)7/12 (台)12/12	
88	1・2次	29-2	磁器碗	D5包含層	11.3	5.5	4.1	ロクロナデ→施釉	密	良	明緑灰	(口)11/12(台)12/12	内面底部「寿」?
89	1・2次	30-1	陶器瓶	D5包含層	－	－	5.3	施釉、ロクロケズリ、削出高台	密	良	黒	(台)12/12	
90	1・2次	22-4	銭貨	D3包含層	2.3	0.1	－	－	－	－	－	12/12	寛永通宝 重量:2.73g
91	1・2次	35-2	陶器皿	D3包含層	21.8	5.6	7.2	ロクロナデ・ロクロケズリ→施釉	密	良	灰黄	(台)12/12	信楽産 トチン痕
92	1・2次	36-1	陶器擂鉢	D2包含層	37.0	15.0	16.0	外面:ロクロナデ→施釉、内面:ロクロナデ→擂り目	密	良	褐灰	(口)3/12 (底)11/12	信楽産
93	1・2次	39-1	石臼	D2包含層	－	－	－	－	－	－	－	2/12	
94	1・2次	27-6	土師器皿	E1 SD5	10.4	2.1	－	ナデ	やや密	良	にぶい橙	7/12	
95	1・2次	27-5	土師器皿	E1 SD5	11.3	1.8	－	ナデ、オサエ	やや密	良	浅黄橙	(口)4/12	
96	1・2次	27-2	土師器皿	E1 SD6	6.7～6.9	1.6	－	ナデ、オサエ	やや密	良	黄灰	12/12	内外面に黒斑
97	1・2次	27-3	土師器皿	E1 SD6	9.5	1.8	－	ナデ	やや密	良	にぶい橙	3/12	灯明皿 油煙付着
98	1・2次	30-6	土師器皿	E1 SD6	9.7	1.8	－	ナデ、オサエ	密	良	褐灰	12/12	
99	1・2次	33-2	磁器皿	E2 SD6	9.4	3.0	4.2	ロクロナデ→施釉、削出高台	密	良	灰白	5/12	
100	1・2次	26-2	磁器皿	E2 SD6	11.0	2.1	5.7～5.8	ロクロナデ→施釉、削出高台	密	良	灰白	11/12	
101	1・2次	26-3	磁器皿	E2 SD6	9.8	2.2	5.6	ロクロナデ→施釉、削出高台	密	良	灰白	9/12	
102	1・2次	40-1	土師器竈	E1 SK18	30.5	18.5	22.0	工具ナデ、沈線	密	良	にぶい橙	11/12	外面煤付着
103	1・2次	31-1	陶器甕	E1 SK19	26.2	－	－	ナデ	やや密	良	灰褐	(口)2/12	
104	1・2次	33-4	磁器碗	E4 SK22	－	－	4.8	ロクロナデ→施釉、削出高台	密	良	灰白	(台)6/12	

第４表　遺物観察表

番号	次数	番号	形	遺構・層位	口径直径	器高厚さ	底径台径	調整および技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
105	1・2次	26-1	陶器皿	E4 SK22	22.5	3.3	7.0～7.1	ロクロナデ→施釉、削出高台？	密	良	灰白	(口)2/12 (底)12/12	内面底部に砂目痕
106	1・2次	27-4	土師器皿	E6 包含層	11.6	2.0	－	ナデ、オサエ	やや密	良	浅黄橙	6/12	灯明皿 油煙付着
107	1・2次	32-5	土師器皿	E4 包含層	12.0	2.2	－	ナデ、オサエ	やや密	良	浅黄橙	6/12	灯明皿 油煙付着
108	1・2次	32-2	土師器皿	F4 包含層	10.9	2.2	－	ナデ、オサエ	やや密	良	にぶい黄橙	7/12	灯明皿 油煙付着
109	1・2次	31-4	土師器鍋	E1 包含層	33.4	－	－	ナデ	やや密	良	灰褐	(口)2/12	南伊勢系焙烙 煤付着
110	1・2次	33-1	磁器碗	E1 包含層	12.2	6.6	4.8	ロクロナデ→施釉、削出高台	密	良	灰白	(口)3/12 (台)7/12	
111	1・2次	33-3	磁器皿	F4 SK25	8.8	2.6	3.6	ロクロナデ→施釉、削出高台	密	良	灰白	(口)4/12	
112	1・2次	32-1	鞴羽口	F4 SK25	－	－	－	ケズリ	やや密	良	灰黄褐	―	直径8.2cm
113	1・2次	34-1	磁器碗	F4 SK23	13.7	5.1	7.0	ロクロナデ→施釉、削出高台	密	良	灰白	(口)6/12 (台)12/12	トチン痕
114	1・2次	25-2	陶器擂鉢	F4 Pit11	－	－	13.0	ロクロナデ、内面：擂り目	やや密	良	にぶい赤褐	(底)5/12	
115	1・2次	25-1	石臼	F4 Pit10	－	－	－	―	―	―	―	4/12	
116	3次	51-3	土師器皿	G1 SD7	9.1	1.3	－	ナデ	密	良	浅黄橙7	5/12	
117	3次	52-2	土師器鍋	G1 SD7	－	－	－	ナデ	密	良	橙	(口)1/12	外面煤付着
118	3次	51-8	陶器碗	G1 SD7	14.0	－	－	ロクロナデ→施釉	密	良	黒	(口)1/12	天目
119	3次	51-9	土師器鍋	G1 SK27	－	－	－	ナデ	やや密	良	黄灰	(口)1/12	
120	3次	51-7	陶器碗	G1 SK27	10.0	－	－	ロクロナデ→施釉	密	良	灰ｵﾘｰﾌﾞ	(口)1/12	
121	3次	52-1	陶器鉢	G1 SK27	－	－	－	ロクロナデ→施釉	密	良	灰白	(口)1/12	
122	3次	52-5	陶器瓶	G2 SK28	－	－	2.2	施釉、底面糸切り痕	密	良	明緑灰	10/12	
123	3次	52-7	陶器加工円盤	G1 Pit17	－	－	－	ロクロナデ→施釉、削出高台	やや粗	良	暗褐	12/12	天目
124	3次	53-4	砥石	G1 Pit18	－	－	－	－	－	－	－	－	使用痕
125	3次	51-4	土師器皿	G1 Pit19	10.0	1.5	－	ナデ	やや密	良	橙	(口)2/12	
126	3次	55-5	土師器皿	G5 包含層	7.1	1.3	－	オサエ	密	良	にぶい黄橙	11/12	
127	3次	55-7	土師器皿	G5 包含層	7.3	1.5	－	ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	8/12	
128	3次	55-4	土師器皿	G5 包含層	7.5	1.4	－	ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	9/12	
129	3次	55-6	土師器皿	G5 包含層	7.7	1.4	－	オサエ	密	良	にぶい黄橙	8/12	
130	3次	51-10	土師器皿	G2 包含層	－	－	－	ナデ	密	良	にぶい黄橙	(口)1/12	
131	3次	51-1	土師器皿	G1 表土	9.6	2.1	－	ナデ	やや密	良	にぶい黄橙	7/12	外面に煤付着
132	3次	51-2	土師器皿	G1 表土	9.9	2.4	－	ナデ	密	良	にぶい黄橙	9/12	
133	3次	55-8	土師器皿	G5 包含層	10.0	2.5	－	ナデ、オサエ	やや密	良	にぶい橙	7/12	内外面に煤付着
134	3次	52-3	土師器鍋	G3 表土	41.0	－	－	ナデ	やや密	良	にぶい橙	1/12	焙烙 外面煤付着
135	3次	51-6	陶器碗	G3 表土	10.0	－	－	ロクロナデ→施釉	密	良	暗褐	(口)1/12	天目
136	3次	51-5	陶器碗	G1 表土	12.2	－	－	ロクロナデ→施釉	密	良	黒褐	2/12	天目
137	3次	54-2	陶器鉢	G2 表土	15.8	7.7	15.5	ロクロナデ→施釉、竹管による装飾	やや密	良	黒褐	(口)9/12	信楽産
138	3次	55-2	陶器鉢	G5 表土	－	－	－	ナデ→施釉	密	良	にぶい赤褐	(口)1/12	
139	3次	55-1	陶器鉢	G5 カクラン	10.4	5.3	6.5	ロクロナデ・ロクロケズリ→施釉	密	良	灰白	(口)1/12 (底)7/12	外面煤付着

第５表　遺物観察表

番号	次数	番号	形	遺構・層位	口径直径	器高厚さ	底径台径	調整および技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
140	3次	55-3	陶器擂鉢	G5包含層	28.0	－	－	ナデ、内面:擂り目	密	良	にぶい橙	(口)1/12	内面使用痕 信楽産
141	3次	54-3	陶器擂鉢	G6カクラン	－	－	－	ロクロナデ、内面:擂り目		良	褐灰	(口)1/12	信楽産
142	3次	56-1	陶器甕	G5包含層	26.6	27.7	14.3	ロクロナデ・ケズリ→施釉、貼付高台？	密	良	暗赤褐	11/12	常滑産
143	3次	54-1	陶器甕	G1表土	63.0	－	－	ロクロナデ	やや粗	良	明赤褐	(口)3/12	信楽産
144	3次	52-4	陶器竈？	G3表土	－	－	14.7	ロクロナデ	密	良	灰白	(底)3/12	
145	3次	52-6	陶器碗	G1表土	12.2	3.0	4.6	ロクロナデ→施釉、削出高台	密	良	ｵﾘｰﾌﾞ黄	(口)1/12 (台)9/12	
146	3次	53-3	陶器皿	G1表土	－	－	－	施釉	密	良	ｵﾘｰﾌﾞ灰	(口)1/12	
147	3次	53-1	磁器碗	G3表土	9.7	5.3	3.7	ロクロナデ→施釉、削出高台	密	良	灰白	(口)3/12 (台)6/12	
148	3次	53-2	磁器碗	G3表土	11.0	6.3	4.3	ロクロナデ→施釉、削出高台	密	良	青灰	(口)2/12 (台)2/12	
149	3次	53-5	軒丸瓦	G4包含層	－	－	－	－	密	良	黒	5/12	
150	3次	56-2	銭貨	G5包含層	2.5	0.1	－	－	－	－	－	12/12	寛永通宝 重量:2.72g(砂粒付着)
151	3次	53-6	銭貨	G3表土	2.3	0.1	－	－	－	－	－	12/12	寛永通宝 重量:1.84g(砂粒付着)
152	1・2次	9-3	土師器皿	A2 SD1横	9.3	1.9	－	ナデ	密	良	にぶい黄橙	12/12	祭祀関連遺物
153	1・2次	6-2	土師器皿	A2 SD1横	10.6	1.8	－	ナデ	密	良	にぶい黄橙	10/12	祭祀関連遺物
154	1・2次	9-2	土師器皿	A2 SD1	9.8	1.6	－	ナデ	密	良	浅黄橙	12/12	祭祀関連遺物 外面に墨書あり
155	1・2次	9-1	土師器皿	A2 SD1	9.6	1.8	－	ナデ	密	良	浅黄橙	12/12	祭祀関連遺物
156	1・2次	10-4	石	A2 SD1	－	－	－	－	－	－	－	12/12	祭祀関連遺物 自然石
157	1・2次	10-5	瓦	A2 SD1	－	－	－	－	密	良	灰白	1/12	祭祀関連遺物 転用品
158	1・2次	6-3	土師器皿	A3-2 SD2	10.2	1.7	－	ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	4/12	
159	1・2次	10-1	陶器碗	A3-2 SD2	9.8	－	－	施釉	密	良	黒	(口)3/12	瀬戸美濃産 天目
160	1・2次	10-3	加工円盤	A3-2 SD2	－	－	－	－	やや密	良	灰白	12/12	28.03g
161	1・2次	9-6	土師器皿	A3-2 SK5	8.8	2.1	－	ナデ、オサエ	密	良	にぶい橙	4/12	
162	1・2次	10-2	磁器碗	A3-2 SK5	6.2	3.4	2.3	施釉	密	良	暗青灰	10/12	
163	1・2次	9-9	磁器碗	A3-2 SK5	－	－	4.2	施釉	密	良	灰白	(台)3/12	
164	1・2次	9-7	陶器碗	A3-2 SK5	－	－	4.2	ナデ、施釉、貼付高台	やや粗	良	褐	(台)11/12	
165	1・2次	6-4	土師器皿	A3-2 SF1	7.4	1.2	－	ナデ、オサエ	密	良	浅黄橙	9/12	
166	1・2次	9-4	土師器皿	A3-2 包含層	7.5	1.1	－	ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	4/12	
167	1・2次	9-5	土師器皿	A3-2 包含層	9.2	1.4	－	ナデ、工具ナデ	密	良	にぶい橙	4/12	
168	1・2次	9-8	陶器蓋	A3-1 表土	8.3	1.6	4.7	施釉、底部糸切り痕	やや粗	良	黒	9/12	
169	1・2次	11-1	陶器擂鉢	A3-2 包含層	39.2	16.3	18.0	ロクロナデ・ロクロケズリ→施釉、内面:擂り目	やや密	良	褐	(口)4/12 (底)10/12	内面使用痕
170	1・2次	10-6	鞴羽口	A3-2 包含層	－	－	－	－	粗	良	にぶい橙	小片	
171	1・2次	20-1	石臼	A3-3 表土	－	－	－	－	－	－	－	6/12	
172	立会	65-2	磁器碗	No.1	－	－	3.6	ロクロナデ→施釉	密	良	青	(台)12/12	朱書「花木や」
173	立会	65-1	陶器皿	No.2	11.4	2.3	6.8	施釉	密	良	灰白	(口)2/12 (底)6/12	
174	立会	69-1	銭貨	No.3	2.5	0.1	－		－	良	－	12/12	重量:3.02g(砂粒付着)

第６表　遺物観察表

番号	次数	番号	形	遺構・層位	口径直径	器高厚さ	底径台径	調整および技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
175	立会	65-3	釘	No.3	20.3	－	－		－	良	－	12/12	頭部径:2.8cm 重量:69.70g
176	立会	68-3	土師器皿	No.4	8.5	1.4	－	ナデ	密	良	灰白	4/12	
177	立会	68-2	土師器皿	No.4	9.0	1.4	－	ナデ、オサエ	密	良	浅黄橙	8/12	
178	立会	68-4	土師器皿	No.4	13.0	2.4	－	ナデ	密	良	浅黄橙	2/12	
179	立会	68-5	磁器碗	No.4	11.6	6.1	4.6	ロクロナデ→施釉	密	良	淡青灰	(口)1/12 (台)12/12	
180	立会	69-2	銭貨	No.4	2.4	0.1	－	－	－	－	－		寛永通宝 重量:3.01g(錆膨れ有)
181	立会	61-2	土師器皿	No.5	10.6	1.9	－	ナデ	密	良	にぶい黄橙	4/12	
182	立会	64-1	陶器擂鉢	No.5	33.6	14.4	12.3	ナデ	粗	良	にぶい赤褐	(口)1/12 (底)4/12	
183	立会	63-3	磁器皿	No.6	9.0	2.0	5.2	ロクロナデ→施釉	密	良	灰白	(口)2/12 (底)12/12	
184	立会	62-6	陶器蓋	No.7	6.5	2.4	3.7	ロクロナデ→施釉、ロクロケズリ	密	良	灰白	(口)12/12(底)12/12	
185	立会	63-4	陶器水滴	No.7	7.8	3.8	6.0	ナデ・オサエ・圧痕→施釉、穿孔	密	良	橙・緑	(口)12/12(底)12/12	蜜柑形
186	立会	63-1	磁器碗	No.7	6.3	3.9	2.7	ロクロナデ→施釉	密	良	明緑灰	(口)8/12 (台)12/12	
187	立会	61-5	土錘	No.7	－	－	－		密	良	にぶい赤褐	12/12	重量:6.25g
188	立会	62-4	陶器蓋	No.8	8.3	2.7	4.7	ロクロナデ・ロクロケズリ→施釉	密	良	灰白	(口)ほぼ残	
189	立会	62-5	陶器蓋	No.8	11.2	3.0	6.3	ロクロナデ→施釉、ロクロケズリ	密	良	灰白	(口)4/12 (底)12/12	
190	立会	34-2	陶器皿	No.9	5.7	1.4	2.4	ロクロナデ→施釉、ロクロケズリ	密	良	淡黄	12/12	油煙？付着
191	立会	62-2	陶器碗	No.10	－	－	4.5	ロクロナデ・ロクロケズリ→施釉	やや密	良	褐灰	(台)12/12	
192	立会	61-3	土師器皿	No.11	9.4	1.3	－	ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙	4/12	
193	立会	62-1	陶器杯	No.11	8.4	3.3	4.3	ロクロナデ→施釉、底部糸切り痕	密	良	灰	(口)1/12 (底)12/12	
194	立会	62-3	陶器鉢	No.12	5.8	2.3	4.1	ロクロケズリ→施釉	密	良	明オリーブ灰	12/12	
195	立会	61-4	土師器皿	No.13	9.2	1.7	－	ナデ、オサエ	密	良	にぶい黄橙4	8/12	灯明皿 油煙付着
196	立会	61-1	土師器皿	No.13	9.5	2.2	－	ナデ	やや密	良	にぶい橙	(口)8/12	
197	立会	61-6	土師器皿	No.14土間下	11.4	－	－	ナデ、オサエ	密	良	暗灰黄	4/12	
198	立会	64-2	土師器甕	No.14土間下	36.0	－	－	ナデ、オサエ	粗	良	にぶい赤褐	(口)2/12	
199	立会	61-7	陶器碗	No.14土間下	－	－	5.2	ロクロナデ・ロクロケズリ→施釉	やや粗	良	灰褐	(台)8/12	天目
200	立会	61-8	陶器碗	No.14土間下	11.3	－	－	ロクロナデ・ロクロケズリ→施釉	やや密	良	暗褐	(口)1/12	天目
201	立会	61-9	陶器碗	No.14土間下	11.8	－	－	ロクロナデ・ロクロケズリ→施釉	やや密	良	暗褐	(口)1/12	天目
202	立会	67-2	陶器擂鉢	No.14	36.0	－	－	ナデ、内面:擂り目	粗	良	にぶい赤褐	(口)1/12	信楽産
203	立会	68-1	陶器擂鉢	No.14	－	－	15.3	ナデ、内面:擂り目	粗	良	明赤褐	(底)4/12	信楽産
204	立会	66-2	陶器擂鉢	No.14	－	－	16.0	ナデ、内面:擂り目	粗	良	にぶい赤褐	(底)4/12	信楽産
205	立会	67-1	陶器擂鉢	No.14土間下	30.2	15.1	11.0	ナデ、内面:擂り目	粗	良	灰褐	(口)2/12 (底)1/12	信楽産
206	立会	66-1	陶器擂鉢	No.14	36.4	－	－	ナデ、内面:擂り目	粗	良	赤灰	(口)2/12	信楽産
207	立会	63-2	磁器碗	No.14土間下	－	－	4.8	ロクロナデ→施釉	密	良	白	(台)12/12	

第７表　遺物観察表

Ⅴ　結語

1　円筒埴輪について

Ｃ地区の包含層から、僅か１点だけであるが円筒埴輪が出土している。上野城のある丘陵北東隅には、伊予之丸古墳群があり、複数基の古墳が存在していたと考えられている。ここからは円筒埴輪・鉄刀・鏡等が出土しており、５世紀後半と考えられている[(1)]。上野城のある丘陵および周辺では、すでに市街地化しているため伊予之丸古墳群以外の古墳は確認されていないが、今回の円筒埴輪の出土は、丘陵の南側にも古墳が存在していた可能性を示唆するものであろう。

2　城下町以前の状況について

上野城下町の本格的な開発は、慶長13(1608)年の藤堂高虎の伊賀国入部に始まるとされるが、上野城の成立以前には、上野城が築かれた丘陵地に平楽寺・薬師寺の寺院が建立されていたとされる。

今回の調査で確認された遺構の大半は、江戸後期もしくは幕末期の遺構であり、中世に遡るような遺構や遺物は確認されなかった。Ｈ地区やＧ地区では、城下町の町割りと方向を異にする溝が確認されているが、これらには遺物が伴わず、城下町以前の遺構としては積極的に評価出来ない。城下町の度重なる開発により、中世以前の遺構面が削平されている可能性も十分に考えられるが、中世の遺物が全く出土していない状況を考えると、中世以前の遺構は極めて少なかったのではないかと推測される。中世寺院およびその周辺施設については、上野城のある丘陵域にとどまり、丘陵南側の台地部までは開発が及んでいなかったのではないだろうか。

3　城下町の遺構について

今回の調査では、調査坑の幅が３～４m程と狭く、建物などの遺構を復原することは出来なかった。調査地も、東ノ堅町筋沿い部分であることから、ほとんどが町屋の入り口部分か、屋敷地の東端部分にあたり、十分に遺構を確認できなかった事にもよる。しかし、上野城下町には、多数の絵図[(2)]が残されており、ここではこれらの絵図を参照しながら、各地区の様相を検討したい。

調査が行われたＢ～Ｄ地区は本町もしくは東町から紺屋町にあたる部分であり、多くの絵図に「町屋」との記述が見え、町人町屋があったことが窺える。東大手門の門前は、奈良街道の宿駅であり、伊賀街道・名張街道の発着駅でもあったことから、本陣も兼ねた問屋場や馬継場が設置されて大いに賑わっていた。そのため、豪商や文化人も多く居住していたと言われている。出土した遺物を見ると、筆入れを模した水滴や呂宋瓶掛火鉢など奢侈品が散見され、染付碗など遺物量も多く、町人の華やかな生活ぶりが窺える。磁器碗には「小佛屋」や「花木や」といった屋号が朱書きされるものもあり、注目される。また、Ｃ地区では、鋳造関連遺構の確認されており、ここで小規模な鉄製品生産が行われていたものと考えられる。

Ｈ・Ｅ地区には、忍町と呼ばれた部分で、武家屋敷が所在した部分である。城下町図を見ると「福永弥五右衛門下屋敷」や「青木忠兵衛」など17人の藩士の名が見え、幕末まで一貫して武家屋敷が存在している。Ｅ地区では屋敷地を区画する様な溝が確認されており、武家屋敷は溝や築地によって囲まれていた可能性が考えられる。この地区では遺物の出土が少なかったが、これは調査区が狭い事もあるが、調査地が屋敷地の端にあたり、町屋部分と違い生活空間では無かったためであろう。

Ｆ・Ｇ・Ａ地区は、城下町図によると江戸前期は「か屋町」と記載されているが、幕末から明治初期には「恵比須町」と記載されている。これは、元禄７(1694)年の大火を契機に、町名が改称されたためで、文久の城下町図には恵美須神社の記載も見られる。この地区には「農人」の記載があり、上野村の農人地であったことが窺える。また、Ａ地区の範囲内には藤堂藩に仕えた医師の「宇佐美春庵」の名も見える。Ａ地区では焼土部分が多数見られ、椀形鉄

	B地区	C地区	D地区	H地区	E地区	F地区	G・A地区
寛永年間城下町図［寛永1］	本町 魚町	魚町 こん屋町	こん屋町	福永弥五右衛門 下屋敷	福永弥五右衛門 下屋敷	か屋町	か屋町
寛永年間城下町図［寛永2］	町屋	町屋	町屋	福永弥五右衛門 下屋敷	福永弥五右衛門 下屋敷	か屋町	か屋町
慶安年間城下町図［慶安1］	町屋	町屋	町屋	西野佐右衛門 シモヤシキ	西野佐右衛門 シモヤシキ	かや町	かや町
元禄年間城下町図	町屋	町屋	町屋	柴田平兵衛		農人	農人
享保年間城下町図［享保1］	町屋	町屋	町屋	本庄源太	青木忠兵衛	農人	農人 宇佐美春庵
享保年間城下町図［享保2］				浜田与三右衛門 神尾小弥太	青木忠兵衛		
享保年間城下町図［享保3］	町屋	町屋	町屋	浜田与三右衛門 神尾小弥太	青木忠兵衛	農人	農人 宇佐美春庵
享保年間城下町図［享保4］	町屋	町屋	町屋	浜田与三右衛門 神尾小弥太	青木傳八	農人	農人 宇佐美春庵
享保年間城下町図［享保5］	町ヤ	町ヤ	町ヤ	浜田与三右衛門 神尾六郎右衛門	青木傳八	農人	農人 宇佐美春庵
宝暦4年城下町図	町や	町や	町や	中矢文左衛門 友田角左衛門	服部儀兵衛	町や	町や・農人 宇佐美春庵
文化年間城下町図［文化2］	東町 魚町	魚町 紺屋町	紺屋町	福本常左衛門 久世幸太夫	栗田清左衛門		宇佐美春庵
文化年間城下町図［文化3］	町ヤ	町ヤ	町ヤ	福本太兵衛	栗田清左衛門	町ヤ	町ヤ
嘉永七年城下町図	東町 魚町	魚町 紺屋町	紺屋町	菊山円庵 和田源五郎	白井菊五郎 新屋敷三軒		
文久年間城下町図	町ヤ	町ヤ	町ヤ	菊山円庵 和田靖	白井九郎兵衛	町ヤ	町ヤ 恵比須
明治初期城下町図	東町 魚町	魚町 紺屋町	紺屋町	菊山 和田	白井 長屋	恵美須町	恵比須

第８表　調査区・城下町図対応表（［　］は福井氏の分類による[2]）

滓や鞴羽口なども出土していることから、Ｃ地区同様に町屋内で鉄製品の生産が行われていたものであろう。また、Ａ地区の４ヶ所で土間跡が確認されている。これらは、近現代の整地層直下で確認されていおり、Ａ１区西側で行われた立会調査№.14では、土間層直下で18世紀の天目茶碗が出土していることから、土間遺構は江戸後期から幕末期のものと考えられる。

４　上野城下町の開発について

今回の調査で確認された遺構は、江戸時代後期以降のものが大半であった。土層を確認すると、城下町では３～５回程度の整地が行われた事が窺える。これは上野城下で、再三造成が行われていたことを表している。恵美須町の付近では、延宝年間(1673～1681)や元禄７(1694)年、享保４(1719)年に火事が発生し、それぞれ50～160軒もの家が焼失している[3]。また、嘉永７(1854)年６月15日には大地震が発生し、伊賀地域を中心に三重県各地に被害をもたらしている。特に上野城下町では、多くの家屋が倒壊し、甚大な被害を被っている。こうした災害の度にも大きな造成が行われていた可能性が考えられる。今回の発掘調査では、江戸時代後期の遺構が大半であった。これは、城下町の建設時に大規模な削平が行われた他、再三にわたる開発や災害などによって、造成が盛んに行われた結果、江戸前期以前の遺構が削平されたものと考えられる。

【註】

(1)『伊予之丸古墳発掘調査概報』上野市教育委員会、1962
舘邦典「3-33　伊予之丸古墳群」『上野市史』伊賀市、2005

(2) 絵図については、下記の資料を参考とした。
福井健二『上野城と城下町』伊賀文化産業協会、2004

(3) 上野古文献刊行会編『永保記事略　藤堂藩城代家老日誌』同朋社、1974

Ⅵ　付編　上野城跡立会調査

1　調査の経緯

今回の調査は、平成14年度一般国道163号国補道路交通安全対策(一種)工事に伴い、平成14年12月12日に立会調査を行ったものである。調査地は伊賀市上野西大手町地内で、崇広中学校西側の台地が一段低くなる部分である(第２図16地点)。調査地は現道に隣接しており、安全のため調査坑は幅1.5m×長さ10mの範囲で行った。現地は上野城の外堀が存在していたと考えられる部分で、調査以前には住宅が存在していた。なお、土層図は地表面の高さを０mとして実測したものである。

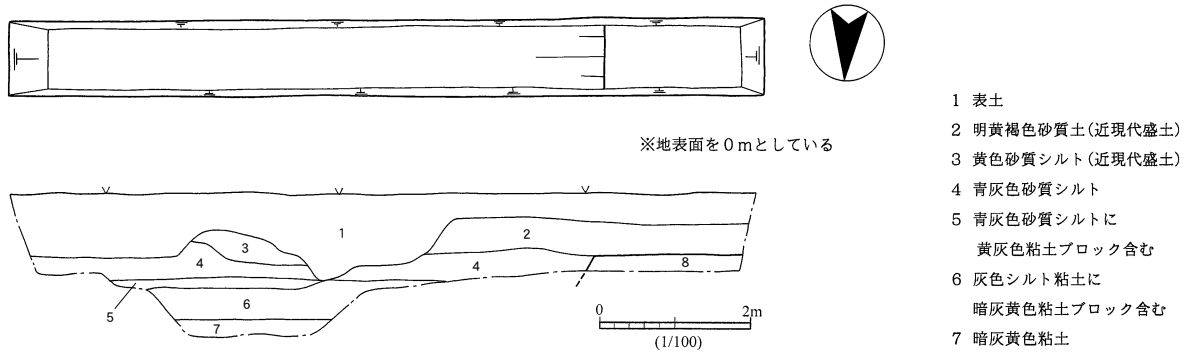
2　調査成果

基本層序は、近現代の整地土が表土下0.8mまで堆積しており、その下で地山と考えられる淡黄色の砂質土を確認した。調査坑の西端より２mの地点で、地山を切り込む深い溝を確認した。西端より７mの地点で、地表下1.8mまで掘削を行ったが、溝の底は確認することが出来なかった。遺物は全く出土せず、石垣なども確認されなかった。

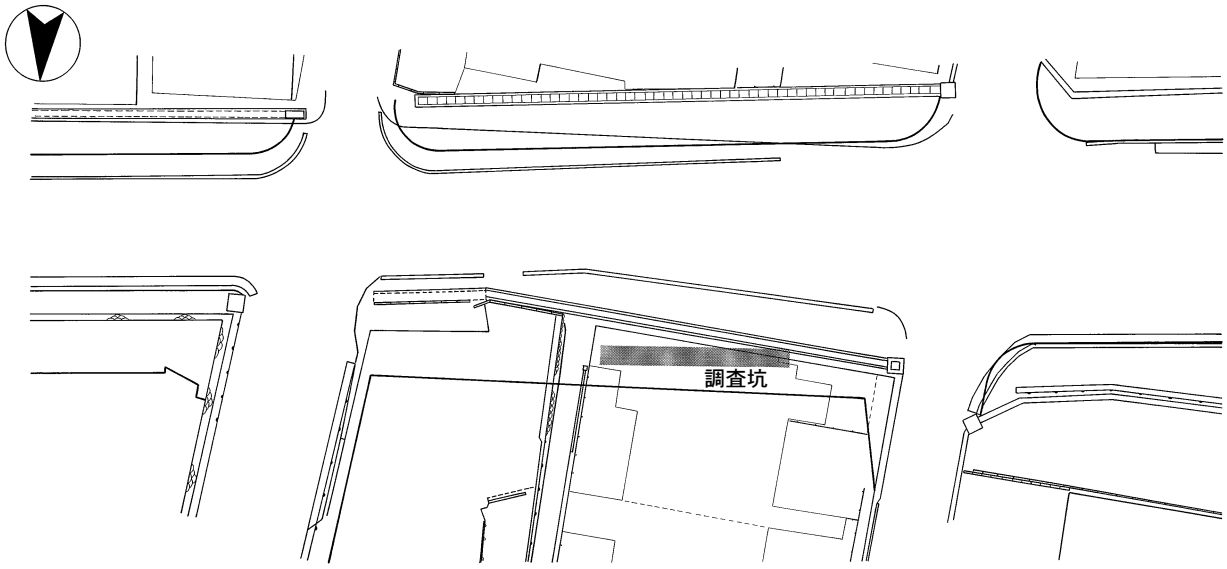
3　小結

今回確認した溝は、幅８m以上・深さ１m以上であった。城下町図によると外堀の幅は12間(約21.8m)で、空堀あったことが窺える。今回確認された溝は、位置や規模から考えて、上野城の外堀に間違いない。落ち込みは堀の西端で、東端は調査地東側の道路付近であろう。落ち込みには石垣の痕跡はなく、絵図や古写真から見ても、この部分に石垣は存在していないと考えられる。

【参考文献】
・福井健二『上野城と城下町』伊賀文化産業協会、2004



第22図　トレンチ平面図・土層断面図（１：100）



第23図　調査区位置図（１：400）

Ｂ１地区（北から）

Ｂ２地区（北から）

図版2

Ｂ３地区（北から）

Ｂ５地区（北から）

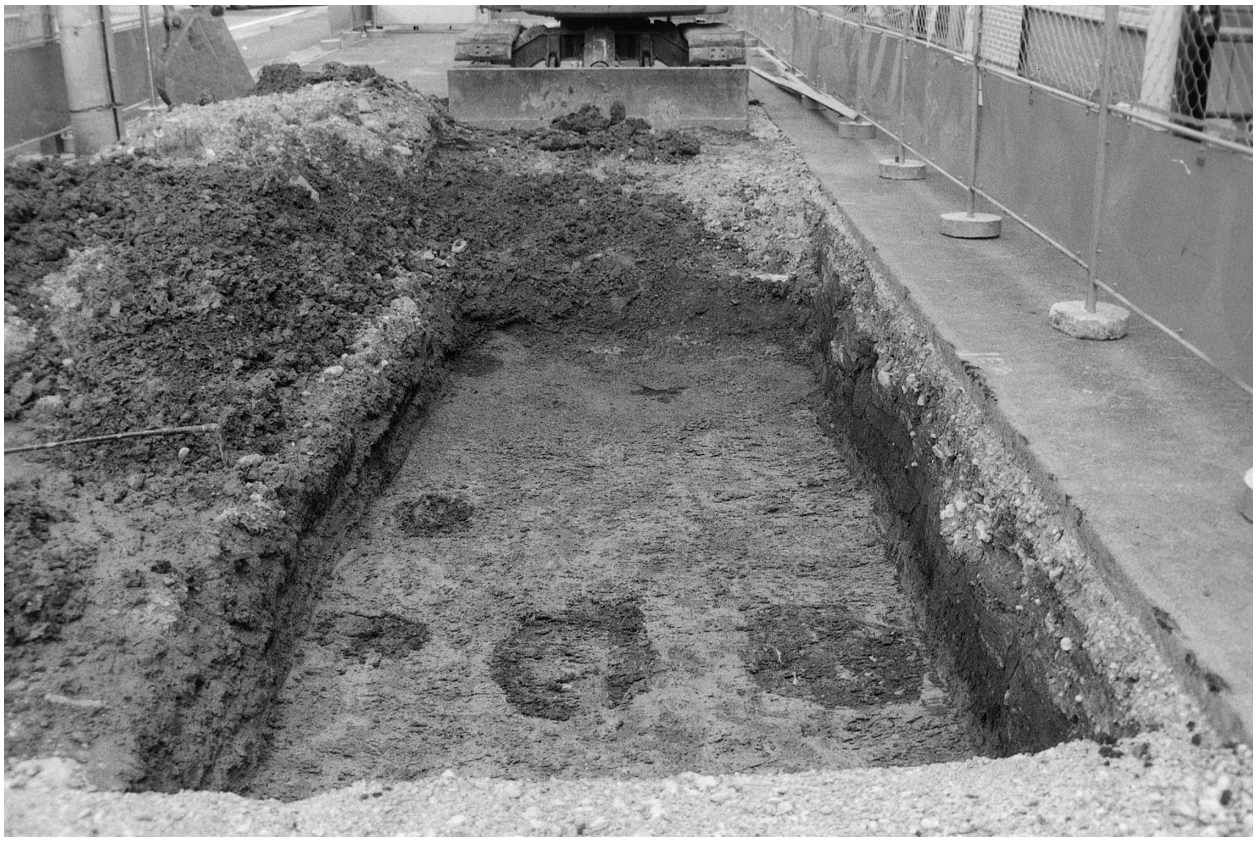
Ｃ地区調査前（南から）

Ｃ１地区（南から）

図版4

Ｃ２地区（南から）

Ｃ４地区（南から）



Ｃ５地区（北から）

Ｃ７地区（東から）

図版6

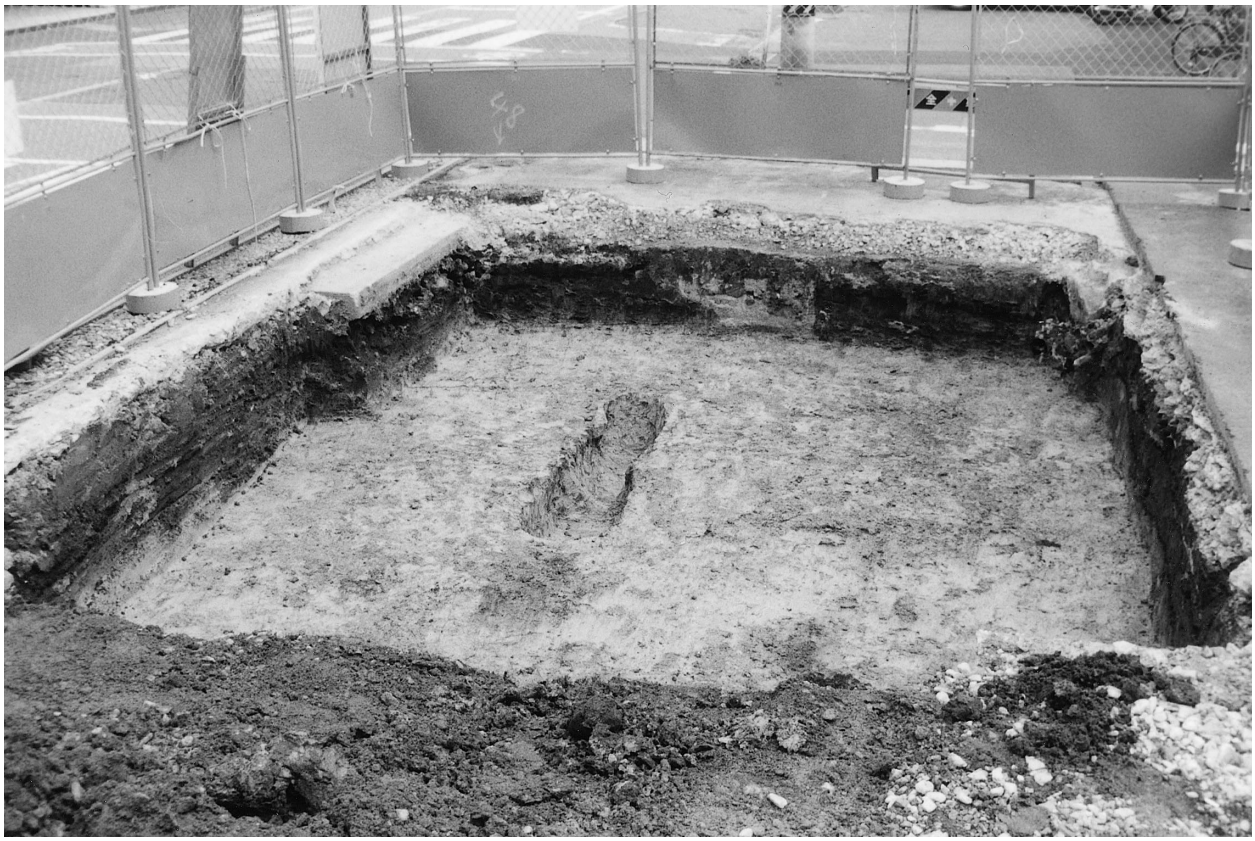
Ｃ８地区（北から）

Ｄ地区調査前（北から）

Ｄ２地区（南から）

Ｄ３地区（南から）

図版8



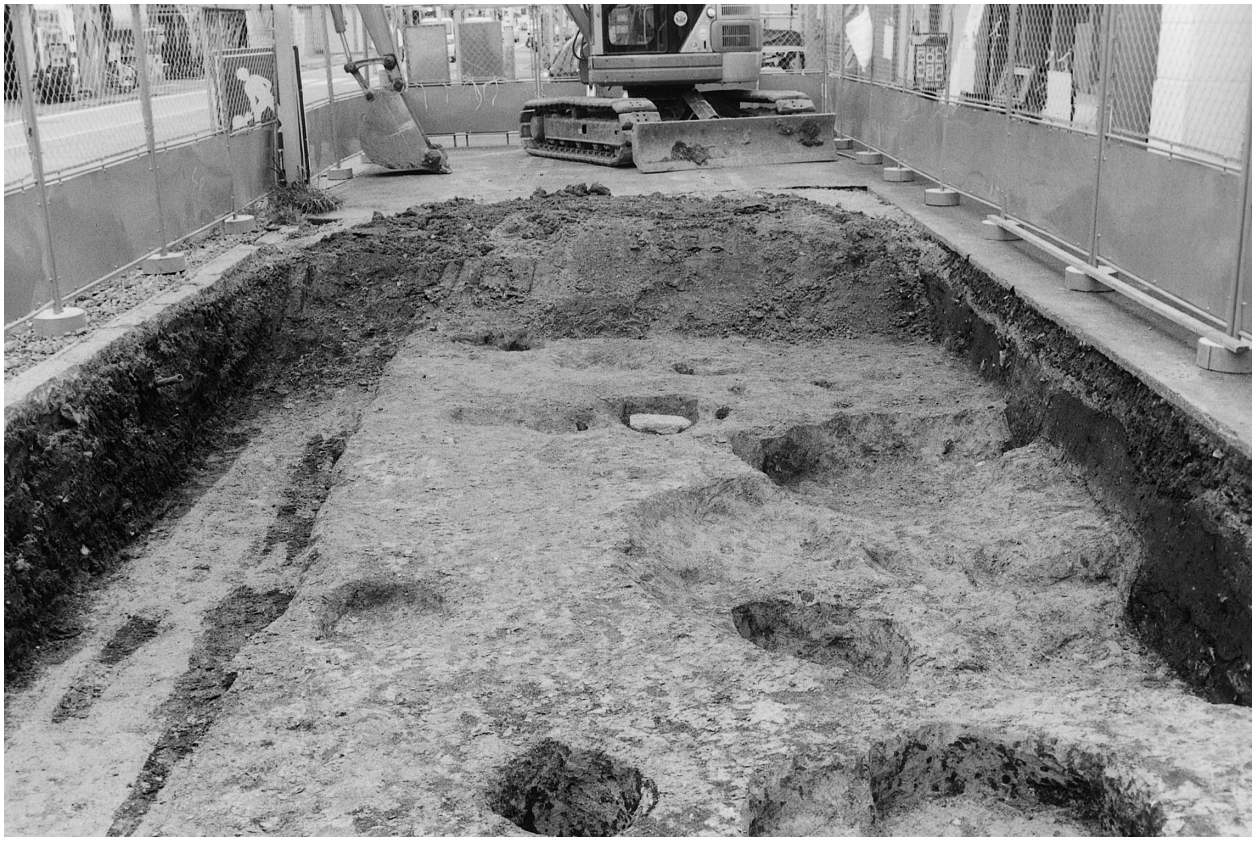
Ｄ５地区（北から）

Ｅ１地区（南から）

Ｅ２地区（東から）

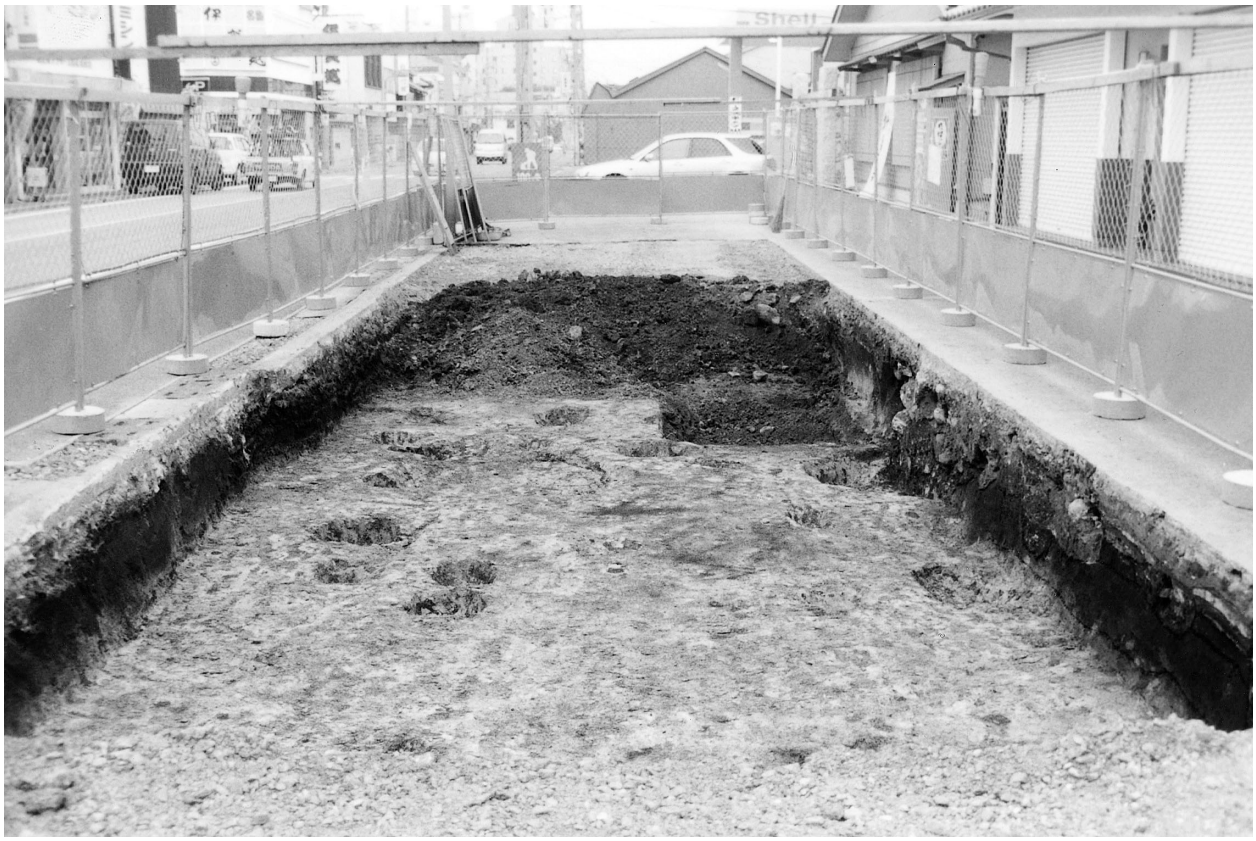
Ｅ３地区（北から）

図版10



Ｅ４地区（北から）

Ｆ２地区（北東から）



Ｆ４地区（北から）

Ｆ５地区（北から）

図版12

Ｈ２地区（北から）

Ｈ３地区（南から）

Ｈ３地区（北から）

Ｈ３地区　ＳＤ８土層断面（東から）

図版14

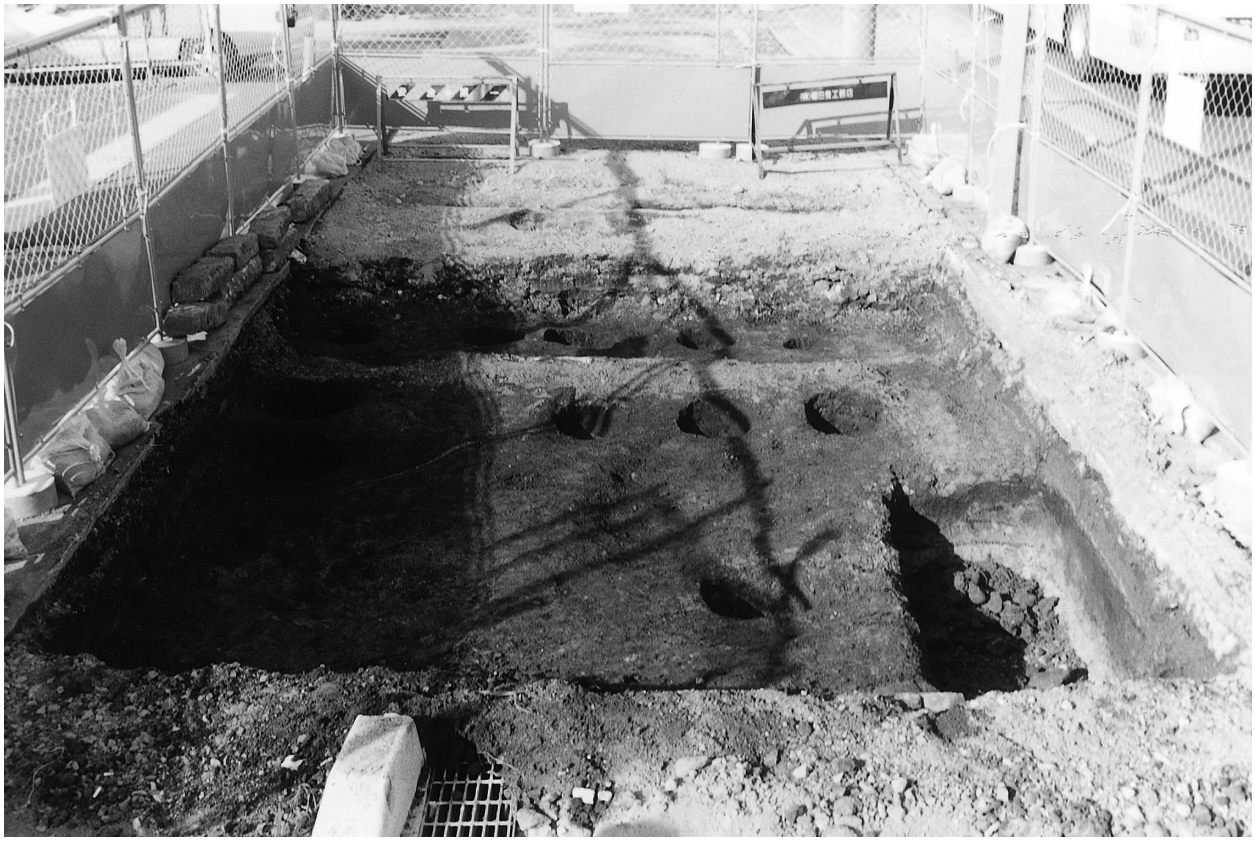
Ｇ１地区上層面（南から）

Ｇ１地区下層面（南から）

Ｇ６地区（北から）

Ａ地区調査前（北から）

図版16



Ａ１地区上層面（北から）

Ａ２地区　ＳＤ３（北から）

Ａ２地区　ＳＤ１遺物出土状況（南から）

Ａ３－１地区上層面（東から）

図版18

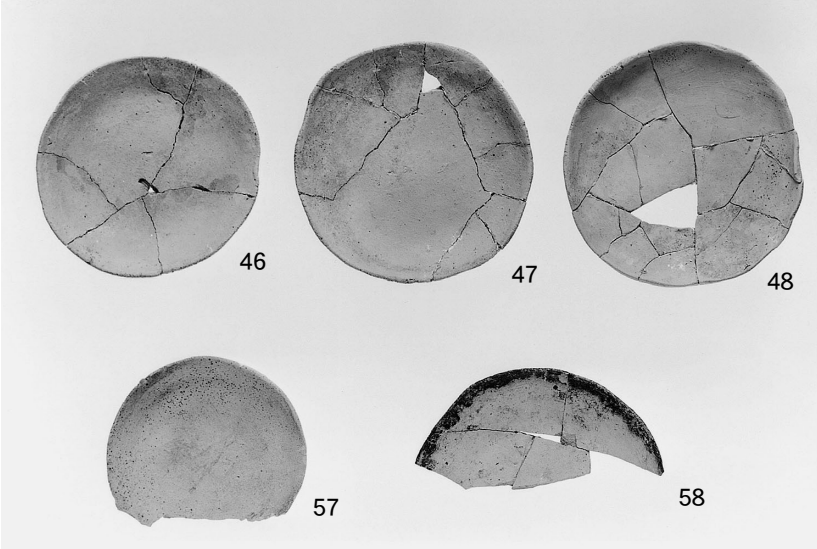
Ａ３－１地区下層面（北から）

Ａ３－２地区上層面（北から）

Ａ３－２地区下層面（北から）

Ａ３－２地区ＳＤ２土層断面（西から）

図版20



B・C地区出土遺物

43

44

55

44

67

75

76

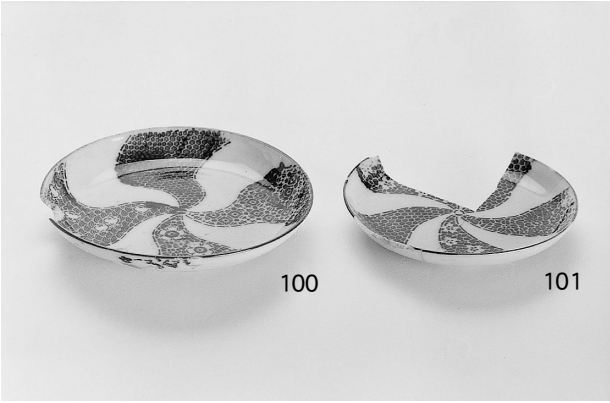
65

74

88

C地区出土遺物

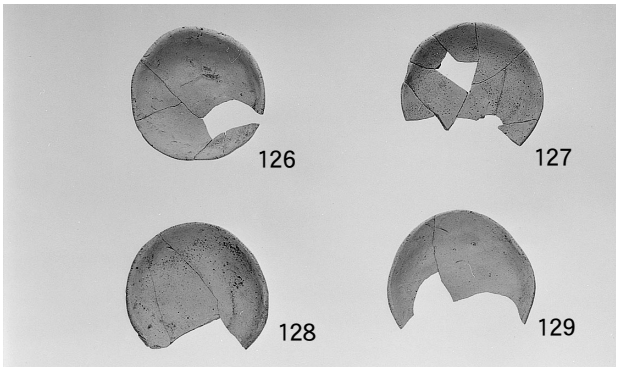
図版22

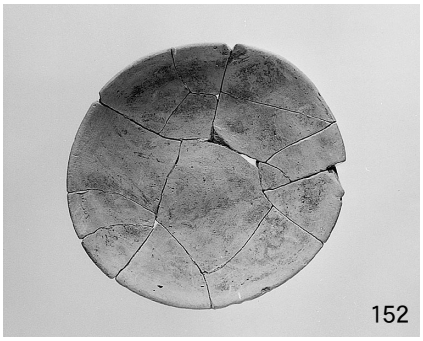


D～F地区出土遺物

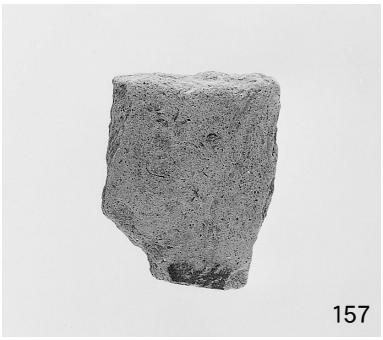
142

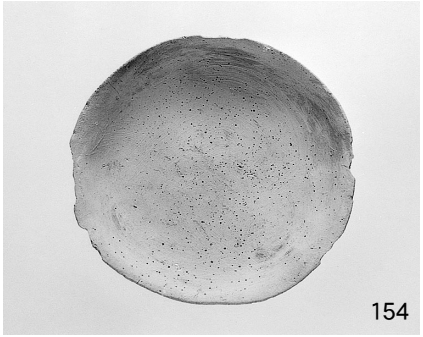
131
132
133

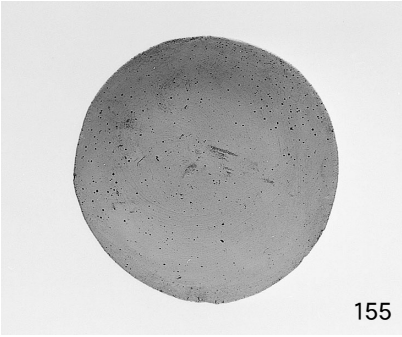

126
127
128
129


152

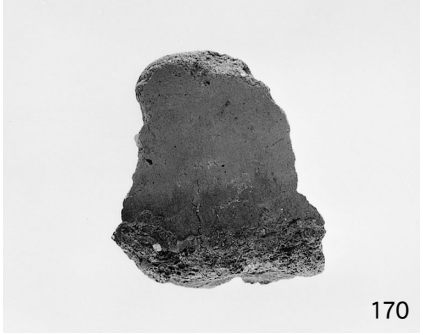
153


157


154


155

156

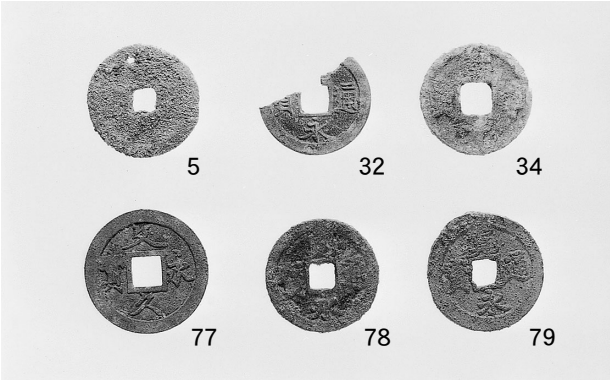

170

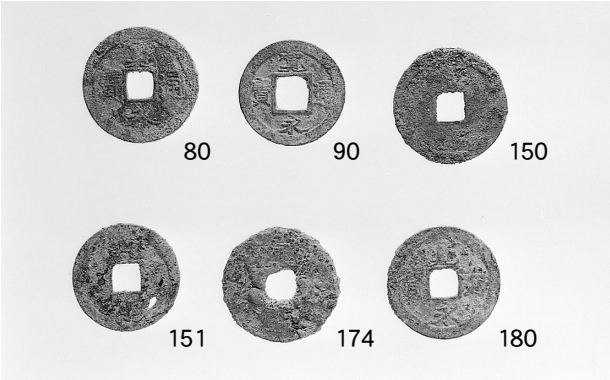
Ｐｉｔ４出土鉄滓

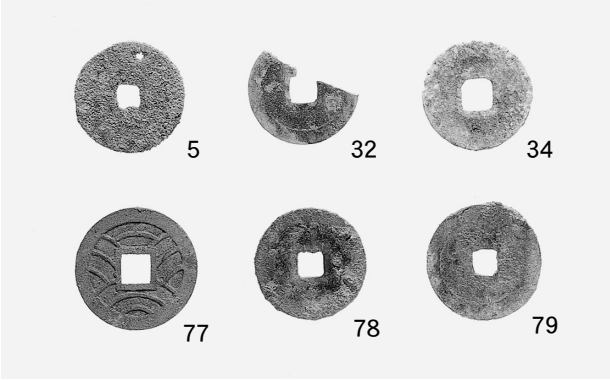
ＳＫ11出土鉄滓

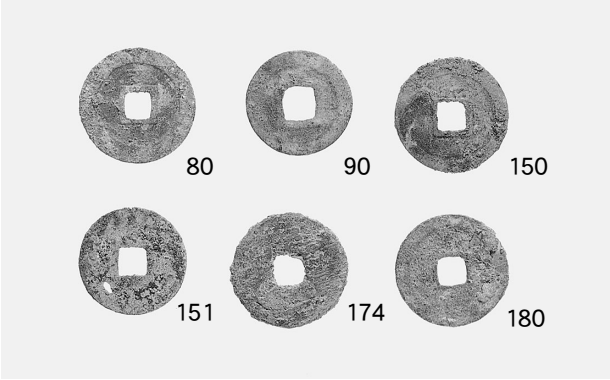
Ｇ～Ａ地区出土遺物

図版24









A地区・立会調査出土遺物

報告書抄録

ふ り が な	うえのじょうかまちいせきはっくつちょうさほうこく
書　　名	上野城下町遺跡発掘調査報告
副　書　名	－東ノ竪町筋(第１～４次)－
巻　　次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告２７３
シリーズ番号	
編 著 者 名	新名強
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒　515-0325　　三重県多気郡明和町竹川５０３　　℡　0596(52)7031
発行年月日	２００６年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
うえのじょうかまち 上野城下町 いせき 遺跡 （東ノ竪町筋第１～４次）	い　が　し 伊　賀　市 うえのひがしまち 上野東町～ うえのえびすまち 上野恵美須町	２４２１６	７５６	34度 45分 49秒	136度 7分 53秒	20001120 ～ 20050512	995	平成12～17年度 街路整備事業 伊賀上野橋新都市線

所収遺跡名	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主　な　遺　物	特　記　事　項
上野城下町遺跡 (東ノ竪町筋第１～４次)	城下町遺跡	近　世	土坑・溝・ピット 鋳造関連遺構 土間など	円筒埴輪 土師器皿・鍋・竈 陶器碗・蓋・擂鉢 磁器碗・皿 銭貨など	上野城下町東大手通りに面した武家屋敷・町屋跡を調査

要約

上野城下町の東大手通り(東ノ竪町筋)に面した部分、およそ1,000㎡を調査。武家屋敷を囲んだと思われる区画溝や鋳造関連遺構、祭祀遺構など、江戸後期から幕末期を中心とした遺構を確認した。出土した遺物には、多くの陶磁器類の他、屋号を記した磁器や精巧な水滴、泥面子などが見られる。今回の調査では幅が狭く、建物跡を復原することは出来なかったが、上野城下町の生活を考える上で、貴重な資料と言える。

三重県埋蔵文化財調査報告273

上野城下町遺跡発掘調査報告

― 東ノ竪町筋（第１～４次）―

2006（平成18）年３月
編集発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　㈲　山　文　印　刷

正　誤　表

頁・項目	誤	正
抄録・遺跡番号	756	1230